

"GANN"

Vol. XXII, No. 4.

December, 1928.

Abstracts.

A Study of a New Therapeutic Method for the Malignant Neoplasma.

(II Report.)

(Plates I-II.)

By

Dr. **Fukuichiro Nakamura.**

The article appeared in No. 3.

On a Tumor-like Teratoma produced by Means of the Inoculation of Embryonic Tissues.

(Plates III-V.)

By

Masao Ide.

The article appeared in No. 3.

Studien über die heteroplastische Transplantation bösartiger Tiergeschwülste.

(Tafeln VI-VIII.)

Von

Dr. Isao Miwa.

(Aus dem Pathologischen Institut der Kaiserlichen Universität, Tokio.)

Durch Vergleichstellung der Resultate der heteroplastischen Transplantationsversuche mit einigen bösartigen Tiergeschwülsten mit der serologischen Artspezifität innerer Organe bzw. Gewebe, über welch letztere demnächst an anderer Stelle berichtet werden möge, ist der Verfasser zum folgenden Schluss gekommen.

1) Bei der Implantation des *Jensenschen* Rattensarkoms in Gehirn, Lunge, Leber, Milz, Niere, Skelettmuskeln und subkutanes Gewebe des Kaninchens sind die Transplantate bis zum 3.-4. Tage im Neste erhalten, oder sie sind geneigt, mehr oder weniger zu wachsen.

Vom 5. oder 6. Tage bis zum 14. oder 15. Tage werden der hohe positive Prozentsatz und das lebhafte Wachstum in der Niere sowie im Gehirn, besonders in der ersteren bemerkt. Dann kommt das Muskelgewebe. Die Zahl der positiven Fälle und das Wachstum der Implantate sind in der Milz und Leber viel geringer, obwohl bei ihnen nach 14-15 Tagen noch positive Fälle bemerkt werden.

Die Lunge und das subkutane Gewebe erwiesen sich als schlechte Nester.

2) Die Transplantation von *Bashfordschem* Mäusekazinom in Kaninchenorgane ergaben weniger gute Resultate. Obwohl die geimpften Tumorgewebe im Beginn der Transplantation in vielen Organen gefunden werden, so wird ihr Wachstum schon nach 3 Tagen nur in Niere, Gehirn und Muskel bemerkt. Daraus

lässt sich erschen, dass die Organe in welchen die heteroplastische Transplantation mit gutem Resultat gelingt, sowohl beim Karzinome als auch beim Sarkome dieselben sind.

3) Durch isoplastische (*Flexnersches* Rattenkarzinom) sowie heteroplastische (*Jensensches* Rattensarkom, *Bashfordsches* Mäusekarzinom, *Katosches* Kaninchensarkom) Transplantationsversuche wurde festgestellt, dass das subcutane Gewebe, ein übliches Nest, weniger geeignet ist. Nur beim Kaninchensarkom wurde die Impfung im subkutanen Gewebe mit relativ gutem Resultate ausgeführt, so dass es für gewisse Art Geschwulst als Nest nicht ganz ungeeignet anzusprechen ist.

4) Die Reaktion in der Umgebung der Transplantate (Auswanderung von Wanderzellen, Bindegewebswucherung, Gefässneubildung) tritt im allgemeinen bei positiven Fällen zurück, obwohl manchmal auch bei negativen Fällen die Reaktion geringgradig sein kann.

5) Zur Erklärung der Frage, warum sich die Niere und das Gehirn bei der heteroplastischen Transplantation als hervorragendes Nest erweisen, hebt Verf. als einen wichtigen Faktor die von ihm festgestellte nahe serologische Verwandtschaft einzelner Organe artfremder Tiere sowie die zwischen der Geschwulst und den als Nest gebrauchten Organen hervor.

(Autoreferat.)



法 國 癌 研 究 會 趣 旨

近時ニ於ケル自然科學ノ進運ハ頗ル著シキモノアリ、從ツテ其基礎ノ上ニ立テル醫學ニ在リテモ研究益々精ヲ加ヘ緻ヲ極ムルニ至レリ、茲ニ於テカ從來ノ醫學の研究ガ多ク分科的ニシテ、同一疾病ノ調査ニ當リテモ各自専門の見知ヨリ互ニ相離レテ其作業ニ從ヒ各方面ノ多數學者ガ提携シテ協同研究スルガ如キハ頗ル稀レナリシニ反シ現代ニ於ケル學會ノ進運ハ此從來ノ研究方法ト共ニ共同的研究ノ緒モ亦自ラ開カル、ヲ見ルニ到レリ癌ノ協同的研究ノ如キ其一例ナリ。

古來宇内ノ隨所ニ見ラレ甚ダ酸鼻ナル難治ノ疾患タル癌ハ統計ニ徴スルニ之ガ爲メニ命ヲ致スモノ年々其數ヲ増加スルノ傾アリ、サレバ泰西ノ研究家ハ久シキ以前ヨリ其疾患ノ本態ヲ究メント企圖シ國家並ニ社會モ亦之ヲ獎勵シ其研究ニ向テ多大ナル援助ヲ與フルノ例甚ダ夥ナカラザルナリ、然モ未ダ尙其真相ヲ捉フルコトヲ得ザルハ痛恨之ニ過ギズト謂フベシ、抑モ癌ナル疾患ハ内科、外科、其他各方面ノ臨牀醫學科ニ於テ扱ハレ其研究ハ解剖組織學の事項ノ外化學の並ニ生物學の事項ニ互リ甚ダ廣汎ナル領域ヲ占ムルハ既ニ知ラル所ナリ故ニ歐米諸國ニ於テハ夙ニ癌ノ如キ大問題ハ學者ノ孤立の研究ヲ以テハ到底其ノ本態ヲ闡明スル期ナキモノナルコトヲ悟リ各方面ノ學者相倚リ

テ其ノ協同研究ヲ遂ゲンコトヲ企テ特ニ癌研究會又ハ癌調査會ナルモノヲ設ケ完備セル研究設備ノ下ニ上記各方面ノ研索ヲ分擔セシメントシテ研究ノ歩武ヲ進メ來リシガ更ニ數年前主トシテ獨逸國學者ノ主唱ニヨリ國際癌研究協會開設セラレ爾來各國ノ研究團體互ニ聯絡ヲ保チ之ガ研究ヲ進メントスルニ至リ我邦學者ニ向テモ先年斯ノ如キ意味ヲ以テ此國際の共同研究ニ加盟センコトヲ懇慫シ來レリ、蓋シ我邦ノ如キハ歐米各國ニ比シ風土並ニ生活、慣習、體質等ニ著シキ差異アルヲ以テ本邦研究者ノ之レニ加リテ此研究ヲ積ムノミニテモ或ハ比較研究上望外ノ結果ヲ齎シ貢獻スルコト尠カラザルベク且ツ我國ニ於テモ年々本病ノ爲メニ鬼籍ニ登ルモノ數萬ヲ下ラザルガ故ニ國家のニモ亦其研究ハ忽諸ニ附スルコト能ハザルモノアリ、サレバ本邦ニ於テモ上記世界ニ於ケル現代醫學ノ趨勢ニ順ヒ又一面人類ノ福祉ヲ増進セシメンガ爲メニ特ニ國際的性質ヲ有スル癌研究會ヲ設立シ、特殊ノ設備ヲ有スル研究所ヲ附屬シ癌研究ノ中央機關タラシメ、又同時ニ治療所ヲ設立シ最新ノ研究結果ヲ應用實驗スルハ實ニ國際の時運ノ風潮ニ鑑ミ科學近時ノ發達ヲ移シテ人類ノ幸福ヲ増進スル上ニ於テ刻下ノ緊要ナル事業タルヲ明ナリ、之本會ノ設立ヲ企テ國際癌研究會ニ加盟シタル理由ナリ。

ス

第十六條 會員タラント欲スルモノハ其氏名現住所ヲ記シ本會

事務所ニ申込ムヘシ

第十七條 退會セント欲スルモノハ其旨本會事務所ニ届出ツヘ

シ

第六章 役員

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總裁 一名

副總裁 一名

會頭 一名

副會頭 一名

理事 七名(内理事長一名)

監事 二名

評議員 若干名

第十九條 本會ハ皇族ヲ推戴シテ總裁トス

副總裁ハ評議員會ノ決議ニ由リ之ヲ推戴ス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事長、理事、監事、評議員ハ會頭ノ推薦ニ由リ總裁之ヲ

囑託ス、但監事ハ他ノ役員ヲ兼スルコトヲ得ス

第二十條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事、評議員ノ任期

ハ二箇年トス、但滿期再選又ハ再囑スルコトヲ得

第二十一條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事及評議員ニ缺

員ヲ生シタルトキハ補缺選舉又ハ囑託ヲナスコトヲ得、補缺

員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第二十二條 會頭ハ本會ヲ總理シ且總會、評議員會ノ議長トナ

ル

副會頭ハ會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキハ之ヲ代理ス

第二十三條 評議員ハ本會概要ノ事項ヲ評議ス

第二十四條 理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其職務ヲ行フ

第七章 會議

第二十五條 總會、評議員會ハ東京ニ於テ之ヲ開ク、但時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十六條 定期總會ハ毎年四月之ヲ開ク、但開會期ハ時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十七條 總會ノ招集ハ會報又ハ新聞若クハ通知書ニ依ツテ

之ヲ行フ

第二十八條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第二十九條 評議員ハ必要ニ應ジ會頭之ヲ招集ス

第八章 雜則

第三十條 本會ハ必要ニ應ジ支會ヲ設クルコトヲ得

支會ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ置ク

書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ従事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

第三十二條 本會ニ金品ヲ寄附シタルモノアルトキハ其氏名ヲ

簿冊ニ登錄シテ永ク本會ニ保存ス

第三十三條 會誌「癡」ハ毎年四回之ヲ發行シ無料ヲ以テ會員

ニ頒布ス

第三十四條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上

ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

社団法人癌研究會定款

明治四十一年四月設立
大正三年二月法人登記
大正三年十一月改正
大正六年四月改正
大正十一年四月改正

第一章 目的及事業

第一條 本會ハ癌ニ關スル研究及研究ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ懸賞論文ヲ募集シ癌研究所、癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集談會ヲ開催スル等ノ實行ヲ期ス

但懸賞論文、癌研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第二章 名稱

第三條 本會ハ社団法人癌研究會ト稱ス

第三章 事務所

第四條 本會ハ事務所ヲ東京市本郷區本富士町貳番地ニ置ク

第四章 資産

第五條 本會ノ資産ハ左ノ如シ

一、癌研究會ヨリ引繼キタル資金

二、寄附金

三、會員ノ會費

四、前項以外ノ諸收入金

第六條 本會ハ前條資産ノ一部ヲ基本金トナスコトヲ得

第七條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ處分スルコトヲ得ス

第八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若クハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ之レヲ保管ス

但場合ニ由リテ評議員會ノ決議ヲ經テ不動產ヲ買入ルルコトヲ得

第九條 本會收支ノ決算ハ翌年ノ定期總會ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第十條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス

第五章 會員

第十一條 本會ノ目的ヲ賛成幫助スルモノハ内外國人ヲ問ハス何人タリトモ會員タルコトヲ得

第十二條 本會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、名譽會員 一、特別會員 一、通常會員

會員ハ本會ニ於テ發行スル會報及報告書等ヲ無料ニテ受クルコトヲ得

第十三條 名譽會員ハ學術上特ニ功績アルモノ又ハ特ニ本會ノ事業ヲ贊助スルモノ及壹千圓以上ヲ寄附シタルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ經テ會頭之ヲ推薦ス

第十四條 特別會員ハ會費トシテ一時二百圓以上ヲ納ムルモノトス

第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金五圓ヲ前納スルモノト

癌

第二十二年第四册 昭和三年十月刊行

原 著

惡性腫瘍ノ治療法ノ研究(第二同報告)

大黒鼠可移植性肉腫ニ於ケル治療實驗報告(附圖第一—第二表)

慶應義塾大學醫學部外科學教室(茂木教授)

同

病理細菌學教室(川上教授)

中 村 復 一 郎

第九章 腫瘍一部切除後凍結セシメテ保存シタル同種腫瘍乳劑

ノ注入實驗

第一節 實驗成績

本實驗ニ於ケル各回ノ注入乳劑量ハ體重每疋一〇・〇瓦ナリ

第一項

注射回数 一回

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

注射後比較的速ニ増大力減衰シ、甲例ニ於テハ五日ニ至リ、乙例ニ於テハ六日ニ至リテ發育停止セリ。甲例ニアリテハ六日後ヨリ、乙例ニアリテハ九日後ヨリ徐々ニ縮小シ、第十五日ニ於テハ、甲例ニアリテハ殘留腫瘍大トナリ、乙例ニアリテハ一・五倍大ニ縮小セリ。剖面平滑ニシテ腫瘍内ニ灰白白色ノ壞死嚢ヲ見ル。又タ周邊ノ一部ニ瘻キ透徹性ヲ缺キタル或ハ脆キ灰白白色層アルヲ見ル。

組織學の所見

肺瘍内部ニ存スル壞死竈ノ多クハ無構造物質ヨリ成レリ。其ノ境界ハ或ハ移行性或ハ所謂暗黒帶域ヲ繞セリ。周邊部ノ透徹性ヲ缺

○中村・悪性腫瘍ノ治療法ノ研究

腫瘍一部切除後二 日間ニ發育セル腫 瘍ノ残留腫瘍ニ對 スル係數	2.0	2.5	3.0	3.0	6.0	3.0	4.0
一回注射量	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
注射回数	1	1	1	1	1	1	1
生存日數	2	2	2	2	2	15	15
發育減退ノ有無	+	-	+	+	-	+	+
發育減退ヲ起セル 迄ノ注射後ノ日數	2	×	2	2	×	2	2
發育停止ノ有無	-	-	+	-	-	+	+
發育停止ヲ起セル 迄ノ注射後ノ日數	×	×	2	×	×	5	6
縮小ノ有無	-	-	-	-	-	+	+
縮小ヲ起セル迄ノ 注射後ノ日數	×	×	×	×	×	6	9
毛細管周圍ヨリノ 退行變性ノ有無	-	-	-	-	-	+	+
腫瘍周邊ノ退行變 性ノ有無	-	-	+	+	-	+	+
境界ノ	嚴	+	+	+	+	+	+
狀況	移行性	+	+	+	+	+	+
	所謂暗黒 帶域	+	+	+	+	+	+

リ。
月経暗黒帶地ヲ繞セリ。周邊部 透散性ヲ缺
キタル部位ニ於テハ、輕度ニ退行變性セル
腫瘍細胞ノ厚薄種々ナル層ヲ見ル。層ノ一
部ハ壞死セル腫瘍細胞ヨリナリ、其ノ一部
分ハ石灰化セリ。退行變性證ニ近キ部位ニ
於テハ、血管ノ擴張セルモノ多ク、又四周
圍ニ腫瘍細胞無クシテ全々赤裸ナルモノア
リ。

第二節 成績

肉○眼○的○所○見○

發育セル腫瘍ノ一部ヲ切除シテ二日
後、同種腫瘍組織劑ヲ體重每疋一〇、
〇瓦ヲ注射セルニ、注射後第二日ニシ
テ死亡セシモノ多カリシモ、亦十五日

生存日數 二日

使用鼠數 五頭

肉眼の所見

移植後十二日乃至十四日ヲ經テ、健康皮下ニ於テ小指頭大乃至拇指頭大トナレル腫瘍ノ一部ヲ切除セリ。手術後二日ニシテ殘留腫瘍ハ二倍大乃至六倍大ニ發育セリ。

注射後二日ニシテ、僅ニ二頭ヲ殘シテ他ノ三頭ハ死亡セリ。注射後二例ニ於テハ發育減退シ、一例ニアリテハ發育ヲ停止シタレドモ、二例ニアリテハ發育ヲ繼續シテ、殘留腫瘍ノ三倍大乃至八倍大トナレリ。剖面平滑ニシテ、或ハ灰白色ノ壞死竈ヲ其中央部ニ認め、或ハ實質ニシテ造構平等ナリ。

組織學的所見

腫瘍内ニハ大小種々ナル退行變性竈アリ。竈ヲ構成スル所ノ腫瘍細胞ノ退行變性ノ程度ハ種々ナリ。竈ハソノ境界ノ移行性ナルモノ最モ多クレドモ、嚴ナルモノ亦少カラズ。又タ狹キ所謂暗黒帶域ヲ繞ラセルモノアリ。周邊部ニ於テ輕度ノ退行變性セル腫瘍細胞ノ集團ヲ見ル。其ノ健態腫瘍細胞群トノ境界ハ、何レモ移行性ナリ。血管ノ多クハ擴張充盈セリ。壞死竈内ニ於テハ其ノ荒蕪セルモノアルヲ見ル。

第二項

注射回數 一回

生存日數 十五日

使用鼠數 二頭

肉眼の所見

移植後十一日乃至十二日ヲ經テ、健康皮下ニ於テ共ニ小指頭大トナレル腫瘍ノ一部ヲ切除セリ。殘留腫瘍ハ二日間ニシテ三倍大乃至

一般ニ移行性ナリ。輕度或ハ中等度ニ變性セル肺瘍細胞ハ、或ハ單獨ニ或ハ數個相集マリテ健態肺瘍細胞間ニ介在セリ。血管ノ擴張充盈セルモノアリ。

第二項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 十四日

使用鼠數 四頭

肉眼の所見

移植後十二日乃至十四日ヲ經テ小指頭大乃至拇指頭大トナレル肺瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。

第一回注射後發育力ニ影響ヲ認メ得ズシテ、徐々ニ増大シツ、アリシニ、第七日乃至八日以後ニ及ビテ發育速度ノ減衰ヲ認メ得ルニ到レリ。減衰ノ率ハ各例ニヨリ等シカラザルモ、日ヲ經ルニ從ツテ高度トナレリ。然レドモ十四日ニ及ビテモ尙ホ發育停止ヲ示セルモノナシ。剖面ニ於テ大小不同ノ不正形ノ灰白色ノ壊死竈ヲ肺瘍組織内ニ認ム。

組織學的所見

肺瘍ノ大部分ハ健態ナル肺瘍細胞ヨリナリテ、内ニ大小ノ不正形ナル退行變性竈アリ。其ノ或ルモノハ壊死セル細胞及無構造物質ヨリナリ、其ノ或ルモノハ其ノ核ノ萎縮シテ濃染シ其ノ原形質ノ輕ク膨大シテえおじんニ淡染スル所ノ肺瘍細胞ヨリ成レリ。是等退行變性竈ト健態肺瘍組織トノ境界ハ、多クノモノニアリテハ所謂暗黒帶域ヨリナレドモ、移行性ナルモノ及ビ嚴ナルモノ亦存セリ。尙健態肺瘍細胞群内ニハ、種々ノ程度ニ變性シタル肺瘍細胞ガ、或ハ單獨ニ或ハ二三集合シテ介在セリ。然レドモ血管周圍ヨリ又ハ肺瘍ノ周邊ヨリ退行變性ノ起リタルベキ像ヲ見ズ。

第二節 各回ノ注入乳劑量體重每珎〇・一五瓦ナリシ場合

第一項

〇中村・惡性肺瘍ノ治療法ノ研究

間生存セシモノアリ。

腫瘍ハ注射後速ニ其ノ發育力ノ減衰セシモノ多ク、或ハ直ニ發育停止ヲ示シ、或ハ五乃至六日ニ至ツテ發育停止ヲ示セリ。縮小ハ六日乃至九日ヨリ之ヲ認メ得タリ。

組織學的所見ニ於テ、腫瘍ノ周邊ヨリ退行變性ノ現ハレタルモノ多ク、注射後一定時間生存シタルモノニ於テハ、腫瘍組織内ニ於テハ壞死竈ト健態腫瘍細胞群トノ境界ノ嚴ナルモノナシ。(第十表參照)

第十章 腫瘍ニ直接作用ヲ加ヘズシテ凍結セシメテ保存シタル同種腫瘍

乳劑ノ注射實驗

第一節 各回ノ注入乳劑量體重毎肝○・一瓦ナリシ場合

第一項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 六日

使用鼠數 三頭

肉眼の所見

移植後十日乃至十二日ヲ經テ、示指頭大乃至拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射後腫瘍ノ發育ニ何等ノ影響ヲ認メ得ザリキ。

剖面平滑ニシテ色淡紅色ヲ呈シ、或モノニ於テハ腫瘍内ニ於テ灰白白色ノ壞死竈アリ。

組織學的所見

腫瘍ノ大部分ハ殆ンド健態腫瘍細胞ヨリ成リ、内ニ大小種々ナル退行變性竈アリ。或ルモノハ無構造物質ヨリ成リ、或ルモノハ僅ニ核ノ諸變化ヲ示セル腫瘍細胞ヨリナル。前者ノ多クノモノ、境界ハ移行性ニシテ、唯小數ノモノニ於テハ嚴ナリ。後者ハ其ノ境界

注射後、一例ニ於テハ發育速度一時減退シタレドモ、三日後ヨリ再び増大シ、殆ンド注射前ノ發育速度ト等シク成レリ。他ノ例ニ於テハ、發育速度ニ影響ヲ認メザリキ。然ルニ第一回注射後、一例ニ於テハ七日、他ノ例ニ於テハ八日ニ及ビ、各例ニ於テ共ニ發育速度ハ減衰ヲ始メ、減退率ハ漸ク高マリ、前者ニアリテハ十二日、後者ニアリテハ十六日ニシテ發育停止ヲ示シ、第十八日ニ及ビテ尙其大サヲ増サバリキ。剖面平滑、中央ニ灰白白色ナル壊死電アリ。

組織學的所見

中央部ニ無構造物質ヨリ成レル大ナル壊死電アリ。其ノ周圍ノ健常腫瘍組織トノ境界ハ、大部分ハ所謂暗黒帶域ヨリナリ、一部移行性ナリ。嚴ナル所ヲ見ズ。一例ニ於テ、腫瘍ノ周邊ニ於テ輕度ナル移行變性、即ち萎縮濃染セル核ヲ有スル腫瘍細胞ノ薄キ層ヲ見ル。血管周圍ヨリノ移行變性ノ起リタルベキ像ヲ見ズ。

第三節 各回ノ注入乳劑量體重每肝〇・二瓦ナリシ場合

第一項

注射回数 一回

生存日數 二日

使用鼠數 二頭

肉眼的所見

移植後十二日ヲ經テ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。増大率ニ影響ヲ認メズ。剖面平滑、髓樣、淡紅色ヲ呈ス。

組織學的所見

健態ナル腫瘍細胞群中ニ小サキ壊死電アリテ、無構造物質ヨリナレリ。其境界ハ一部ハ所謂暗黒帶域ヨリナリ、一部ハ移行性、一部ハ嚴ナリ。輕度ニ移行變性セル腫瘍細胞ハ、或ハ單獨ニ或ハ二三集合シテ、健態腫瘍細胞群内ニ散布セリ。血管ハ擴大セリ。

第二項

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

○中村：惡性肺瘍ノ治療法ノ研究

三四八

注射回数 四回(注射間期一日)

生存日數 七日

使用鼠數 二頭

肉眼の所見

移植後十二日ヲ經テ共ニ示指頭大トナレル肺瘍ヲ貢ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後檢査時迄、肺瘍ノ増大率ニ減衰ヲ認メ得ズシテ、漸次増大セリ。剖面平滑ニシテ、甲例ノ肺瘍ハ中央ニ灰白白色ノ壊死嚢ヲ藏シ、乙例ノ肺瘍ニ於ハ或ハ周邊ニ或ハ中心部ニ、不正形ニシテ灰白褐色ノ斑點ヲ見ル。

組織學的所見

肺瘍ノ中心部ノ壊死嚢ハ、無構造ナル物質ヨリ成リテ、其ノ周圍卽肺瘍組織ノ大部分ハ、健態肺瘍細胞ヨリ成レリ。兩者ノ境界ハ、多クノモノニアリテハ所謂暗帶域ヨリナリ、一部ノモノニアリテハ移行性、一部ノモノニアリテハ嚴ナリ。核ノ萎縮セル程度ナル變性肺瘍細胞ハ、比較的大ナル群ヲナシテ所々ニ存シ、健態肺瘍細胞群トハ移行性ニ相連レリ。一例ニ於テ、肺瘍ノ莢膜ニ接スル一部ニ、其ノ核ノ崩壞或ハ輕度ニ萎縮セル、或ハ其ノ核質ノ核膜ニ凝著セル肺瘍細胞ヲ見ル。其或者ハ原形質内ニ空泡ヲ藏セリ。血管ノ壊死嚢内ニ存スルモノハ、多クハ荒蕪セリ。健態肺瘍細胞群内ニアルモノハ多クハ擴張セリ。

第二項

注射回数 五回(注射間期一日)

生存日數 十八日

使用鼠數 二頭

肉眼の所見

移植後十一日間發育シテ小指頭大乃至示指頭大トナレル肺瘍ヲ貢ヘルモノニ注射セリ。

殆ンド原腫瘍ニ於ケルニ等シ。然レドモ壞死竈ト健態腫瘍組織トノ境界ガ所謂暗黒帶域ヨリ成レルモノ少カラズ。

第二項

注射回数 一回

生存日數 六日

使用鼠數 三頭

肉眼の所見

移植後十二日乃至十三日間發育シテ示指頭大乃至拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射後第一日ニ於テ、發育速度減衰セルモ、其後ノ發育力ハ殆ンド一定ニシテ六日後尙發育ヲ持續セリ。剖面平滑、一例ニ於テ腫瘍組織ノ體側周邊ニ於テ蒼白ナル狹キ層アリ。他ノ例ニ於テ中央部ニハ灰白白色脆弱ナル細小ノ壞死竈ノ散在セルヲ見ル。

組織學的所見

腫瘍ノ中心部ハ無構造物質ヨリナリ、中ニ散在性ニ種々ノ程度ニ變性シタル腫瘍細胞群ノ島嶼狀ニ散在セルヲ見ル。カハル壞死竈ト健態腫瘍組織トノ境界ハ、何レモ所謂暗黒帶域ヨリナレリ。尙健態腫瘍細胞間ニ小ナル退行變性竈ノ散在セルヲ見ル。肉眼上蒼白色ヲ呈セシ部位、即腫瘍ノ體側ノ一部ハ、顆粒狀ナル核碎屑及輕微ニ變性セル腫瘍細胞ヨリナル。血管ノ擴張充盈セルモノハ、輕微ニ退行變性セル腫瘍細胞群内ニ多シ。

第三項

注射回数 一回(注射間期一日)

生存日數 三日

使用鼠數 二頭

肉眼の所見

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

注射回数 四回(注射間期一日)

生存日數 七日

使用鼠數 一頭

肉眼の所見

移植後十一日間發育シテ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射後著シキ影響ヲ受ケタルヲ示サズシテ漸次増大セリ。剖面平滑、腫瘍組織内ノ所々ニ灰白白色ノ小ナル壊死電アリ。

組織學の所見

健惡腫瘍細胞群中ニハ小ナル壊死電アリテ無構造物質ヨリ成レリ。又タ、細胞外形ハ辛ウジテ見エナガラ、其ノ核ノ既ニ崩壞セシ腫瘍細胞アリテ、電狀ヲナシテ集團セリ。其境界ハ移行性ナルモノ多ク、唯一部ノモノニ於テハ嚴ナリ。二、三ノモノ、境界ハ、尤おじん嗜好白血球及ビルッセル氏小體ノ少數ヨリナレリ。

第四節 各回ノ注入乳劑量體重毎斤五・〇瓦ナリシ場合

第一項

注射回数 一回

生存日數 四日

使用鼠數 二頭

肉眼の所見

移植後十一日間發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射後第一日ニ於テ、腫瘍ノ發育ハ減衰シタレドモ、第二日ヨリ再び復舊セリ。剖面平滑、髓様ヲ呈ス、中央ニ灰白白色ノ壊死電アリ。

組織學の所見

使用鼠數 二頭

肉眼^{〇〇〇〇}的所見

移植後十二日間發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後ニ於テ、既ニ各例ニ於テ發育力ノ僅ニ減退セルヲ認メ得タレドモ、尙徐々ニ増大セリ。剖面平滑ニシテ共ニ實質性ナリ。

組織學^{〇〇〇〇}的所見

腫瘍ノ大部分ハ健態腫瘍細胞ヨリ成リ、中ニ大小不同ノ退行變性竈存在セリ。コレラ變性竈ハ何レモ比較的輕度ニ變性ヲ示セル腫瘍細胞ヨリナリ、健態腫瘍組織トノ境界ハ、或ハ嚴或ハ所謂暗黑帶域ヨリ成レリ。腫瘍ノ周邊或ハ血管ノ周圍ヨリ變性ノ起レルヲ見ズ。

第六項

注射回數 三回(注射間期一日)

生存日數 八日

使用鼠數 一頭

肉眼^{〇〇〇〇}的所見

移植後十二日間發育シテ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後第二日ヨリ發育力減衰シ、漸次其増大速度ヲ減シ、第六日ニ至リテ發育停止シ、死亡時ニハ稍々縮小セルヤノ觀アリ。剖面平滑、一部髓樣淡紅色ヲ呈スレドモ、大部分ハ光澤乏シキ淡黃灰白色ヲ示ス。

組織學^{〇〇〇〇}的所見

腫瘍組織ノ體側ニ於テハ、輕微ニ退行變性セル腫瘍細胞存ス。腫瘍組織ノ周邊ノ大部分ハ、無構造物質或ハ核碎屑ヨリナリ、中ニ多數ノ多核白血球ト少數ノ圓形細胞トヲ混ズ。其境界ハ或ハ所謂暗黑帶域ヨリ成リ、或ハ移行性ナリ。腫瘍ノ中心部ニハ健態腫瘍

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

三五二

移植後十四日間發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射ノ翌日、既に腫瘍ノ發育速度ハ僅ニ減衰セルモ、比較的速ニ増大セリ。剖面平滑、中央ニ灰白白色ニシテ脆弱ナル壊死處アリ。

組織學的所見

原腫瘍ニ於ケル所見トノ間ニ差等ヲ認メズ。

第四項

注射回数 二回(注射間期一日)

生存日數 四日

使用鼠數 二頭

肉眼的所見

移植後十日間發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後ニ於テハ、腫瘍ノ發育力ニ變化ヲ認メザリキ。第二回注射ノ翌日、即死亡當日ニハ、發育力減衰セルヲ認メ得タリ。剖面平滑、一例ニ於テハ平等ニ實質性、他ノ例ニ於テハ中央ニ灰白白色ノ壊死處アリ。

組織學的所見

腫瘍ノ中心部ニ存スル無構造物質ヨリナレル壊死處ノ境界ハ、所謂暗黒帶域ヨリナリ、一小部ハ移行性或ハ嚴ナリ。輕度ニ退行變性セル腫瘍細胞アリテ、或ハ單獨ニ或ハ群衆シテ、健態腫瘍細胞群間ニ存セリ。血管ノ擴張充盈セルモノアリ。サレド其周圍ノ起ルヲ見ズ。

第五項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 五日

ニアリテハ第一回注射後三日ニシテ、腫瘍發育速度ノ減衰ヲ認メ、第一回注射後中例ニアリテハ十一日、乙例ニアリテハ九日ニ於テ發育停止セリ。甲例ニテハ十四日ニ至ルモ大サニ變化ナク、乙例ニアリテハ十三日ニシテ縮小ヲ始メタルヲ知レリ。剖面平滑、腫瘍組織ノ中心部ニ灰白白色ナル壞死電アリ。

組織學的所見

腫瘍組織ノ體側周邊ニ於テハ、何レノ例ニ於テモ種々ナル程度ニ退行變性セル腫瘍細胞群アリ。腫瘍組織ノ中心部ニ於ケル壞死電及上記周邊部ノ變性帶域ノ境界ハ、多クノ部位ニ於テ所謂暗黒帶域ヨリナレドモ、一部ハ移行性ナリ。

第九項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 十九日

使用鼠數 一頭

肉眼的所見

移植後十二日間發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後第七日ヨリ腫瘍ノ發育力減衰ヲ認メ、徐々ニ其ノ減衰速度増加シテ、第一回注射後第十三日ニ至リテ發育停止セリ。第十六日迄ハ腫瘍ノ大サニ變化ヲ認メザリシモ、十七日以後縮小セリ。剖面平滑、實質内ノ所々ニ大小不同ノ灰白白色壞死電ヲ見ル。

組織學的所見

腫瘍組織周邊ノ所々ニ、中等度ニ退行變性セル細胞群アリテ電狀ヲナセリ。原形質ハヤ、明昌トナリ、核ハ萎縮濃染シ、或ハ崩壞セリ。中心部ニ大小ノ壞死電及ビ中等度或ハ輕度ニ退行變性セル腫瘍細胞群アリ。健康腫瘍細胞群トノ境界ハ、或ハ移行性或ハ所謂暗黒帶域ヨリ成レリ。

第十項

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

組織アリ。

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

三五四

第七項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 十二日

使用鼠數 二頭

肉眼^{〇〇〇〇}的^{〇〇〇〇}所^{〇〇〇〇}見^{〇〇〇〇}

移植後十三日間發育シテ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。一例ニアリテハ、第一回注射後第五日ヨリ發育力ノ減衰セルヲ認メ、更ニ徐々ニ減退シテ第十一日ニ至リテ發育停止セリ。一例ニアリテハ、第一回注射後第二日ヨリ發育力減衰ヲ認メ、第五日ヨリ減退率ノ増加急速トナリ、第七日ニ到リテ發育停止シ、第十一日ニ到ル迄其狀態ヲ持續セリ。剖面平滑、其ニ殆ンド其性狀ヲ等シクシ、或ハ大或ハ小ナル灰白白色壊死瘤アリテ散布セリ。

組織學的所見

腫瘍組織ニ無構造物質ヨリ成レル壊死瘤アリ。其境界ハ一部ハ移行性ニシテ、大部分ハ暗黒帶域ヨリナル。腫瘍ノ周邊ニハ、其原形質ノ明昌性増シ核ノ萎縮濃染セル腫瘍細胞多ク存シ、其一部ニハ其核顆粒狀ニ崩壊セリ。

第八項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 十四日

使用鼠數 二頭

肉眼^{〇〇〇〇}的^{〇〇〇〇}所^{〇〇〇〇}見^{〇〇〇〇}

移植後十四日間發育シ示指頭大乃至拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。甲例ニ於テハ第一回注射後五日ニシテ、乙例

組織學的所見

肺瘍組織ノ中心部ハ無構造物質ヨリナリテ内ニ荒蕪セル血管散在セリ。壞死竈ノ周圍ニハ、或ハ厚キ或ハ狭キ所謂暗黒帶域アリテ、周邊部ノ變性肺瘍細胞群トノ間ニ介在ス。肺瘍ノ周邊部ノ肺瘍細胞ハ、種々ナル退行變性像ヲ示ス。即肺瘍細胞ノ核ハ或ハ膨大シ或ハ萎縮濃染シ、其ノ原形質ハ明昌性ヲ増シ或ハ腫大セリ。淋巴球樣細胞アリテ、是等ノ變性セル細胞群ヲバ略々包圍セルガ如ク多數ニ存セリ。尙散在性ニ少數ノ多核性白血球アリ。健態肺瘍細胞ナシ。

第五節 各回ノ注入乳劑量體重肝一〇・〇瓦ナリシ場合

第一項

注射回数 一回

生存日數 二日

使用鼠數 三頭

肉眼的所見

移植後十二日間發育シテ示指頭大乃至母指頭大トナレル肺瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射後、一例ニ於テハ其翌日ヨリ發育停止アリ。然レドモ他ノ二例ニアリテハ、發育力ハ減衰シタレドモ増大ハ繼續シタリ。剖面平滑、大部分ハ淡紅色ニシテ髓樣、中央ニ大ナル灰白白色ノ脆弱ナル壞死竈アリ。其周圍ニ暗赤色ノ狭キ暈ヲ有スルモノアリ。

組織學的所見

肺瘍組織ノ周邊ニ於テ、肺瘍細胞ノ多クハ其原形質ノ明昌性ヲヤ、増セリ。中ニ其核ノ輕度ニ萎縮セルモノアリ。斯カル區域ノ境界ハ移行性ナリ。サレドモ如キ變化ハ、唯一例ニ於テ之ヲ見タルノミ。肺瘍中心部ノ壞死竈ハ無構造物質ヨリナリ、其健態肺瘍組織トノ境界ハ、嚴ナルモノ多クサレドモ移行性又ハ所謂暗黒帶域ヲ繞ラセルモノアリ。少數ノ中性多核白血球散布セリ。多クノ血管ハ擴大充盈セリ。

○中村・惡性肺瘍ノ治療法ノ研究

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 二十三日

使用鼠數 一頭

肉眼の所見

移植後十三日間發育シテ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後八日ニシテ始メテ腫瘍ノ發育力ノ減衰セルヲ認メタリ。減衰速度ハ徐々ニ増シ、第十日ニ至リテ發育停止シ、第十八日より縮小、第二十三日ニ於テハ殆ンド第一回注射時ノ大サトナレリ。剖面平滑、實質内所々ニ灰白白色ノ壊死竈アリ。

組織學の所見

腫瘍組織ノ周邊ニ於テ、高度ニ退行變性セル腫瘍細胞群ヲ見ル。即或ハ體側ニ於テ、或ハ皮膚側ニ於テ、無構造物質或ハ中等度ニ變性セル腫瘍細胞群アリ。腫瘍組織内部ニモ亦タ大小種々ナル同様ノ腫瘍細胞群アリ。是等細胞群ト健惡腫瘍細胞群トノ境界ハ、多クノモノニ於テハ所謂暗黒帶域ヨリナリ、一部ノモノニ於テハ移行性ナリ。

第十一項

注射回数 三回(注射間期一日)

生存日數 二十六日

使用鼠數 一頭

肉眼の所見

移植後十一日間ヲ經テ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。第一回注射後第七日より腫瘍ノ發育力ハ徐々ニ減衰シ、第十三日ニ至リテ發育停止シ、第十五日より縮小シ、日ヲ經ルニ從ヒテ縮小益々速トナレリ。死亡時ニハ第一回注射時ノ六分ノ一大トナレリ。剖面平滑、平等實質性ニシテ色淡紅。

狭キ屑トシテ之ヲ続レリ。

組織學的所見

腫瘍組織ノ周邊ニ於テ、腫瘍細胞ノ相互ノ連絡ハ鬆組トナリ其原形質ハ明昌性ヲ増シ、其核ハ或ハ崩壞シ或ハ萎縮セリ。是等ノ變

第 十 一 表

一回注射量	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.15	0.15	0.15	0.15	0.2	0.2	0.2	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
注射回数	3	3	3	3	3	3	4	4	5	5	1	1	4	1	1	1	1	1
生存日数	6	6	6	14	14	14	7	7	18	18	2	2	7	4	4	6	6	6
發育力減衰ノ有無	—	—	—	+	+	+	—	—	+	+	—	—	—	—	—	+	+	+
注射後發育力減衰ヲ起セル迄ノ日数	×	×	×	7	7	8	×	×	7	8	×	×	×	×	3	3	3	3
發育停止ノ有無	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+	—	—	—	—	—	—	—	—
注射後發育停止ヲ起セル迄ノ回数	×	×	×	×	×	×	×	×	12	16	×	×	×	×	×	×	×	×
縮小ノ有無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
注射後縮小ヲ始めシ迄ノ日数	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
毛細血管周囲ヨリ始メル退行變性ノ有無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+
腫瘍周邊ニ於ケル退行變性ノ有無	—	—	—	—	—	—	+	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+
境界ノ嚴	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—	+	+	+	+	+	—	—	—
移行性	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—	—
境界ノ嚴	—	—	—	—	—	—	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

第二項

注射回数 一回

生存日數 三日

使用鼠數 二頭

肉眼[○]的[○]所[○]見[○]

移植後十二日發育シテ示指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射ノ翌日ニ於テ、既ニ腫瘍ノ發育ノ著シク減衰セルヲ認めタルモ、尙ホ増大ヲ繼續シタリ。剖面平滑、腫瘍組織ノ中央ニハ不正形ノ灰白白色ノ壊死竈アリ、或モノニ於テハ腫瘍組織ノ體側ニ淡紅色ノ狹キ層ヲ見ル。

組織學[○]的[○]所[○]見[○]

腫瘍組織ノ中心ニ近ク、大ナル壊死壞アリテ無構造物質ヨリ成レリ、健態腫瘍細胞トノ間ニハ、所謂暗黒帶域アリテ介在セリ、小ナル退行變性竈ハ、所々ニ散在シ、其境界ハ何レモ移行性ナリ、腫瘍組織ノ周邊ノ一部ニ於テハ、多クノ腫瘍細胞ノ原形質ハヤ、明昌性ヲ増シ、其核ハ輕度ニ萎縮セリ、多核白血球散在ス。血管ノ擴張セルモノアリ。

第三項

注射回数 一回

生存日數 十六日

使用鼠數 一頭

肉眼[○]的[○]所[○]見[○]

移植後十三日間發育シテ拇指頭大トナレル腫瘍ヲ負ヘルモノニ注射セリ。注射翌日ヨリ腫瘍ノ發育ハ急ニ減衰シ、十一日ニ至リテ發育停止シ、其後漸次縮小シテ十六日ニ至リテ小指頭トナレリ。剖面平滑、中心部ニ灰白白色ノ壊死竈アリテ、腫瘍組織ハ淡紅色ノ

第六節 成績概括

實驗成績ハ第十一表トナシテ示セリ。

既ニ第五章ニ於テ記載セルガ如キ各種條件ニ適應セル鼠、即移植後二週間乃至十日ニシテ大人拇指頭大乃至小指頭大ニ發育セル發育力旺盛ナル肉腫ヲ有スル鼠ニ、同種腫瘍乳劑ノ凍結セシメテ保存セルモノヲ、腫瘍ノ遠隔部皮下ニ注入セルニ、略々一定セル影響ヲ腫瘍ニ及ボセリ。

各回ノ注射量ガ體重毎 cc 〇・一瓦トイフガ如ク少量ナリシ場合(第十章第一節)、注射三回(總量〇・三瓦)ニ及ベルモノニ於テモ尙效果少ク、第七日、第八日ヨリ腫瘍ノ發育ノ減衰セルヲ認メタルノミニシテ、觀察十四日ニ及ビテモ尙未増大ヲ持續セリ。

各回ノ注射量ガ體重毎 cc 〇・一五瓦ナリシ場合(第十章第二節)、注射四乃至五回ニ及ビタルモノニ於テ、第七日乃至第八日ニシテ腫瘍ノ發育速度ノ減衰ヲ認メ得タリ。而シテ其ノ或ルモノハ第十二日ニシテ或モノハ第十六日ニシテ發育停止セリ。

各回ノ注射量ガ體重毎 cc 一〇・〇瓦ナル大量ヲ用ヒタル場合(第十章第五節)、試驗動物ノ多クガ、注射後二乃至三日ニシテ死亡シタル爲メニ、其ノ影響ノ有無ヲバ充分ニ認メ得ザルモノ多カリシモ、第十六日迄生存シタル一例ニ於テハ注射後腫瘍ノ發育力ハ急劇ニ減衰シ、第十一日ニ到リテ發育停止シ、爾後縮小ニ傾キテ其ノ速度漸次ニ増加シ、第十六日ニ到リテ小指頭大トナレリ。

自家腫瘍乳劑ヲ用ヒテ最モ效驗ノ著シカリシハ、各回ノ注入量ガ體重毎 cc 五・〇瓦ナル場合(第八章第二節)ナリキ、同種腫瘍ノ乳劑ヲ使用シタル場合ニ於テモ、各回ノ注入量ガ體重毎 cc 五・〇瓦ナリシ場合ニ於テモ亦效果著明ナリキ(第十章第四節)。注射ガ唯一回ナリシ諸例ニ於テハ六日迄、二回乃至三回注射セシ例ニ於テハ五日迄、唯ダ一例ニ於ケルヲ

第十一表 (ツキ)

一回注射量	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
注射回数	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1	1	1	1	1
生存日數	3	3	4	4	5	5	8	12	12	14	14	19	23	26	2	2	2	2	3	3	16
發育力減衰ノ有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
注射後發育力減衰ヲ起セル迄ノ日數	×	×	3	3	2	2	3	5	2	5	3	7	8	7		2	2	2	2	2	2
發育停止ノ有無	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	+
注射後發育停止ヲ起セル迄ノ同數	×	×	×	×	×	×	6	11	7	9	11	13	10	12	2	×	×	×	×	×	11
縮小ノ有無	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+
注射後縮小ヲ始めシ迄ノ日數	×	×	×	×	×	×	8	×	×	×	13	17	18	15	×	×	×	×	×	×	12
毛細血管周圍ヨリ始メテ退行變性ノ有無	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+
腫瘍周邊ニ於ケル退行變性ノ有無	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
境界ノ狀態	移行性 所謂暗黒帶存在		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
隱			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

性帶域ハ、移行性ニ健態腫瘍組織ニ連ル。健態腫瘍細胞群内ニハ、大小不同ナル退行變性竝アリ。其或モノハ無構造物質ヨリ成リ、或モノハ比較的輕度ニ變性セル腫瘍細胞ヨリ成ル。健態腫瘍細胞群トノ境界ハ、多クハ移行性ナレドモ、或ルモノニアリテハ所謂暗黒帶アリテ在セリ。大ナル退行變性竝ニアリテハ、其内部又ハ其境界部ニ石灰沈著ヲ見ル。血管ノ周圍ヨリ輕微ナル退行變性ノ起レルヲ散見ス。

腫瘍内ノ壞死竈ノ境界ノ嚴ナルモノヲ見ズ。八日以上ヲ經タルモノニ於テハ、壞死竈内其境界ニ近キ所ニ於テ、或ハ其ノ内部ニ於テ、石灰沈著ノ起レルヲ見、二十六日ヲ經過セルモノニ於テハ、健態腫瘍細胞ノ隻影ヲ見ズ。

第十一章 成績總括

大黒鼠可移植性肉腫ニ於テ、新鮮ナル自家腫瘍組織乳劑ノ凍結セシメテ保存セシモノ、注射ガ殘留腫瘍ニ及ボス影響及新鮮ナル同種腫瘍組織乳劑ノ凍結セシメテ保存セシモノノ注射ガ一定ノ大サニ發育セル無處置腫瘍ニ及ボス影響ハ、何レノ場合ニ於テモ相當ニ著シクシテ、其ノ適應量（各回注入乳劑量體重每肝五・〇瓦）ヲ用ヒタル場合、何レノ場合ニ於テモ、腫瘍組織ハ著シク退行變性ニ陥リ、次デ縮小スルモノナルコトヲ學ベリ。各回ノ注入乳劑量ガ、體重每肝〇・一瓦トイフガ如キ小量ヲ使用セル場合、自家腫瘍組織乳劑ナリシ場合ニ於テモ、亦同種腫瘍組織乳劑ナリシ場合ニ於テモ、多クハ第一回注射後六日ニ至ル迄ハ、發育速度ニ影響ヲ受クルコト少ナク、其後ニ於テ發育ノ速度ノ減衰ヲ認ムルヲ常トセリ。而シテ前者ノ場合ニアリテハ、第十四日ニ於テ發育停止シ、次デ漸次縮小スルヲ見レドモ、後者ノ場合ニアリテハ、唯發育力ノ減衰ヲ示スノミニシテ發育停止及縮小等ヲ認ムルコトナシ。後者ノ場合ニ於テ、各回ノ注入量ヲ〇・一五瓦トナシテ數回注射シタルモノニ於テ、第一回注射後七日乃至八日ニシテ發育減衰ヲ認メ、減衰度ハ漸次ニ高マリテ、十二日乃至十六日ニシテ發育停止ス。然レドモ縮小セルモノナシ。

極大量即各回ノ注入量ガ體重每肝一〇・〇瓦ナリシ場合、自家腫瘍組織乳劑ヲ注射シタルモノニアリテハ、二日以上ノ生活シ得タルモノナク、二日間生存シ得タルモノニ於テ既ニ腫瘍ノ若干ノ縮小ヲ認

除キテハ、腫瘍ノ發育ニ何等ノ影響ヲ認メ得ザリキ。サレド其以後ニ於テハ、發育ノ減衰セルヲ認メ、六日乃至十二日ニシテ發育ハ停止シ、八日乃至十五日ヲ經テ縮小ニ傾キ二十六日ヲ經タルモノニアリテハ、第一回注射時ノ六分ノ一大ニ縮小セリ。

要スルニ、腫瘍乳劑ノ注入ニハ自ラ適應量アルモノ、如シ。此ノ適應量ヲ使用セル場合、一定時日ノ經過後、腫瘍ノ發育ガ先ヅ減衰シ、次デ其發育停止シ、更ニ次デ縮小ニ傾クモノナルコトヲ知ル。適應量以下ノ量ヲ用ヒタル場合ニ於テハ、效果甚ダ少クシテ、多クノ例ニ於テ相當時日後ニ到リテ、纔ニ腫瘍ノ發育力ノ減衰ヲ認メ得ルニ過ギズ。發育ノ停止或ハ縮小等ヲバ認メ得ルコトナシ。

組織學の所見

第一回注射後六日迄ハ、注射セル腫瘍乳劑ノ量ノ如何及ビ注射ノ回數ノ如何ヲ問ハズ、實驗動物腫瘍ニ於ケル所見ハ、注射セザルモノニ於ケルト同ジ。

腫瘍乳劑ノ少量ヲ注射セシモノニアリテハ、即發育力減衰ノミヲ示シテ未ダ發育停止ヲ起サザリシモノニアリテハ、注射開始後十四日ヲ經ルモ、腫瘍組織内ニ現ハル、所ノ壞死竈ノ境界ハ、或ハ移行性或ハ所謂暗黒帶域ヨリ成リ、或ハ嚴ナルモノ等アリテ種々ナリ。

比較的少量ヲ注射シ腫瘍ノ發育ガ停止セルモノニ於テハ、七日乃至十八日ヲ經過セルモノ、中ニ於テ、腫瘍ノ周邊部ノ細胞ニ退行變性ノ發生セルヲ見、腫瘍内ノ壞死竈ノ境界ハ移行性ナルカ或ハ所謂暗黒帶域ヨリナリテ、嚴ナルモノ殆ンドナシ。

適應量、即各回ノ注入乳劑量ガ體重毎五・〇瓦ナリシ場合ニ於テ注射開始後六日ニ及ビタルモノニ於テ、既ニ腫瘍ノ壞死竈ノ境界ハ移行性ナルカ、又ハ所謂暗黒帶域ヨリナリテ、唯ダ稀ニ嚴ナルモノヲ見ルコトアルノミ。注射開始後六日以上ヲ經過セルモノニ於テ、腫瘍組織ノ周邊ニ於テ又ハ血管ノ周圍ヨリシテ、退行變性ノ起レルヲ見ルノミナラズ、

第三類。退行變性輕度ナル腫瘍細胞ガ、或ハ大小ノ群ヲナシ、或ハ單獨ニ散布セリ。而シテ各類ハ、或ハ(第一)腫瘍實質内ニ起リ、或ハ(第二)腫瘍周邊部ニ起リ、或ハ(第三)血管周圍ニ於テ起レリ。無操作ノ同種腫瘍組織内ニモ亦タ起ルモノナレドモ、其ノ境界ハ第一類甲ニ屬スベキモノ多ク、乙或ハ丙ニ屬スルモノハ比較的寡シ。但シ生存時日ノ長キニ從ツテ増加スルモ、本實驗ニ於テハ、注入腫瘍乳劑ノ種類ノ如何ヲ問ハズ、發育力ノ減衰ヲ示シタル例ニ於テハ、退行變性電ノ境界ノ乙又ハ丙ニ屬スルモノ多クシテ、甲ニ屬スルモノ比較的少シ、腫瘍ノ發育ガ停止シ、或ハ腫瘍ガ縮小セルモノニアリテハ、其ノ組織内ニ存スル退行變性電ノ境界ノ甲ニ屬スルモノヲ見ズ(第九、第十、第十一表參照)。

退行變性電或ハ退行變性細胞群ノ存在部位ハ、發育力ノ減衰ヲ示サザリシモノニ於テハ必ズ腫瘍内部ニ存在シ、周邊ニ存スルモノヲ見ズ。發育力ノ減衰ヲ示セルモノニ於テモ、尙腫瘍内部ニノミ存在スルコト多シ。發育停止又ハ漸次縮小ヲ示シタルモノニ於テハ、腫瘍組織ノ周邊ノ或ハ一側ヨリ或ハ全周ヲメグリテ、退行變性現ハレ、縮小ノ著シキモノニ於テハ、全周圍ハ強キ壞死ニ陥リ、相當ノ時日ヲ經過シテ縮小ノ著シク進行シタルモノニ於テハ、或ハ腫瘍中央ニ若干ノ健態腫瘍細胞群存シ或ハ輕度ニ退行變性セル腫瘍細胞ヲ存スルニ過ギズ。

第十二章 批判及ヒ考案

余ハ本章ニ於テ、實驗ノ成績ヲ綜合觀察シテ其ノ意義ノ如何ヲ考ヘ、其ノ意義ノ如何ニ關スル所信ヲ敘述セント欲ス。注入乳劑ガ腫瘍ニ及ボス影響ハ、其ノ自家腫瘍組織乳劑タルト同種腫瘍組織乳劑タルトヲ問ハズ、發育減衰、發育停止、縮小等トシテ現ハル。然レドモ自家腫瘍組織乳劑ノ注入ノ場合ト

メ得タリ。同種腫瘍組織乳劑ヲ使用シタルモノニアリテハ、注射後三日乃至十六日間生活シ、短時日ヲ經タルモノニ於テ既ニ發育力ノ減衰、發育ノ停止等ヲ認メ、第十一日ヨリ腫瘍ノ縮小スルヲ認メ得タリ。各回注入乳劑量ガ體重毎 $5 \cdot 0$ 瓦ナル時ハ、實驗動物ハ何等ノ障礙ナクシテ生活シ得ルモノノ如ク、其成績ヲ綜合スルニ、自家腫瘍組織乳劑注射後ニ於テハ、注射後第二日乃至第六日ヨリ腫瘍ノ發育力ノ減衰ヲ認ムルコトヲ得、就中第二乃至第三日ヨリシテ既ニ發育力ノ減衰ヲ認メ得タルモノ多シ。其減衰率ハ徐々ニ昇騰シ、注射回數ノ如何ヲ問ハズ注射開始後第六日乃至第十日ニシテ、腫瘍ノ發育ハ停止シ、第十日乃至第十六日ヨリ縮小ヲ始ムルモノ多シ。第六日乃至第十日ヲ經過シテ發育停止ヲ來サルモノナシ。同種腫瘍乳劑注射ノモノニアリテモ、亦タ腫瘍ノ發育力ノ減退ハ注射開始後第二、第三日ニ至リテ既ニ認メ得タルモノ多ク、唯ダ若干ノモノニアリテ第五或ハ第七日、第八日ニ到リテ發育力ノ減衰ヲ示セリ。注射開始後第六日乃至第十三日ニシテ腫瘍ノ發育ハ停止シ、第八乃至第十八日ヨリ縮小セルヲ認メ得タリ。

組織學的所見

腫瘍組織内ニ起レル退行變性像ハ、次ノ數種ニ區分スルコトヲ得ベシ。

第一類。強度ナル退行變性ニシテ、變性竈ハ壞死ニ陥リテ無構造物質ヨリ成ル。健態腫瘍組織トノ境界ハ、(甲)嚴ナルコトアリ、(乙)移行性ナルコトアリ、(丙)核碎屑及高度ニ變性シタル腫瘍細胞及諸種ノ細胞ノ密集ヨリ成レル帶域、即チ所謂暗黒帶域ヨリ成ルコトアリ。

第二類。退行變性中等度ナル腫瘍細胞ガ、或ハ大小ノ群ヲナシ、或ハ單獨ニ散布セリ。

種々ノ量ヲ注射スル場合、亦タ前記ノ場合ニ於ケルト略々同様ナル肉眼上及病理組織學上ノ變化ヲ示ス。サレド其現ハル、時期ハ幾分遲シ、即、腫瘍ガ受クル所ノ影響ハ比較的顯著ナラズ。

四、即注入腫瘍乳劑ノ作用ハ、抗原トシテノ意義ヲ帶ビ、實驗動物腫瘍ガ受クル所ノ影響ノ本態ハ、免疫發生ナリト云フベシ。

五、余ハ大黒鼠ノ可移植性肉腫ガ、自動免疫ニヨリテ治癒ニ傾キ、或ハ治癒セル事實ニ據リテ、人體腫瘍ノ自動免疫療法ノ有望ナルベキヲ惟フニ傾ケリ。而シテ自家腫瘍組織ヨリ作レル乳劑ノ輸達ガ、恐ラク最モ適宜ナルベキヲ惟フ。

稿ヲ終ルニ臨ミ、懇篤ナル指導ト鞭撻トラ賜ハリ、且ツ校閲ノ勞ヲトラレタル恩師川上教授並ニ不斷ノ鞭撻ヲ賜ハリ且ツ校閲ノ勞ヲトラレタル恩師茂木教授ニ深甚ナル謝意ヲ表ス。

主 要 文 獻

- 1) 中村健一郎、醫學中央雜誌 第二十六卷、第六號、第七號、昭和三年三月・四月。 2) Kawakami, Nakamura, Takei, Japan Medical World, May, 1927, Vol. VII, No. 5. 3) 志賀潔、日新醫學、第一年、第二號。 4) 吉岡健三郎、慶應醫學、第五卷、第六號、大正十四年六月。 5) 藤澤重代藏、京都醫學雜誌、第十六卷、第九號、大正八年九月。 6) 小口敏英、醫學新聞、第千百六十二號、大正十四年四月。 7) Landsteiner, Minch. Med. Wochenschrift, No. 40, 1902, & Wien. Kl. W. Nr. 46, 1901. 8) 藤澤壽吉、日本外科實函、第一卷、大正十三年五月。 9) 松田邦三郎、日本外科實函、第四卷、第四號、昭和二年七月。

附圖說明

第一圖、實驗操作ヲ加ヘザル壞死瘤

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

同種腫瘍乳劑ノ注入ノ場合トハ、其影響ノ程度ニ自ラ等差ノ存スルコト前章ニ於テ詳述シタル所ノ如シ。前者ノ場合ニ於テ比較的顯著ニシ後者ノ場合ニ於テ比較的顯著ナラズ。蓋シ注入乳劑ノ性狀ガ實驗動物ノ腫瘍組織ニ最モ近似セル場合ニ於テ、注入ノ影響ハ最モ顯著ナリトイフコトヲ得ベシ。之レ、注入乳劑ノ作用ガ抗原トシテノ意義ヲ帶ビタルモノナルコト、及ビ實驗動物ノ腫瘍ニ及ボセル影響ノ本態ガ特種免疫ノ發生ナルコトヲ教ユル事實ナリ。注入セル乳劑ガ、其ノ製造及保存ノ間ニ於テ、及ビ動物體內ニ注入ノ後ニ於テ、若干ノ程度ニ自家融解ヲ起シタルベキハ言ヲ俟タザル所ナルベキヲ以テ、余ハ此ノ影響ノ全部ヲバ之ヲ免疫ニ由來スルモノナリト爲スコトヲ愼ム。

余ハ本研究ノ第一回報告ニ於テ、腫瘍組織內ニ起ル退行變性ノ由來ヲバ、宮川氏等ノ所謂直達作用ニヨルモノトナスベカラザルヲ論ゼリ。余ハ本篇ニ於テモ亦然曰ハント欲ス。

第十三章 結論

一、大黒鼠可移植性肉腫ニ於テ、其ノ一部ヲ切除剔出シテ直ニ之ヲ乳劑トナシ、特種裝置ニヨリテ凍結セシメテ保存シタルモノ、種々ナル量ヲ殘留腫瘍ヲ擔フ所ノ鼠ニ注射スル場合、一定時日ヲ經過シタル後ニ於テ、先ヅ腫瘍ノ發育力減衰シ、次デ發育停止シ、多クノ例ニ於テハ且ツ又タ縮小ス。

二、病理組織上、腫瘍內ニ現ハル、壞死竈ハ、其境界ノ移行性ナルモノ及ビ所謂暗黒帶域ヲ介スルモノ、日ヲ經ルニ從ツテ増加シ、發育停止或ハ縮小ヲ示セルモノニアリテハ、境界ノ嚴ナルモノノ極メテ少シ。且ツ腫瘍ノ周邊部ニ於テ、多クノ腫瘍細胞ハ退行變性ニ陷レリ。

三、處置セザル可移植性肉腫ヲ擔フ鼠ニ、同様腫瘍ノ新鮮ナル乳劑ノ凍結セシメテ保存セルモノノ

附圖第一表

PLATE I.

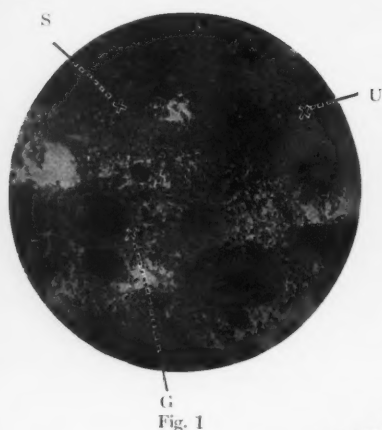


Fig. 1



Fig. 2



Fig. 3



Fig. 4



Fig. 5

○中村・惡性腫瘍ノ治療法ノ研究

三六八

- G, 健常血管周圍ニ尙ホ健態腫瘍細胞ヲ殘留ス
- S, 健態腫瘍細胞群ト壞死トノ境界嚴ナルモノ
- U, 健態腫瘍細胞群ト壞死トノ境界稍々嚴ナルモノ
- 第二圖, 健常血管周圍ニ尙ホ健態腫瘍細胞ヲ殘留ス
- 第三圖, 健態腫瘍細胞ト壞死竈トノ境界移行性ヲ呈セルモノ
- 第四圖, 健態腫瘍細胞群ト壞死竈トノ境界ニ現ハレタル所謂暗黒帶域
- G, 健態腫瘍細胞群
- N, 壞死竈
- Z, 所謂暗黒帶域
- 第五圖, 所謂暗黒帶域ノ一ツ, 多數ノくろまとりーゼ球ヲ含有セルモノ
- 第六圖, 血管周圍ヨリ退行變性ノ始マル初期
- D, 輕度ナル血管周圍ノ退行變性
- 第七圖, 血管周圍ヨリ退行變性ノ發生ノ初期
- B, 血球ヲ充盈セル血管
- D, 輕度ナル退行變性ニ陷レル腫瘍細胞
- G, 健態腫瘍細胞
- 第八圖, 健常皮膚ノ直下ニ於ケル壞死
- 第九圖, 腫瘍邊緣ノ壞死
- N, 壞死
- R, 圓形細胞ノ浸潤セル腫瘍周圍組織

胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ(附圖第三—第五表)

長崎醫科大學病理學教室(主任竹內教授)

井 手 政 雄

第六七例 一〇・九瓦

本例ハ一年有餘日ノ長年月ヲ經過シ。發育旺盛ニシテ、全例中最大ノ大イサ、即チ略々鳩卵大ニ迄増大セリ、大正十五年七月五日。〇・九五極大胎兒ヲ前同様ニ乳劑トナシ、左右臂筋内ニ移植セリ。

左側部

七月十二日。境界不明ノ膨隆ヲ呈ス。

九月二十三日。大豆大扁平ノ膨隆。硬度硬シ。

十二月三十日。右側部ノ腫瘍ト合併セリ。

右側部

八月十三日。右尾端部ニ膨隆ヲ呈ス。硬度硬シ。

十月十一日。雀卵大ニ増大シ、右尾部ヲ占ム。

十一月十八日。益々左側方ニ増大シ、橢圓形球狀ヲ呈ス。

十二月三十日。左右合併シ、左側ニ増大シ、一個ノモノトナル(二・〇乃至一・三極)

五月十二日。略々圓形球狀ヲ呈シ、表面ハ比較的平滑ニシテ、緊張セル明ラカナル囊腫タリ(一・九—二・五—二・三極)

七月二十五日。自然死。

解剖の所見

〇井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

附圖第二表
PLATE II.

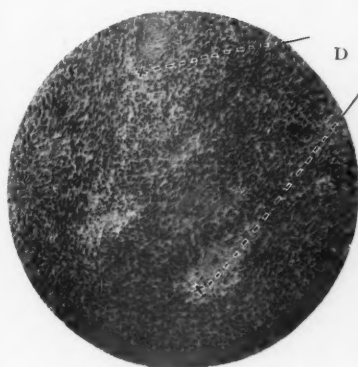


Fig. 6

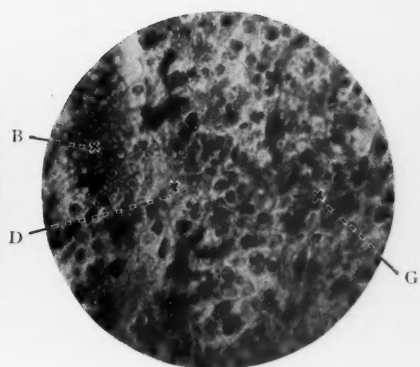


Fig. 7



Fig. 8



Fig. 9

要スルニ本例ハ一年有餘日ノ經過ニ於テ増大シ、本腫瘍ノ大部ヲ占ムルハ大ナル皮様囊腫タリ。而シテ其ノ外、表皮組織ニ依リテ構成セル大小ノ囊腫多數ニ存ス。其ノ上皮成分ハ發育、生活機能旺盛ナリ。軟骨組織ハ殘骸ヲ止ムルノミ。

第七八例 一七・一五

本例ハ胸腔内移植例ニシテ、移植後百七十五日經過ニ於テ、發育増生著シク、胸腔内ヲ充滿セリ。而シテ押入部ニ一致シテ、外部ニ約過雀卵大ニ増大セルモノヲ生セリ。

大正十五年七月七日。一・二種大胎兒乳劑ヲ胸部皮下、胸腔内ニ押入セリ。押入ニ際シ乳劑ノ流入ニ困リテ腋窩部ニ於テモ同様ノ腫瘍ヲ發生セリ。但シ胸部皮下ノモノハ記載ヲ略ス。

腋窩部

七月二十七日。右腋窩部ニ大豆大球狀ノ表面不平ナル結節ヲ生ズ。

十一月十八日。過雀卵大橢圓形球狀ノ膨隆、内側ハ平滑ナリ。(二—一・八一—一・二種)

十二月二十八日。殺。

解剖の所見

略、橢圓形球狀ヲ呈シ、上方部ハ最も高く、下方ハ漸次的ニ移行スレド、境界判然タリ。内側ハ正中央部、下ハ腹部中央部、背部ハ正中線ニ及ブ。皮膚トハ纖弱ナル結締組織性著ラザル。底部ノ下方ハ比較的容易ニ移行シテ剝離困難ナリ。下半部ハ皮様囊腫ニシテ、上部ハ硬度硬ク、灰白色、一部ハ暗赤色ヲ呈ス。本腫瘍ノ上部ヲトリテ第二代移植行ヘリ。

組織の所見

上方癒著部ニ於テハ散在性或ハ連續性ニ腺様組織存シテ、單層ノ骰子形上皮ニ覆ハレ、内容ニえおちん淡染液ヲ容ル。本組織ハ結締組織ト共ニ周圍ノ筋組織内ニ及ビ、筋組織ハ一部脂肪變性及ビ破壊ヲ來タス。

中央部ニ於テハ大小不同ノ表皮性囊腫、皮様囊腫ヨリ形成セラル。其ノ外圍ニハ稍々厚キ横紋筋組織圍繞セリ。壁ハ重層或ハ單層ノ上皮細胞ヲ有シ、所々内腔ニ向ツテ突起狀ニ増生セリ。内容ニハ角質ヲ容ル、モノト、毛、細胞壞死性顆粒脂肪樣液トヲ容ル、モ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸胎腫樣新生物發生ニ就テ

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

三七〇

二・一・二・五・二・四種。略々圓形球狀ヲ呈シ表面ハ比較的滑平ナリ。大部ハ正中ヨリ右方ニ突出シ、尾及肛門ハ腫瘍ノ左側縁ニ存ス。右側上部ハ大腿部迄及ブ。腫瘍ハ緊張シ波動ヲ觸ル。割ヲ加フルニ菲薄ナル壁ヲ有スル囊腫ニシテ稍々稀薄ナル乳様半透明ノ液ヲ多量ニ洩シ、毛ヲ少許保有セリ。底部ニハ數個ノ小ナル囊腫狀物ヲ認メ、暗赤乃至灰白色ヲ呈ス。内面ハ比較的平滑ナリ。四圍筋組織トハ比較的明確ナル境界ヲ示メシ、左側下部ニ於テ稍々不明ナリ。

本腫瘍ハ經過中ニ或ハ弛緩縮小シ、或ハ緊張増大シ、一進一退漸次増大セリ。
組織的所見

本腫瘍ノ主部ヲナスモノハ大ナル皮様囊腫ニシテ、全ク他組織ヲ壓ス。囊腫壁ハ單層或ハ薄層ノ扁平上皮乃至骰子形上皮細胞ヨリ被ハレ、壁面ニ少許ノ角質物質ヲ附着シ、次ニ甚ダ少許ノけらとひありん顆粒ヲ一列狀ニ認ム。後者ノ部ニハ壞死細胞、無構造物質等ノえおちん濃染物質ヲ附着セリ。其ノ外層ニハ細胞ニ富メル結締組織纖維ノ薄層ヲ以テ圍繞セラレ、其ノ内ニ皮脂腺、毛囊、毛根ニ因スベキ單層ノ骰子形或ハ胞狀ノ上皮ヨリ成ル小囊腫、壁ヲ圍リテ所々ニ存在ス。又壁ノ稍々厚キ部ニハ脂肪組織及ビ全ク石灰化セル軟骨組織小片ノ殘骸ヲ認ム。

其ノ外所々ニ於テ被移植組織ナル筋内ニ鮮明ナル境界ヲ以テ、角化物ヲ内容トセル重層上皮細胞ニ被ハレル囊腫、又ハ角化物、毛等ヲ内容トシ、皮脂腺、毛囊ノ增生ヲナス皮様囊腫ヨリ成リ、其ノ傍ニハ限局性ニ薄層ノ骨質ヲ有スル骨組織ヲ見ル。

尙一部ニテハ重層ノ骰子形上皮細胞ヨリ圍繞セラレ、無構造物質、細胞壞死物質ヲ内容トセル囊腫及ビ角質物質ヲ内容トセル、表皮囊腫ノ囊腫群アリテ、周圍ニハ稍々強キ白血球浸潤アリ。之ニ接シテ毛囊、毛根ヨリ成ル腺管像ノ密群及ビ皮様囊腫ノ變性ヲ來タセルモノアリテ、同部ニ肉芽組織侵入シ、巨大細胞ノ多數ヲ有ス。底部ニ於テハ單層ノ骰子形乃至扁平ノ上皮ヨリ被ハレ、外圍ハ稍々薄層ノ滑平筋ニ圍繞セラレ、内容空虚ノ囊腫アリ。其ノ外方組織内ニハ又毛根、毛囊ノ增生ニ依ル、大小ノ腺管狀乃至囊腫狀物アリテ、其ノ傍ニハ骨質様石灰化殘骸アリ。

左側部皮下ニ於テハ少許ノ限局性ノ滑平筋ト共ニ脂肪組織存シ、其ノ中ニハ連鎖狀、又ハ密集狀、又ハ孤島狀ニ、主トシテ單層ノ骰子形上皮ヨリ被ハル、腺管組織アリ。腔ノ形態ハ種々ナリ。

リ被ハレ、けらとひありん顆粒ヲ少許保有シ、角質、壞死性細胞ヲ内容トスル表皮性囊腫タリ。

其ノ他ノ孤立性囊腫モ亦之ト同様ノ構造ヲ呈ス。

上方部ノ壁トノ癒著部ニ於テハ結締組織其ク發育シ、縱横ニ索走ス。其ノ間ニ脂肪組織多量ニ存在シ。血管ニ富ム。脂肪組織内ニハ散在性ニ腺組織ノ密集群アリテ、單層ノ骰子形上皮ハ分泌機能旺盛ニシテ、えおん淡染ノ分泌物ヲ充ス。尙ホ腋窩部腫瘍ニ認メタル如キ、毛、毛根皮脂腺ヨリ成ル密集群存在シ、腺管狀ヲナシテ、腺樣組織像ヲ呈ス。

要スルニ本腫瘍ニ於テハ諸組織ニ依リテ構成セラレタル不規則狀ノ混合腫ナルモ、大部ハ諸上皮成分ニ依リテ圍繞セラル、囊腫ナリ。

第七七例 七・一五

本例ハ胸腔内移植例ニシテ、移植後百八十四日經過ニ於テ、發育増生旺盛ニテ、胸腔内ヲ充滿セリ。

大正十五年七月七日。前同様乳劑ヲ胸腔内胸壁皮下ニ注入セリ。胸部皮下ノモノハ陰性ナリ。

解剖的所見

右側胸腔内ニ於テ、大小不整形ノ顆粒狀集團ヲ以テ腔ヲ充滿ス。胸壁下方約三分ノ一部ヨリ全面ニ互リテ小豆大乃至粟粒大ノ大小不同ノ顆粒狀新生物十數個、不規則狀ニ或ハ合シ、或ハ分離シテ癒著セリ。殊ニ中央部ニ於テハ最も強ク癒著ス。其ノ各々ハ灰白色ノ硬キモノ、或ハ囊腫狀ノ軟キモノヨリ成ル。橫隔膜ハ無關係ニシテ、肺ハ輕度ニ癒著ス。上、中葉間ニハ小豆大ノ囊腫ヲ、中、下葉間ニハ米粒大灰白色結節存ス。

組織的所見

上方ノ胸壁癒著部ニ於テハ大部ハ表皮性囊腫及ビ他ノ上皮ヨリ被ハルル囊腫ヨリ形成セラレ、其ノ間ニ脂肪組織存シ、一部ニ少許ノ石灰化、破壞性軟骨組織ヲ認ム。

表皮性囊腫ニハ角質ヲ内容トセルモノ及ビ毛、細胞壞死物、無構造物質ヲ内容トセルモノトアリ。壁ハ薄層或ハ單層ノ上皮細胞ヨ

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

ノトアリ。横紋筋ハ稍々廣汎ニ互タリ、其ノ中ニ孤島狀ニ表皮性囊腫ヲ存ス。一部ニハ細胞ニ富メル結締組織索走セリ。

一側ニ於テ毛根、毛囊、皮脂腺ノ密團アリテ空洞ヲナシ、單層ノ胞狀ノ骰子形細胞ヲ被リ、細胞ハ膨大シ、且ツ染色質ニ富ミ、所増生像ヲ呈ス。其ノ間ニハ血管ニ富メル結締組織網狀ニ索走ス。斯カル部ハ一見腺癌組織ヲ見ルガ如シ。此ノ部ニハ又少許ノ骨髓組織介在ス。尙ホ腺癌組織ハ到ル所ニ存在シ、連鎖狀或ハ密團ヲナス。腺細胞ハ骰子形ニシテ、分泌機能ヲ營ミ、其ノ中ニ大ナル空洞ヲナシテ囊腫形成ヲ來タス。下方ノ大ナル皮樣囊腫ハ單層乃至二、三層ノ扁平或ハ骰子形上皮ニ依リテ被ハレ、部分的ニ少許ノけらとひありん顆粒ヲ有ス。其ノ外圍ハ薄層ノ結締組織ニ依リテ圍繞セラレ、壁内ニハ所々ニ毛囊、毛根、皮脂腺ヲ有シ、又是等ニ因リテ生セル小囊腫ヲ見ル。

要スルニ本腫瘍ハ表皮組織、筋組織、骨髓組織、腺癌組織、結締組織ニ依リテ構成セル混合腫ナルモ、表皮組織及ビ腺癌組織ノ發育最モ良好ニテ、殊ニ表皮組織ハ其ノ主成分ヲナシ、囊腫形成ヲ營ム。而シテ大ナル皮樣囊腫ヲ形成シ、腫瘍ノ一方ヲ占居セリ。

胸腔内

解剖的所見

右側胸腔内ニ於テハ腋窩部ノ強キ癒着部ニ一致シテ、灰白色乃至暗赤色ノ大豆大、不規則ナル凹凸ヲ有セル腫瘍ヲ認メ、壁ト強ク癒着シ、又肺上葉ト結締組織維ヲ以テ癒着ス。

前縱隔實ニ一致シテ、小指頭大ノ甚ダ不整形ノ腫瘍存ス。周圍組織、殊ニ前壁ト固ク癒着セリ。肺門部ニ於テハ小豆大乃至米粒大ノ不整形ノモノ數個存在シ、兩肺葉ト癒着セリ。

左側胸腔内ニ於テハ、大豆大、灰白色、不規則形ノ結節ヲ認メ、壁ト癒着セリ。

組織的所見

滑平筋、表皮囊腫、皮樣囊腫、頭毛圓柱狀上皮ヨリ被ハル、囊腫、扁平上皮ニ被ハル、囊腫、腺癌組織、脂肪組織、結締組織ニ依リテ構成セラリ。

心臟部ニ於ケル囊腫ハ單層ノ頭毛圓柱狀粘液性上皮ニ被ハレ、脫落上皮、分泌物ヲ以テ内容トセルモノ、及ビ薄層ノ骰子形細胞ヨ

ノ中増殖盛ニシテ、遂ニ小指頭大乃至雀卵大ニ達セルモノハ一九、過雀卵大ノモノ一、鳩卵大ノモノ一、大豆大乃至豌豆大ノモノ四五、小豆大ノモノ二三ヲ算セリ。

(b) 被移植動物ノ年齢ニ就テ

被移植動物ノ年齢ニ關シテハ幼若鼠ハ總數五六ノ中、四七(八三%強)ノ陽性ヲ示メシ、且ツ小指頭大以上ノモノハ一二ナリ。之ニ比シ成熟鼠ハ總數八七ニシテ、陽性五六(六四%強)、小指頭大以上ニ達セルモノハ一〇ナリ。之ニ依レバ幼若動物ハ成熟動物ニ比シ、陽性率遙カニ大ニシテ、且ツ増殖ニ對シテモ亦良好ナリ。

Askanazy、松山氏ハ幼若ノモノニ於テ良結果ヲ得、且ツ存続性大ナリト述べ、Burrow ハ之ニ反シテ成熟期ノモノ腫瘍ノ存在シ易キヲ説ク、Paula Freund ハ兩者ノ間ニ差異アルヲ認メズトセリ。

余ノ實驗ニテハ幼若ノモノニ於テ陽性率高ク、増殖亦良好ナルコト明ラカナリ。

(c) 被移植動物ノ性ニ就テ

雌ハ總數六六中、陽性ナルハ四七(七一%強)ニシテ、小指頭大以上ノモノ一一ナリ。雄ハ全數七七中、陽性數五六(七三%強)ニシテ小指頭大ノモノ一〇ナリ。雌ハ雄ニ比シ、陽性率ハ殆ンド同數ナレド増殖力ニ於テハ雌ハ雄ヨリ大ナリト云フベシ。

Askanazy, Paula, Freund, 松山氏モ雌ハ雄ヨリ良結果ヲ得、尙妊娠ガ其成長ニ對シ、大ナル影響ヲ與フルコトヲ述べタリ。

余ハ之ニ就キテ特別ニ嚴密ナル検査ヲ行ハザレドモ常ニ雌雄兩者ヲ同棲セシメ、然カモ多數ニ於テ飼養中妊娠鼠ヲ見タレバ之或ハ其ノ雌性ニ於テ腫瘍ノ發育ニ影響ヲ及ボセシヤト思ハル。

(d) 移植部位ニ就テ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

三七四

リ被ハレ、毛囊、毛根、皮脂腺ヲ有スルモノ、或ハ有セザルモノ種々ナリ。

他ノ囊腫ハ主トシテ單層ノ圓柱狀粘液性上皮細胞、或ハ顚毛上皮又ハ扁平、骸子形上皮ヨリ被ハル、囊種ナリ。顚毛上皮ハ多ク脱落シ、一部殘ルノミナリ。其ノ外圍ハ細胞ニ富ム滑平筋組織ニ圍繞セラル。内容ニハえおちん淡染液ヲ少許宛容ル。

下方ノ胸壁瘻著部ニ於テハ多量ノ淋巴樣組織ヲ認ム。一個ニ於テハ氣管枝樣組織ヲ有シ、單層ノ高キ顚毛圓柱狀粘液性上皮細胞ヨリ被ハレ、分泌機能旺盛ナル像ヲ呈ス。其ノ外圍ニハ石灰化セル腔洞狀ノ軟骨組織ヲ斷片のニ有ス、尙ホ一部ニ孤立性ニ重層扁平上皮ヨリ被ハレ角質ヲ僅カニ附著シ、外層ニ細胞ニ富メル滑平筋ヲ有スル囊腫ヲ見ル。本組織ハ食道ノ不全形態ナルベシ。

肺ノ上、中葉間囊腫ハ單層ノ高キ圓柱狀粘液性上皮ヨリ被ハレ、分泌機能旺盛ニシテ、外層ニ細胞ニ富メル薄キ滑平筋ヲ有ス。筋内ニハ同様ノ小囊腫ヲ見ル。肺トハ結締織性瘻著ヲ營ミ、組織球ノ浸潤稍著明ナリ。隣接ノ肺實質内ニハ石灰化セル骨組織ノ少許存スルモ、肺實質ニハ變化ヲ認メズ。

要スルニ本腫瘍ハ殆ンド表皮組織ニ因ル皮樣囊腫、表皮性囊腫又ハ諸種上皮細胞ニ被ハレタル囊腫ノ囊腫群ニ依リテ構成セラレ、他組織ハ僅ニ存スルノミナリ。而シテ上皮細胞ハ各々發育、生活機能盛ナリ。

Ⅲ、第一實驗成績考案及ビ總括

(a)胎兒組織移植後ノ一般の所見

甘口鼠ノ胎兒組織ヲ前處置、後處置等何等特種條件ヲ加ヘズ乳鉢中ニテ鈹ヲ以テ、細切後磨碎シ、生理的食鹽水中ニテ洗滌許ヲ加ヘテ、乳劑トナシ、簡管針及ビ注射器ヲ以テ米粒大量ヲ皮下、腹腔内、筋内ニ成熟、幼若鼠ノ同動物、或ハ他動物ニ移植ス。

胎兒ヲ得ルニハ妊娠セル甘口鼠ヲえりてゐる麻醉ヲ以テ處置シ、子宮ト共ニ胎兒ヲ摘出し、生理的食鹽水中ニテ洗滌セリ。胎兒ノ大サハ○・四乃至一・七種ナリ。本實驗ニ於テハ移植個所總數一四三ニシテ、其ノ中全陽性數ハ一〇三(七三%強)ナリ。吸收消失ノ運命ニ陷レルモノ三三ニテ、増大後縮小セルモノ八一三、増大ノ部ニ屬スルハ五四ナリ。此

同動物ニ於テ一個所或ハ二個所ノ移植ヲナシ、一ヶ所ニノミ移植セル場合ト一個所ニ移植セル場合トノ移植胎兒組織ノ發育増殖ニ何レガ良好ナルカラ檢セリ。即チ一個所移植トシテハ背部皮下、腹腔皮下、臀筋内、腹腔内等總數五五ニシテ、其ノ中、陽性數三七(六七%強)、大豆大ノモノ一二、小指頭大以上ノモノ一ナリ。

二個所移植トシテハ背、腹部皮下、背、胸部皮下、左右腹部皮下、左右臀筋内、胸腔内胸部皮下等ニシテ移植個數八六ニシテ、陽性數六七(七八%弱)、大豆大乃至豌豆大ノモノ三三、小指頭大以上ノモノ一九ニテ、コノ中臀筋内移植ニ於テ左右合併シテ、一個トナレル鳩卵大一、胸腔内移植組織ノ濾出ニ依リテ發生セル腋窩部ノモノ、即チ過雀卵大ノモノ一ヲ存ス。

之ヨリ見レバ、同一動物ニ於テ二個所移植ハ一個所移植ニ比シ、陽性%並ニ發育増殖ニ對シ遙カニ良好ナリ。

第二項 第二實驗、諸所置ヲ施セル移植試驗

一、第二實驗成績表

先ヅ次ニ第二實驗成績ヲ表ヲ以テ示メシ、簡單ナル説明ヲ加ヘタリ。其ノ總括ハ後述スル所アルベシ。

表中ノ各部略字説明ハ第一實驗成績表ニ詳述セルモノニ同ジ。

第六表えーてる水前後所置ノモノニ於テハ○・七及ビ一・三糶大ノ胎兒ヲ使用シ、前處置トシテ胎兒一ニ對シ、四%えーてる水五乃至一〇ノ比ヲ以テ加ヘ、乳劑トセリ。後處置トシテハ腫瘍發生ト共ニ、腫瘍内又ハ移植部位ニ二乃至三日毎ニ四%えーてる水ヲ○・五托宛八回注射セリ。

而シテ本實驗ニ於テハ移植數一〇中、陽性四(四〇%)、豌豆大乃至大豆大ノモノ三、小豆大ノモノ一、陰性六ナリ。

此ノ中陽性ノ四例共二十七乃至四十三日ニテ全ク吸收セラレタリ。

第七表砒素水前後處置ノモノニ於テハ○・八糶大胎兒ヲ使用シ、前處置トシテハ胎兒一ニ對シ、二十萬倍稀釋砒素水五ノ比ヲ以ツテ加ヘ、乳劑トセリ。

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

三七六

移植部位ニ關シテハ被移植地ノ適不適ガ腫瘍乃至ハ移植組織發育増生ニ對シテ重大ナル關係ヲ有スルモノナルハ Zahn 一派及 Birch-Hirschfeld u. Garton 一派ノ唱導スル真正腫瘍ノ發生可、不可ノ眞疑ノ如何ニ關ラズ、均シク、之レヲ認ムルトコロニシテ、今日迄總ユル部位(皮下、筋、腹腔、眼房、肝、腎、脾、嚔丸、卵巢、腦等)ニ試ミラレタリ。サレド其ノ成績ハ各人必ズシモ一致セザルトコロナリ。

Birch-Hirschfeld u. Garton ハ肝内ニ注入シ、肝及肺ニ同様ノ結節ヲ形成シテ、同種同動物及ビ諸種同條件ニ於テ、肺内結節ハ肝内結節ニ比シテ、發育良好ナリト述ビタリ。Petrov, Tieschenhausen ハ諸所多數部位ニ於テ、前者ハ各々差異アルヲ認メ、移植地ノ關係大ナルヲ説キ、後者ハ第一位ニハ筋肉、第二位ニハ腹腔内、大網膜、腹壁ヲ舉ゲリ。Rösle, Askanyz, Freund, 片瀬、松山氏等ハ腹腔内移植ニ於テ良結果ヲ來タスト。

余ノ實驗ニ於テハ皮下最モ陽性數大ニシテ總數一〇八ノ中、九二(八五%強)、其ノ中小指頭大乃至雀卵大ノモノ一五ナリ。次ニ好成绩ヲ得タルハ胸腔内ニシテ總數四中、陽性三(七五%)ナリ。而シテ胸腔内移植實驗ニ於テハ三例共長キ經過ニ互タルモノニシテ、甚ダ不規則ナル腫瘍ノ發生セルハ余ノ興味ヲ喚起セルトコロナリ。コ、ニ於テ胸腔内移植ハ四例ニシテ實驗數少數ナルモ、胎兒組織發育増殖ニ對シテ何等カ深キ因果的關係ノ潜在セザルヤヲ想ハシム。而シテ寡少ナル余ノ知見ヲ以テスルニ胎兒組織ノ胸腔内移植實驗ハ今日迄之レヲ見ル能ハズ。

次ニ筋内移植ハ總數二五中、陽性七、(二八%)ニシテ%數ハ他ニ比シ甚ダ小ナルモ、其發育増殖機轉ニ於テハ甚ダ良好ナルヲ認メタリ。殊ニ第六七例ニ於ケル如キハ鳩卵大ニ増大シ、一年有餘日ノ長年月ニ互リテ、死ニ到ル迄毫モ縮小吸收ノ徵ヲ見ズシテ、其ノ發育力ハ甚ダ微々タルモ、逐次増大ノ狀ヲ示メセリ。

腹腔内ニ於テハ殆ンド全數陰性ニシテ、僅カニ一例ニ於テ米粒大ノ灰白色結節、肝ノ下緣部ノ大網膜ニ坐位セルヲ認得タルニ過ぎズ。

(c) 同動物ニ於ケル一個所及ビ二個所移植ニ就テ

第八表
20萬倍砒素水飼養及後處置

	總數	陽性				陰性
		總數	大豆 小豆 大	サ 小豆 大	經 増大	過 縮小 最後ニ 消失
總	3	2	2	1	1	1
幼	3	2	2	1	1	1
雌	3	2	2	—	2	1

第九表
20萬乃至2萬倍砒素水後處置

	總數	陽性				陰性
		總數	大豆 至豌豆 大乃大	サ 小豆 大	經 増大	過 縮小 最後ニ 消失
總	7	6	2	4	4	1
幼	5	5	1	4	3	1
成	2	1	1	—	1	—
雌	4	3	2	1	2	1
雄	3	3	—	3	2	—

第十表
胎兒組織濾液處置

	總數	陽性				陰性
		總數	大豆 至豌豆 大乃大	サ 小豆 大	經 増大	過 縮小 最後ニ 消失
總	11	10	5	5	2	6
幼	5	5	3	2	2	1
成	6	5	2	3	—	5
雌	7	7	3	4	2	4
雄	4	3	2	1	—	2

注射セリ。

而シテ本實驗ニ於テハ移植個數七中、陽性六(八九%弱)、豌豆大乃至大豆大ノモノ二、小豆大ノモノ四、陰性一ナリ。

第十表胎兒組織濾液處置ノモノニ於テハ、一・二種大胎兒ヲ使用シ、乳劑トナシテ移植セリ。移植後三日毎ニ移植部位又ハ腫瘍内ニ胎兒組織濾過液○・三乃至○・四珪宛ヲ注射セリ。濾液ハ胎兒ヲ細切磨碎シ、之ニ一對一〇ノ比ヲ以ツテ生理的食鹽水ヲ加ヘ、更ニ之ヲ遠心器ニカケ其ノ清澄液ヲガーゼ及ビ濾紙ニテ濾過セルモノナリ。

而シテ本實驗ニ於テハ移植個數一一中、陽性一〇(九〇%強)、豌豆大、乃至大豆大五、小豆大五、陰性一ナリ。此ノ中、八ハ十一乃至五十一日ニテ縮小又ハ消失シ、二ハ四十二日經過ニテ豌豆大ニテ縮小セズ、死及ビ摘出ノ運命ヲトレリ。

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

第六表

4%えーてる水前後處置

	總 數	陽 性				陰 性
		總 數	大	サ	經過	
			大豆 大乃	小豆 大	最後 消失 ニ	
總	10	4	3	1	4	6
幼	3	1	—	1	1	2
成	7	3	3	—	3	4
雌	9	4	3	1	4	5
雄	1	—	—	—	—	1

第七表

20萬倍砒素水前後處置

	總 數	陽 性					陰 性	
		總 數	大		サ 小豆大	經 過		
			大豆大乃	至豌豆大		增縮 小後		最後 消失二
總	10	7	2	5	6	1	3	
幼	5	3	1	2	3	一	2	
成	5	4	1	3	3	1	1	
雌	7	4	2	2	4	一	3	
雄	3	3	一	3	2	1	一	

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

三七八

後處置トシテハ移植部位ニ二十萬倍稀釋砒素水○・五珉宛ヲ一日毎ニ四回注射セリ。

而シテ本實驗ニ於テハ移植個數一〇中、陽性七(七〇%)、豌豆大乃至大豆大二、小豆大七、陰性三ナリ。

此ノ中、大部ハ五日内ニテ増大後縮小、或ハ最後ニ消失シ、一例ニ於テハ十八日宿存セリ。

第八表砒素水飼養及ビ後處置ノモノニ於テハ一二種大胎兒ヲ使用シ、前處置トシテハ移植前十日間二十萬倍稀釋砒素水ヲ以ツテ飼養セリ。後處置トシテハ移植部位又ハ腫瘍内ニ三乃至四日毎ニ○・五珉宛ヲ五回注射セリ。

而シテ本實驗ニ於テハ移植個數三中、陽性二(六七%弱)ニテ、二例共小豆大、陰性一ナリ。

陽性中、一ハ十九日ニテ消失シ、一ハ十七日ニテ死セリ。

第九表砒素水後處置ノモノニ於テハ一二種大胎兒ヲ使用シ、後處置トシテ移植部位又ハ腫瘍内ニ三乃至五日毎ニ○・五珉宛ヲ五回

此ノ中増大ノモノハ一〇、縮小或ハ消失セルモノハ二七ナリ。
之ニ依レバ陽性數ハ比較的良好ナルモ、發育増生ニ對シテハ、不良ニテ、小指頭大ニ迄増大セルハ一例モ見ズ。大部分ハ五乃至十
日ニテ、縮小消失或ハ死ノ運命ヲトレリ。

II、第二實驗成績考案及ビ總括

胎兒ハ本實驗ニ於テモ前同様妊娠セル甘口鼠ヲえーてる麻醉ヲ以テ子宮ト共ニ胎兒ヲ摘出シ、乳鉢中ニテ細切磨碎セ
リ。

Askanyz ハ彼ノ畸形腫瘍腫瘍ニ對シテ生長ヲ増進センガタメ、身體ノ一般變化及ビ局所的刺激ノ一點ヲ考ヘタリ。
即チ(一)身體ノ一般的變化ニ於テハ *Féve* ハ畸形腫ノ成長ハ動物ノ榮養不良ノ際増進スト云フモ、Askanyz ハ妊娠時及
ビ哺乳時ニ於テ移植片ノ生長ガ増進スルヲ認メタリ。

(二)移植セル胎兒組織ニ對シテ局所的ニ刺激ヲ與フルコト。此ノ點ニ向ツテハ、即チ神經切斷、溫熱添加ノ何タル影
響無キニ反シ、えーてるすぶれーニ依ル冷却ハ腫瘍ヲ増大セシメ、人ノ乳腺組織混合移植ニテハ腫瘍ノ發生ヲ阻止セ
リ。而シテ四%えーてる水ハ腫瘍ノ増大ヲ促進セシムト云フ。

余モ亦之等ノ目的ノタメニ四%えーてる水、砒素水處置等ヲ試ミタリキ。

えーてる水。初メ *Reinke* ハ冷却動物ニ上皮細胞ノ遠型的増生ヲ起サシメ、細胞ノりほい物質ヲ溶解スルえーてる
ノ作用ニ歸セシメ、Askanyz ハ又移植胎兒ヨリ發生シタル畸形腫瘍腫瘍ノ生長ヲ増進セシムルコト前述ノ如シ。

然レドモ其ノ後 *Freund*, *Friedmann*, *Zimmermann* u. *Schwalbe* 松山氏等ニ依レバ發育増生ヲ増進セシムル作用ナシ
ト云フ。

砒素水。(*Valting*) ハ組織細胞ノ發育ヲ増進シ、且ツ變化セシム。而シテ其ノ作用ハ溶解度、交流ニ關係アルヲ述べ、
Currel ハ一〇・十萬乃至一〇・二十萬稀釋砒素水ヲ以テ腫瘍樣變化ヲ來タシ、短時日ニテ惡性化セシメタリ。

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍樣新生物發生ニ就テ

第十 一 表
家 兔 肉 腫 處 置

	總 數	陽 性					陰 性
		總 數	大 小		經 過		
			大豆 至豌豆 大乃大	小豆大	增 大	消 失 最後ニ	
總	9	8	5	3	3	5	1
幼	4	4	2	2	1	3	—
成	5	4	3	1	2	2	1
雌	4	4	2	2	2	2	—
雄	5	4	3	1	1	3	1

第 十 二 表
諸 所 置 ヲ 施 セ ル 移 植 試 驗 總 括

	總數	陽		性				陰	
		總數	大至大豆乃	サ小豆大	經 過				性
					增 大	增 大 後	縮 小	消 失 最 後 二	
總數	50	37	17	20	10	9	18	13	
4%えーて る水前後處置	10	4	3	1	—	—	4	6	
砒素水前後處置	10	7	2	5	—	6	1	3	
砒素水飼養後處置	3	2	—	2	1	—	1	1	
砒素水後處置	7	6	2	4	4	1	1	1	
家兔肉腫處置	9	8	5	3	3	—	5	1	
胎兒組織濾液處置	11	10	5	5	2	2	6	1	

第十一表家兔肉腫處置ノモノニ於テハ一・五粒大胎兒ヲ使用シ、之ト等量ノ可移植性家兔肉腫組織ヲ加ヘ乳劑トセリ。
而シテ本實驗ニ於テハ移植個數九中、陽性八、豌豆大乃至大豆大五、小豆大三、陰性一ナリ。
此ノ中三例ニ於テハ二十五日經過シ、少シク増大セルモ、死ノ運命ヲトリ、他ハ五乃至五十九日ニテ全ク消失セリ。
第十二表ハ第二實驗ノ總括の成績表ニシテ、全移植個數五〇中、陽性三七（七四%）、豌豆大乃至大豆大一七、小豆大二〇、陰性一
三ナリ。

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

解剖的所見

周圍組織ト纖弱ナル纖維性顯著ヲ營ム。大豆大、橢圓形半球狀ナリ。上半部ハ灰白色、中央部ニ結節狀囊腫ヲ認メ、中ニ乳樣液ヲ容ル。下半部ハ淡紅色、表面ハ稍、凹凸ヲ有シ、下面ハ扁平ニシテ滑澤ナリ。

組織的所見

單層ノ高キ圓柱狀上皮ヨリ被ハル、囊腫、表皮組織、軟骨組織、脂肪組織ニ依リテ構成セラル。

(一)表皮組織ハ囊腫ヲ形成シ、數層ノ骰子形細胞ニ被ハレ外圍ニハ薄層ノ結締組織ニ依リテ圍繞セラル。壁内ニハけらとひありん顆粒、毛根、毛囊、皮脂腺等ヲ有セズ。上皮細胞ハ最内層ノモノ漸次胞狀ヲ呈シ、破壞脫落ヲ來タス。内容ニハ壞死性細胞、えおちん濃染物質ヲ以テ充滿ス。

(二)單層ノ高キ圓柱狀上皮ヨリ被ハル、囊腫ハ表皮組織ト隣接シテ存シ、其ノ外圍ニハ滑平筋ヲ見ルモ、大部ハ變性ヲ來タス。上皮細胞ハ分泌機能旺盛ナル像ヲ呈シ、分泌物及ビ脫落上皮細胞ヲ以テ滿サル。本組織ハ胃或ハ腸ノ後裔ニ屬スルモノナルカ不明ナリ。

(三)軟骨組織ハ全ク石灰化シ、細胞ヲ認メズ。表皮囊腫ノ外圍ニ横ハリ結締組織ヲ以ツテ圍繞セラル。其ノ外一部ニ於テハ脂肪組織占居セリ。淋巴球ノ浸潤輕度ナリ。

要スルニ本例ハ表皮囊腫及ビ高圓柱狀上皮ヨリ被ハル、囊腫大部ヲ占メ、且ツ同組織細胞ハ分泌機能旺盛ナリ。而シテ軟骨組織ハ全ク變性セリ。

第九八例 牛 一〇瓦

本例ハ第二代移植例ニシテ、移植後八十五日(初代移植後百日)、經過ニ於テ過小豆大ニ迄増大セリ。

大正十五年七月十九日。第六二例腹部皮下腫瘍ノ一部ヲトリテ背部皮下ニ移植セリ。

八月十三日。小豆大、半球狀結節。

十月十九日。殺。

解剖的所見

○牛手。胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

肉腫。癌腫。肉腫組織ノ胎兒組織發育増生ニ及ボス作用ニ就キテハ Askamzy, Hage, 松山、向山、八木氏等ニ依リテ何等影響ナシトセラレタレド、最近 Viregely ハ鶏胎兒乳劑ト甘口鼠腺腫癌濾液トヲ一：五ノ比ニ混合シテ、幼鶏ニ移植シ、短時日ニテ可移植性肉腫ヲ發生セシメタリ。

余ハ四％えーてる水前處置、二萬乃至二十萬倍砒素水前後處置及ビ飼養、家兎肉腫等分混入、胎兒組織濾過液後處置ヲ施コセルモ、胎兒組織ノ發育増殖ニ對シテ、大ナル影響ヲ與ヘザルガ如ク、其ノ陽性％數ニ於テハ第一試驗ニ比シ、僅カニ良好ナルモ、大部分ハ五乃至十日ニシテ吸收セラレ、五十日以上ニ述ベルモノハ殆ンド認メ得ズ。唯僅カニ肉腫處置ニ於ケル百八十八日アルノミナレド、兩者共大豆大ニ増大シ、遂ニ縮小スルニ至ル。而シテ發育増殖機轉ニ對シテハ却ツテ不良ナル結果ヲ齎ラシ小指頭大以上ニ増大セルモノハ一例モ無ク、吸收ヲ促進セシムルガ如キ傾向大ナリ。

第三項 第三實驗、世代移植試驗

一、余ノ實驗ぶろこころ

以下實驗シタル各例ノ内、最モ著明ニ増殖シタルモノ、中三例ヲ選ビテ經過竝ビニ移植組織學的變化ニ就テ掲ゲ、他ハ省略スルコト、セリ。

第100例 一〇五

本例ハ第二代移植例ニシテ、移植後百六十日(初代移植ヨリ百七十五日)經過ニ於テ、大豆大ニ迄増大セリ。其ノ一部ヲ以テ第三代移植ヲ行ヘリ。

大正十五年七月十九日。第六二例腹部皮下腫瘍ノ下方部ヲトリテ背部皮下ニ移植セリ。

七月二十七日。小豆大、不整形、灰白色結節。

一月十三日。過小豆大、圓形ノ半球狀ノ著明ナル結節、上方ニ小囊腫ヲ形成ス。(○・七乃至○・六釐)

一月二十四日。殺。

表皮組織、脂肪組織、骨、軟骨、骨髓ニ依リテ構成セラル。

(一) 骨髓組織ハ薄層、一部ハ稍、厚キ骨壁ヲ以テ圍繞セラレ、其ノ周圍ニハ幼若ナル橢圓形細胞ニ富メル骨膜結締組織ヲ有ス。厚キ骨壁ノ一部ニハ骨形成像、或ハ細胞膨大、蜂窠狀、又ハ灰化セル軟骨組織ヲ見ル。

(二) 之ト隣接シテ重層扁平上皮細胞ヨリ成ル表皮囊腫存シ、其ノ腔壁ノ一部ニハ圓柱狀乃至骰子形粘液性上皮細胞ヲ混在シ、同腔ヲ被フ。腔内ニハ角化物質及ビ細胞壊死物質、分泌物ヲ以テ充滿ス。外層ニハ細胞ニ富メル結締組織圍繞シ、其ノ内ニ毛囊、毛根ノ密集群アリテ大部ハ壊死性ナリ。此ノ部ニハ圓形細胞ノ浸潤稍、著明ナリ。

要スルニ本腫瘍ハ軟骨、骨髓、骨組織及ビ表皮、粘液性上皮細胞ニ被ハル、囊腫ニ依リテ構成セラルル混合腫ナルモ、上皮成分ノ機能旺盛ナリ。

第三實驗成績表

第十三表

第二代移植試驗

材	料	鼠 數	陽性數
第 45 例	背部腫瘍	5	2
第 62 例	腹部腫瘍	5	3
第 74 例	背部腫瘍	6	2
第 76 例	腹部腫瘍	5	3
第 116 例	背部腫瘍	5	3
第 78 例	腹部腫瘍	5	4
計		31	17 (54%)

第三代移植試驗

材	料	鼠 數	陽性數
第 100 例	腫瘍	4	2

次ニ世代移植實驗ノ成績ヲ表ヲ以テ示メシ、簡單ナル説明ヲ加ヘタリ。

第十三表ニ於テハ六腫瘍ノ各、一部ヲトリテ三十一例ニ移植シ、其ノ中、陽性數ハ十七(五四%)ナリ。

更ニ第六二例腫瘍系ノ第二代移植例即チ第一〇〇例腫瘍ノ一部ヲ以テ第三代移植ヲ行ヒ、四中、二ノ陽性ヲ示メセリ。

第三實驗成績考案及ビ總括

胎兒組織ノ移植ニ依リテ發生シタル腫

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

三八四

過小豆大、稍扁平、帶黃灰白色結節、左側部ハ暗赤色ヲ呈ス、下方ニ小ナル囊腫ヲ見ル、四圍トハ纖弱ナル纖維ヲ以テ輕ク癒着セリ。

組織的所見

表皮囊腫、粘膜上皮ニ依リテ被ハル、囊腫、骨、軟骨、骨髓ニ依リテ構成セラレ、其ノ間ヲ結締組織索走セリ。

表皮組織ハ本腫瘍ノ大部分ヲ占メ、表皮囊腫ヲ形成セリ。重層ノ扁平上皮ヲ以テ圍繞セラレ、種子細胞ハ甚ダ不規則ナル増殖ヲナシ、一部ニテハ集團ヲナシ外方ノ結締組織内ニ浸潤セリ。此ノ部ニハ毛囊、毛根、皮脂腺ヲ有ス。

骨髓組織ハ所々ニ限局性ニ薄層ノ骨組織ヲ以テ圍繞セラレ、骨髓細胞ヲ充滿ス。軟骨組織ハ一部ニ僅カニ細胞密集ヲ呈シ、一部ハ軟骨内骨形成ヲ見ル、他部ニ於テハ細胞膨大シ、石灰化シ殘骸狀ヲ呈ス、此ノ部ニハ白血球ノ浸潤ヲ見ル。

一側ニ於テハえおじんニ淡染セル分泌液及ビ壞死性細胞ノ少許ヲ容レ、單層ノ胚毛上皮細胞ニ依リテ被ハレタル囊腫ヲ存ス。其ノ外層ニハ少許ノ結締組織ヲ圍繞セリ。

要スルニ本腫瘍ハ表皮囊腫其ノ大部ヲナシ、單層ノ胚毛上皮ニ依リテ被ハレタル囊腫ト共ニ其ノ上皮成分ハ機能旺盛ナリ。

第一四五例 五・六五

本例ハ第二代移植例ニシテ、移植後百二十六日(初代移植後百七十七日)經過ニ於テ小豆大ニ増大シ、縮小ヲ見ズ。

大正十五年九月二日。第七五例腹部腫瘍ノ一片ヲ背部皮下ニ移植セリ。

九月六日。灰白黃色米粒大ノ稍著明ナル結節ヲナス。

十一月三十日。灰白黃色。小豆大結節。

一月六日。殺。

解剖的所見

周圍組織ト纖弱ナル結締組織纖維ヲ以テ癒着、小豆大半球狀、一部ハ灰白黃色、一部ハ暗赤色。組織的所見

(二) 異常ノ經過ヲトレルモノ

然レ共亦或ルモノハ現狀ヲ保テル儘約四十乃至五十七日間ハ全ク陰性ノ狀態ヲ呈シ、然ル後始メテ發育増殖スルモノ、又或ルモノハ甚ダ長期間約二百日内外乃至一年有餘日ノ經過ニ於テモ、毫モ縮小ノ狀ヲ示メサズ、増殖力ハ甚ダ遲遅タレド、一進一退ノ内、一步一步逐次増大シ、約雀卵大ニ達セルモノ數例、過雀卵大ノモノ一例、尙鳩卵大ニ達セルモノモ一例確メ得タリ。

A 異常例ノ一

一例(第六七例)ニ於テハ成熟鼠ニシテ、○・九種大ノ胎兒乳劑ヲ左右臀筋内ニ注入シ、左ハ七日ニシテ發生シ、三十九日目ニハ約小指頭大ニ達シ、漸次増大シ、右ハ四十日目ニ發生シ、小豆大乃至大豆大ニ増大シ遂ニ左右合併シ、凸凹不平、一個ノ球狀ヲ呈シ、約二百七十日目頃ニハ雀卵大トナリ、尙逐次増大シ、終ニ一年有餘日ニシテ不明ノ原因ニテ死ノ轉機ヲトレリ。其ノ大キサハ縱一・九、横二・五、高サ二・三種ニテ球狀ノ大ナル囊腫狀ヲ呈セリ。

其ノ間七乃至十日ノ間歇ヲ以テ大小ノ消長ハアレド更ニ毫モ縮小退化ノ徵ヲ見ル能ハズ。周圍組織ト強ク癒着シ、其ノ境界ハ全ク不明ナリ。

其ノ組織ノ構造ハ表皮囊腫、單層ノ骰子形上皮乃至扁平上皮ヨリ被ハル、被ハル、大小ノ皮様囊腫、單純性囊腫、其ノ大部分ヲ占メ、全ク他ヲ壓セリ。

其ノ壁ニハ増殖盛ナル毛囊、毛根、及ビ皮脂腺ヲ存シ、少許ノけらとひありん顆粒ヲ有ス。尙ホ是等ノ毛囊、皮脂腺ヨリ發生セル小囊腫多數ニ認メラレ、部分的ニ合併シテ大ナルモノヲ形成ス。

移植地ナル筋組織間ニハ散在性或ハ連續性ニ骰子形上皮ヨリ被ハル、小腺管様組織存シ、筋組織ハ所々輕度ノ壓迫性萎縮或ハ破壊ヲ來タセリ。其ノ外、骨髓組織、石灰化軟骨組織殘骸ヲ小許認メタリ。

B 異常例ノ二

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

三八六

瘍ノ世代移植ニ於テハ、Petrow ハ四個ノ腫瘍ヲ二動物ニ移植シ、其ノ中自家ノ腹皮下ニ移植セル一例ニ於テハ四ヶ月間繼續増大セルヲ認メタリ。Tiesenhansen ハ成績不良ナリトシ、松山氏モ亦世代移植ハ世代ヲ加フルニ從ヒ、著明ニ其ノ陽性數ヲ減ズルモノナリトセリ。

余ノ實驗ニ於テハ表ニ示メセル如ク、比較的増殖力ニ富ミ、且ツ大ナル第四五、六二、七四、七五、一一六、七八例ノ六腫瘍ヲ選ビテ、其ノ細片ヲ各々各例ニ移植セリ。

移植總數三一ニシテ日數ノ如何ニ關セズ多少共増大シ、陽性ト見ルベキモノハ一七(五四%)ニシテ、其ノ中、第一〇例ニ於テハ百六十餘日生存シ、且ツ約大豆大ニ迄増大セリ。其ノ組織の所見ハ表皮樣囊腫、骰子形上皮ヨリ圍繞セラシ、囊腫及ビ腸樣組織、軟骨ヨリ構成セラレ、上皮組織ハ囊腫型ヲ呈シ、細胞ハ尙機能ヲ營ミ増殖盛ナリ。軟骨組織ハ殆ンド石灰化シ軟骨細胞ハ膨大分離變性ヲ呈セリ。

第三代移植ニ於テ第一〇〇例ノモノ、ミヨリ行ヒ、表ノ如ク四例ノ内二例ニ於テ陽性ヲ示メセルモ、二例共十一日及ビ二十三日ニテ吸收或ハ死ノ運命ヲトレリ。

之ニ依レバ先輩諸學者ノ試驗ニ於テモ同様ナル如ク、重代移植ハ増殖力及ビ生活力甚ダ減少スト云ハザル可カラズ、而シテ此ノ試驗ニ於テ少數例ナレド大豆大ニ迄増大シ、且ツ尙生活機能及ビ増殖力ヲ保藏スルヲ得タルハ分離セル異型の組織胚芽ノ増殖ニ關スル點ニ於テ生理的發育或ハ腫瘍發生ノ意義ニ對シ一定ノ興味アルモノト思ハル。

第五章 移植胎兒組織ノ發育經過及ビ條件

(一)胎兒組織移植後經過ノ一般

移植胎兒組織ハ大多數ハ二乃至五日ニシテ、増生ヲ開始シ、ゾレヨリ逐次増大シ、一定期間ニシテ其ノ極大ニ達シ、ゾレヨリ増生ヲ停止シ、或ハ縮小シ、遂ニ吸收セラレ。然ルニ或ルモノハ移植後少シモ發育スルコトナク、全然吸收セラレ、又或ルモノハ尙比較的長期ニ亙タリテ増殖シ或ハ一定期間ノ増殖中止後長期間現狀ヲ維持シ、然ル後吸收セラレルモアリ。

ヨリハ皮膚樣組織、神經節ノ型ニテ現ハレタル神經細胞群、色素細胞ヲ有スル網膜及ビ脈絡膜樣組織ヲ有ス。

中胚葉ヨリハ軟骨、骨、骨髓組織、淋巴樣組織、橫紋筋、平滑筋、第八〇例ノ一例ニ於テハ齒齦發生ヲ見タリ。

内胚葉ヨリハ最モ屢々消化器ノ不全型(腸、胃、食道樣組織、氣管枝樣組織ヲ認ム。且ツ第七四、一四五例ノ二例ニ於テハ或相半シ、或ハ交互ニ、一部ハ圓柱狀粘膜上皮細胞ノ單層ヨリ、一部ハ角化扁平上皮ノ數層ヨリ構成セラル、合併囊腫ヲ認メ、上皮細胞ハ各々生活機能ヲ續ケ、角化物質及ビ粘液樣物質ヲ以テ充滿セラレタリ。而シテ局所的ニハ或ル組織細胞特ニ增生シ、皮樣囊腫、表皮囊腫、單純性上皮囊腫、筋腫纖維腫、腺瘤樣像ヲ示メセリ。

(五) 余ノ作り得タル新生物ノ大イサニ就テ

胎兒組織移植ニ當タリテ大ナル腫瘍ヲ發生セルモノニハ家兎ニ於ケル Leopold, Hippel 家鶏ニ於ケル Wilms, Trauma もるものニ於ケル Petrow, 白鼠ニ於ケル Askanazy, 松山氏等アレド、甘口鼠ニ於ケル Kossle 池松氏, Burrow 等ノ移植試験ニ於テハ余ノ實驗シタルガ如キ、過雀卵大及ビ鳩卵大ニ迄増大セル大ナルモノ、生ジタルヲ見ザル所ナリ。而シテ余ノ甘口鼠ニ於テ發生セシメ得タル過雀卵大及ビ鳩卵大ハ彼等ノ家兎、家鶏及ビ白鼠ニ於ケル八糶大、或ハ鶏卵大等ニ比較シ、大キサノミニ於ケル對等的點ヨリ見レバ、或ハ餘リ驚異ニ價スベキニ非ラザルモ、之ヲ使用動物ノ體重ノ比ニ於テ見ル時ハ、余ノ例ニ於テハ殆ンド體重ノ四分ノ一乃至三分ノ一ニ達スルモノニテ、實ニ巨大ナルモノト云ハザル可カラズ。

(六) 新生物ノ轉移

胎兒移植ニ依リテ發生セル腫瘍ノ轉移ニ關シテハ Birch-Hirschfeld u. Carren, Tieschenhausen も認メタルガ如ク真正ノ轉移ニ非ザルコトハ明ラカナリ。

余ノ實驗ニ於テモ第七七例ニ於テ胃ノ漿膜面ト相密著セル散子形上皮ヨリ被ハル、大豆大ノ單純性囊腫、第七八例ニ於テ肺實質内ニ於ケル壞死性軟骨組織ヲ認メタルモ、之等ハ移植組織注入ニ際シテ血管系ニ流入セルモノナルカ、或ハ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形體樣新生物發生ニ就テ

三八八

第七八例臍窩部ニ於テハ二十二日目ニ發育シ、五十四日目ニハ約小指頭大トナリ、九十六日目ニハ約雀卵大ニ達シ現狀ヲ維持シ、百七十五日目ニハ縱二・一、横一・三、高サ〇・七耪、圓形球狀ノ凹凸不平ノ腫瘍トナレリ。

其ノ組織の所見ハ本腫瘍ノ大部分ヲ占ムル表皮性囊腫、皮樣囊腫、之ニ附隨スル増殖盛ナル皮脂腺、毛囊、毛根ノ密群、及ビ骰子形上皮細胞ヲ以ツテ圍繞セラル、囊腫及ビ甚ダ小許ノ骨髓組織及ビ橫紋筋ヲ認メ、是等ノ組織ヲ結締組織索走セリ。

(三) 肋膜腔内ニ於ケル新生物ノ異常ナル發育ニ就テ

第七八・七七・八〇例ノ胸腔内ニ於テハ百七十五乃至百八十四日目ニ大豆大乃至豌豆大ノ結節囊腫及ビ雀卵大、凹凸不平ノ甚ダ不整ナル塊狀腫瘍ヲ各例共ニ認メ、肺及ビ橫隔膜胸壁ト全ク強ク癒著シ、尙ホ散在性ニ分離シテ肺葉間等所々ニ介在シ、肺ハ中央部ニ壓迫セラル。是等ハ組織的研究ニ依リテ次ノ諸組織ノ混在ニ依リテ構成セラル、ヲ確メタリ。

即チ表皮組織(表皮囊腫、皮樣囊腫)、之ニ附隨セル毛囊、毛根、皮脂腺及ビ是等ノ腺樣像ヲ呈セル密團、毳毛上皮、圓柱上皮、骰子形上皮ニ依リテ圍繞セラル、囊腫、腺樣組織、食道樣組織、淋巴樣組織、軟骨、骨髓組織、齒齦組織等ヨリ成リ、而シテ表皮組織、各種上皮細胞ニ圍繞セラル、囊腫ハ本腫瘍ノ大部分ヲ占メ、軟骨、骨髓組織ハ甚ダ少許ニシテ面カモ石灰化或ハ細胞膨大分離ヲ來タス。斯クノ如ク胸腔内ニ移植セル胎兒組織ハ他部位ニ移植セルモノニ比シテ、發育力ノ旺盛ニシテ甚ダ不規則ナルハ注目ニ價スルモノニシテ、此ノ部位ハ胎兒組織ノ移植部位トシテ好適地ナルノミナラズ、其ノ發育機轉ニ對シ關係淺カラザルモノアルヲ知ル。

想フニ胸腔内移植ハ移植ニ當タリテ移植組織乳劑ノ散在性ニ散布セラル、ハ亦一考ニ價スベキモ、其ノ發育機轉ニ對シテハ榮養其ノ他種々ノ關係ハ勿論、殊ニ胸腔内ハ組織ノ發育進展スルニ當タリテ周圍組織ノ抵抗甚ダ少ク、自由ナル増殖ヲ營ム機ヲ得ルハ重大ナル意義ヲ有スト云フベシ。

(四) 新生物ノ顯微鏡的所見ノ一般

新生物ノ組織的構造ハ多種多様ニシテ、三胚葉ニ屬スベキ定型の或ハ不定型的ノ臟器樣組織ヲ存在セリ。即チ外胚葉

其ノ中特ニ軟骨組織ノ増殖ハ最モ盛ニシテ、殆ンド各例ニ於テ其ノ主部ヲ占メ、或ハ散在性ニ、或ハ孤在性ニ、或ハ密集性ニ所々ニ介在シ、而シテ一部ニ於テハ細胞稍々粗ニ、一部ニ於テハ軟骨細胞密集シテ盛ニ増生シ、半月狀細胞ノ軟骨囊内ニ四乃至五、尙多キハ七、八個ヲ有スルヲ見ル。又一部ニテハ軟骨内外骨形成ノ不規則ナル像ヲ呈ス。

軟骨組織ヲ被囊セル骨膜様結締細胞モ亦常ニ増殖像ヲ呈シ、軟骨細胞ト隣接移行セリ、次ニ表皮組織ハ軟骨組織ニ次ギテ多量ニ存シ、或ハ此ノ期ニ於テ既ニ皮様囊腫型ヲ呈セルモノ、又表皮組織ニ依リテ被ハレタル腔洞ヲ呈シテ角質ヲ充滿セルモノ等種々ノ形狀ヲ示メシ、其ノ種子細胞ノ増殖ハ著明ニテ、或ハ一部ニハ内外ニ向ツテ突起狀ヲナス。殊ニ毛根及ビ毛囊ノ種子細胞ハ内外ニ向ツテ増生シ、或ハ上皮珠ヲ形成シ、或ハ腔ヲ形成シテ單層ノ上皮囊腫狀ヲ呈ス。又内層上皮角化シテ角質ヲ充滿セリ。

B、移植後百日内外ノ組織の造構

百日内外ニ於テハ表皮組織増殖最モ盛ニシテ、或ハ角膜ヲ以テ充滿セル表皮囊腫型、或ハ壊死細胞、無構造物質、毛脂肪様液ヲ以テ充滿セル皮様囊腫型ヲ呈シ、上皮細胞、殊ニ種子細胞ノ發育ハ著明ナリ。

軟骨組織ハ稍々増殖ヲ減ジ、一部ニテハ半月狀軟骨細胞密集シテ、増生像ヲ呈スルモノ、斯カルモノ及ビ正規ノ軟骨細胞ノ併列スルハ僅カニテ、多クハ石灰化乃至骨形成、或ハ骨髓形成ヲ營ム。之ニ反シ、此ノ期ニハ亦腺細胞或ハ粘液性細胞ノ圓柱狀或ハ骰子形上皮ヨリ圍繞セラル、囊腫型ノモノ發育良好ニテ、其レト共ニ腸様組織、胃様組織ノ發育セルモノ多ク、上皮細胞ハ常ニ分泌機能旺盛ナル像ヲ呈ス。

C、移植後百五十日以上ノ組織の造構

百五十日以上ニ於テハ漸次組織の構造ハ單純化シ、淋巴様組織、筋組織、神經細胞等ハ一方ニ壓セラレ限局性ニ止マリ、或ハ變性ヲ來タス。

殆ンド每常表皮組織及ビ各種上皮細胞ニ依ル囊腫型ノ發育最モ良好ニシテ、腫瘍ノ大部ヲ占ムルニ至ル。其ノ囊腫型

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

○片手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

三九〇

直接實質破損等ノ機會ニヨリ插入シタル移植片ノ後裔ニ因ルモノナリト思惟セラレ得。

(七)胎兒組織ノ如何ナルモノガ發育旺盛ナリヤ

次ニ新生物ノ發生ニ當リ如何ナル種類ノ組織細胞ガ良好ナル増殖ヲ營ムヤ、又長日月ニ互タリテ最モ抵抗力ニ富ミ生活機能ヲ續ケ得ルモノハ如何ナル種類ノ組織細胞ナリヤ。

之レニ關シテ、斯カル思考ニ基ヅキト分ナル觀察ヲ以テ斷案ヲ下シタルハ未ダ見ザルトコロニシテ、唯單ニ斷片的ニ記述セルカ、或ハ短時日ニ於テ試ミタルニ過ギズ。

Tischenhausen ハ簡單ナル中胚葉性組織、例ヘバ骨、軟骨、種々ナル結締組織ノ種類及ビ表皮最モ容易ニ分化行ハレ、其レ等ハ大ナル存續性能力ト生活性能力トヲ有スト。

Birch-Hirschfeld u. Garen ハ軟骨細胞ノ最モ良ク發育セルヲ認メ、軟骨細胞ノ斯ク特ニ生長セルハ色々ノ障礙及ビ抵抗ニ耐ヘ、他ノ組織ニ對シ、不十分ナル營養ニ過ギザル狀態ニモ尙生長スルニ依ルトセリ。

池松氏ハ軟骨、骨組織ガ最モ強ク増進スルヲ認メ、向山、八木兩氏ハ軟骨組織ノ外ニハ胎兒組織ノ殘存セルモノ、殊ニ増殖セル上皮組織ヲ認メズト。

Petrow ハ一部増生セル組織、特ニ扁平上皮ハ速カニ變性ヲ來タシ、他ノ一部、特ニ骨、骨髓ハ一ケ年間以上ニ於テモ可能ナリキト。Leopold ハ長期間ニ於テ軟骨組織最モ強ク増殖セルヲ認メタリ。

即チ以上諸家ノ實驗ヲ綜合スレバ胎兒組織中最モ増殖力竝ビニ生活存續力ニ富ムハ軟骨組織ナリトス。

余ハ余ノ實驗ニ於テ腫瘍構成組織ノ發育狀ヲ大體五十日、百日、百五十日以上ノ各經過期間ニ分チテ研索セリ。

A、移植後五十日内外ノ組織の造構

五十日内外ニ於テハ其ノ組織の構造ハ甚ダ種々雜多ニシテ、總ベテノ組織成分即チ三胚葉ノ各組織共増殖盛ナルモ、

テ、盛ナル分泌機能ヲ營ミ、周圍ニ向ツテ浸蝕の態度ヲ保テルハ大イニ一考ヲ要スルノ價值アルモノナリトス。

而シテ人工的畸形腫ト自然的畸形腫トノ發生の機轉ニ就キテハ、前者ハ晚期胎生期ニ、後者ハ早期胎生期ニ發生スルコト及ビ前者ハ養子の產物ニテ、後者ハ姉妹の產物ノ關係ヲ有スル一點ノ相違ヲ見出スノミニシテ、之等胚芽ノ或ル部位ニ潛在シ、均衡破壊又ハ位置の障礙ヲ被ムリテ旺盛ナル増生ヲ營ミ、異常ナル大イサニ及ビ、更ニ進ミテハ惡性化シテ、惡性腫瘍形成ノ經過ヲ獲得スルニ至ル點ニ於テハ兩者間ニ何等相違ヲ見出ス能ハザルトコロニシテ、殊ニ Askany、池松氏ノ實驗例ハ之ヲ實證スルモノナリ。

然レバ必ズシモ本腫瘍ヲ以テ非真正腫瘍ナリト斷定スルノ早計ナルハ言ヲ重ヌル勞ナキモノニシテ、少クトモ余ノ作リ得タル移植新生組織ノ二、三ノモノハ Askany ノ所謂 Teratoid Geschwulst ト命名セルモノニ概當スルモノナリ。

第六章 總括

余ハ幼若、成熟甘口鼠合計一三九頭移植個數一九三個所ニ、〇・三乃至一・七種ノ種々ノ大キサノ胎兒組織ヲ移植シ、一種ノ腫瘍樣新生生物ヲ發生セシムルコトヲ得タリ。

移植地トシテハ皮下、胸腔、腹腔、筋肉等ニ試ミシガ、其ノ中皮下(八五%強)最モ良好ナル成績ヲ示メシ、次ニ胸腔内、筋肉ナリ。

胎兒組織移植ニ當タリテ、其ノ發育増生ニ對シ移植部位ノ如何ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナルカハ諸家ノ均シク之ヲ認ムルトコロニシテ、今日迄總ユル部位ニ於テ試ミラレタルトコロナリ、然ルニ獨リ胸腔内移植ハ諸家ノ未ダ嘗ツテ試ミザルトコロニシテ、余始メテ之ヲ實驗セリ。即チ余ノ實驗ニ於テハ總數四中、陽性三(七五%)、而シテ三例共百七十五乃至百八十四日ノ經過ヲトリ、大豆大乃至豌豆大養腫及ビ雀卵大四凸不平ノ甚ダ不整ノ塊團狀新生生物ヲ各例ニ發生シ、肺、橫隔膜、胸壁等ト強ク癒著シ、胸腔内ニ充滿セリ。

斯ク胸腔内移植ハ他部位ニ比シ、發育力ノ旺盛ニシテ、甚ダ不規則ナルハ注目ニ價スベキモノニシテ、此ノ部位ハ胎兒

○并手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生生物發生ニ就テ

ニ於テモ組織の造構漸次單純化シ、純然タル皮樣囊腫、表皮囊腫或ハ單層ノ骰子形或ハ扁平上皮ヨリ被ハレル單純性上皮囊腫ヲ形成スルニ至ル。

而シテ軟骨組織ハ殆ンド認メザルガ、或ハ僅カニ限局性ニ存在シ、而カモ斯卡ルモノハ石灰化、細胞膨大、分離、腔洞形成ヲ呈シ、核分裂像ノ如キハ全ク見ル能ハズ。

之ニ依レバ余ノ成績ハ五十日内外ニ於テノミ、諸家ノ成績ト一致スルトコロナルモ、彼等ノ成績ハ大部分短期日ニ於テノミ試ミタルモノニシテ、長期ニ互タリテ試ミタルハ Leopold, Petrow アルノミナリ、然ルニ前述ノ如ク長期ニ於テモ全ク之ト相反スルトコロナリ。

斯ク時日ノ經過ト共ニ腫瘍ノ組織の構造ノ漸次單純化スルニ從ヒ、軟骨細胞ハ他組織ト共ニ漸次増殖力ヲ減ジ、全ク吸收セラル、カ、或ハ僅カニ生ヲ保ツニ過ギザルニ反シ、上皮組織ハ益々増殖盛ニシテ、多クノ場合囊腫型ニ於テ現ハレ、旺盛ナル分泌機能ヲ營ムハ、大イニ括目ニ價スベキモノニテ、細胞ノ生活存續力並ニ抵抗力ナル點ニ對シ意義アルヲ想ハシム。

(七) 本新生物ハ真正腫瘍ナリヤ否ヤ

以上余ノ得タル成績ヨリ判斷スル時ハ本新生物ノ總ベテヲ以テ真正腫瘍ナリト斷定スルノ無謀ナルコトハ言ヲ要セズトモ、自ラ明ラカナルモノナルモ、其レニ反シ胎兒組織移植ニ依リ發生シタル新生物ヲ以テ、遽ニ真正腫瘍ニ非ズシテ、Birch-Hirschfeld u. Garten 一派ノ唱導スルガ如ク、唯單ニ胎兒組織ノ發育續行機轉ニ過ギザルモノ或ハ新生組織ノ集團ナリト看做スハ少シク早計ニ傾ムクノ恐レナキニ非ズ。尙今後ノ長キ經過ノ試驗續行ヲ要スルトコロナルモ、余ノ實驗第七五例ノ如キ數例過雀卵大ニ迄増大シ、退行吸收ノ徵ヲ全ク見ザルモノ、或ハ第七八例ノ如キ數例ノ長日月間ニ於テ毫モ變性、吸收、縮小ノ狀態ヲ現ハサザルモノ、殊ニ第六七例ノ如キ一年有餘日ヲ經過シ、死ニ至ル迄、逐次増大シ、鳩卵大ノ異常ナル大キサニ達シ、而カモ組織の検査ニ於テモ、其ニ主成分ヲナス囊腫ヲ被フ上皮細胞ハ依然トシ

共増殖盛ナルモ特ニ軟骨組織ノ増殖最モ盛ニシテ、殆ンド各例ニ於テ、其ノ主部ヲ占ム。表皮組織ハ之ニ次ギ所々ニ多量ニ存在ス。

百日内外ニ於テハ表皮組織増殖最モ盛ニシテ、既ニ或ハ表皮囊腫、皮様囊腫ヲ形成シ、軟骨組織ハ稍々増殖力減退シ、増生像及ビ正規ノ軟骨細胞ノ配列ヲ呈セルハ僅カニ一部ニ止マリ、大部ハ石灰化乃至骨髓或ハ骨形成ヲ營ム。

之ニ反シ此ノ期ニハ圓柱狀、骰子形上皮ヨリ圍繞セラル、囊腫型ノ發育良好ナリ。

百五十日以上ニ於テハ殆ンド毎常、表皮組織、各種上皮細胞ニ因ル囊腫型ノ發育最モ良好ニシテ、軟骨細胞ハ殆ンド認メザルガ、僅カニ退局性ニシテ、而カモ石灰化、細胞膨大或ハ腔洞形成ヲ呈シ、核分裂像ヲ全ク見ル能ハズ。而シテ日數ノ經過ト共ニ新生物ノ組織的構造ハ漸次單純化シ、表皮囊腫、皮様囊腫或ハ單純性上皮囊腫等ガ大部分ヲ占メ、更ニ囊腫ニ於テモ、其ノ構造甚ダ簡單、單純化スルニ至ル。

胎生組織移植ニ依リテ發生セル新生物ノ總ベテヲ以テ非真正腫瘍ナリトノ斷定ハ少シク早計ノ嫌アリテ、余ノ實驗例數例、殊ニ第七八例及ビ第六七例ノ如キ長日月ヲ經ルモ少シモ變性吸收ノ狀態ヲ示メサズ、益々増大シ鳩卵大ノ異常ナル大キサニ達セルハ大イニ一考ノ價値アルトコロニシテ、少ク共余ノ發生セシメ得タル一、三ノモノハ Askamazy ノ所謂 Teratoide Geschwulst ニ概當スルモノナリト信ズ。

第七章 結 論

一、余ハ文獻上未ダ嘗ツテ見ザル巨大ナル新生物ヲ形成セシメ得タリ。其中、一、二、三ノモノハ Teratoide Geschwulst トモ云フベク、自發的増殖力旺盛ニシテ真正腫瘍ト考フルモ、何等支障ヲ見ザル程度ナリキ。

二、時日ノ經過ト共ニ移植組織ハ漸次單純化シ、上皮細胞成分ハ何時ニ到ルモ發育旺盛ナルコトヲ

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ

組織ノ移植部位トシテ好適地ナルノミナラズ、其ノ發育機轉ニ對シテハ、特種的關係ヲ有スルモノナリ。

被移植動物ノ性及ビ年齡ノ移植胎兒組織ニ對スル關係ニ就テハ、雌ハ雄ニ比シ陽性%數ハ殆ンド同數ナレド、増殖力ハ強大ナリ。幼若動物ハ成熟動物ニ比シ、陽性%遙カニ大ニシテ、且ツ増殖ニ對シテモ亦甚ダ良好ナリ。

更ニ同一動物ニ於テ二個所移植ハ一個所移植ニ比シ、陽性%數並ビニ發育増生ニ對シ遙カニ良好ナリ。

新生物ノ大キサニ關シテ各部位ニ於テ得タル數例ニ於テ長日月、殊ニ第七八例、第六七例ノ如キ、前者ハ百七十五日、後者ハ一年有餘日ニ互タリ發育増大シ、過雀卵大及ビ鳩卵大ノ異常ナル大キサニ達シ、其ノ主要成分タル皮樣囊腫、表皮囊腫、單純性上皮囊腫ノ上皮細胞及ビ表皮組織ハ依然トシテ、盛ナル機能ヲ續ケ、何等變性、吸收ノ徵ヲ認メザリキ。

斯ノ如キ體重ノ三分ノ一乃至四分ノ一ノ巨大ナル新生物ヲ發生シ得タルハ實ニ驚異ニ價スベキモノニシテ、今日迄甘口鼠實驗者ニ於テハ勿論、其ノ他種々ノ動物ヲ使用セル諸家ノ報告ニ於テモ寡聞ナル余ノ智識ヲ以テハ未ダ知ラザルトコロナリ。

重代移植ハ余ノ實驗ニ於テハ二代移植五四%、三代移植五〇%ノ陽性ヲ來タシ、其ノ中、大部分ハ單時日ニ於テ吸收セラレタルモ、第一〇〇例ニ於テハ百六十日生存シ、大豆大ニ迄増大シ、且ツ組織的構造ニ於テ主成分ヲナス表皮囊腫、單純性上皮囊腫、一部ノ腸樣組織ノ上皮細胞ハ分泌機能旺盛ニシテ増生力ヲ保有セリ。

斯ク長時日間ニ於テ増大シ、生活力、増生力ノ旺盛ナルハ注目ニ價スベキモノニシテ、重代移植ノ可能ヲ實證シ得タルト共ニ、分離セル異型の組織胚芽ノ増殖ニ關スル點ニ於テ、生理的發育或ハ腫瘍發生ノ意義ニ對シ興味アルモノト思ハル。

各種組織細胞ニ於テ如何ナル組織細胞ガ生活存續力、抵抗力竝ビ増殖力ニ富ムカニ就テハ今日迄諸家ノ充分ナル觀察ヲ以テ、斷案ヲ下シタル記述ハ殆ンド皆無ト云フベク、僅カニ斷片の報告ナルカ、短時日ノ實驗ニ過ギザリキ。余ノ實驗ニ於テハ短時日五十日内外ニハ種々ナル組織ニ依リテ構成セラレ、甚ダ複雑ナル像ヲ呈シ、三胚葉ノ各組織

- 20) **Gating**, Über entzündungserregende Gifte, Verh. d. Deutsch. Path. Ges. 19, 1922. 21) **Hirschfeld, Hans**, Über experimentelle Teratome bei Ratten, Berl. kl. Wochenschr. Nr. 17, 1912. 22) **Hanseman**, cit. nach Wilms. 23) **Haga**, Experimentelle Untersuchungen über die Erzeugung atypischer Epithel- und Schleimhautwachstums, Zeitschr. f. Krebsforsch. Bd. 12, 1912.
- 24) **Hippel**, Demonstration eines experimentell erzeugten Teratoms, Verh. d. Deutsch. Path. Ges. T. 11, 1907. 25) **本田**, えんぶりお移植=闊スル知見補遺, 日・病, 第十三年, 562頁, 大正十二年. 26) **池松**, 卵黄=胎生及成熟動物組織=移植實驗就中家雞胎生組織移植=由來スル可移植性纖維肉腫ノ發生ニ就テ, 日・病, 第十三年, 569頁, 大正十二年. 27) **片瀧**, 胎生組織ノ移植實驗(第一回報告), 東京醫學會雜誌, 第二十六卷, 第五號, 明治四十五年. 28) **清野, 末安**, 諸種動物ノえんぶりを組織ノ鳥類えんぶりを=移植セル實驗的研究, (移植ニ對スル種族特性ノ分化論追加第一), 29) **Leopold**, Experimentelle Untersuchungen über die Ätiologie der Geschwülste, V. A. Bd. 85, S. 283, 1881. 30) **Lubarsch**, Über Gewebsentstehungen und Gewesverlagerungen, Verh. d. Deutsch. Path. Ges. 1898-1900, S. 97. 31) **向山, 八木**, 胎兒組織ガ移植性腫瘍ニ及ボス影響ニ就テ(第一報), 日・病, 第十三年, 577頁, 大正十二年. 32) **向山, 八木**, 移植性腫瘍ニ混合セル胎兒組織ノ運命ニ就テ, 日・病, 第十三年, 580頁, 大正十二年. 33) **向山, 八木**, 雞胎兒組織ト可移植性雞肉腫トノ混合移植ニ就テ(第二報), 日・病, 第十四年, 713頁, 大正十三年. 34) **松山**, 胎兒組織移植實驗(人丁の皮膚囊腫及「てらと」ニ移植腫瘍發生)部, 第十三年, 第三冊, 177頁, 大正五年. 35) **Michalowsky**, Die experimentelle Erzeugung einer teratoiden Neubildung der Hoden beim Hahn, Centr. f. allg. Path. Bd. 38, S. 585, 1926. 36) **岡部**, 甘口鼠腫瘍ノ交代移植腫ニ人類及ビ甘口鼠腫瘍ノ海狗脂肪組織内移植ニ就テ, 日・病, 第十三年, 698頁, 大正十二年. 37) **Petrow**, Experimentelle Embryonalpflanzungen, Zeigers, Beitr. 43, II. 1, S. 1, 1908. 38) **Petrow**, Ein experimentell erzeugtes Hodentumör, Centrall. f. allg. Path. Nr. 9, S. 363, 1906. 39) **Pick**, Über experimentelle Teratome bei Hühnern, Berl. klin. Wochenschr. Nr. 17, 1912. 40) **Rous Peyton**, The relation of embryonic tissue and tumor in mixed grafts, Journal of exp. Med. Vol. 13, No. 2, 1911. 41) **Rösle**, Über die Einwirkung von Embryonalzellen, Münch. med. Wochenschr. Nr. 1, 1906. 42) **Saltykow**, Über Transplantation, zusammensetzter Teile, A. f. Entwickl. 1900. 43) **Schöne**, Über Transplantationsimmunität, Münch. med. Wochenschr. 1912, S. 457. 44) **Stilling**, Die Entwicklung transplantierter Gewebsteile, Verh. d. Deutsch. Path. Ges. 1903, S. 122. 45) **Stilling**, Versuche über Transplantation, Zieglers Beitr. Bd. 49, 1908. 46) **Traina**, Über Transplantation von Embryonalgeweben ins Ovarium und die Bildung von Ovarialysten, Centr. f. allg.

○井手・胎兒組織移植ニ依ル畸形腫瘍新生物發生ニ就テ

證明セリ。即チ移植物ハ次第ニ未分化状態ニ變化シ、發育旺盛ナル上皮成分ノミヲ殘シ、先人ノ軟骨移植率最大ナリト云ヒシハ唯短時日ノモノ、ミニテ、長時日ニテハ上皮細胞成分ノ發育旺盛ナルヲ確メタリ。

三、先人ノ未ダ施行セザル胸腔内移植ハ移植物ノ發育最モ旺盛ニシテ不規則ナリ。

摘要ニ際シ、終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜ハリシ恩師竹内教授ニ謹シテ感謝ノ意ヲ捧グ。

文獻

- 1) **Askanazy**, Die Resultate der experimentellen Forschung über teratoide Geschwülste, Wiener med. Wochenschr. Nr. 43, 1909.
- 2) **Askanazy**, Die Resultate der experimentellen Forschung über teratoide Geschwülste, Wiener med. Wochenschr. Nr. 44, 1909.
- 3) **Alessandri**, cit. nach Traüna.
- 4) **Borst**, Die Lehre von den Geschwülsten, Jbl. E. S. 839.
- 5) **Borst**, Die Allg. Path. d. malignen Geschwülste, S. 84.
- 6) **Bisceglie**, Über Implantationen der mit Tumorfiltrat behandelten Embryonalgewebe und die Genese der Neoplasmen, Zeitschr. f. Krebsforschung, Bd. 22, H. 6, 1926.
- 7) **Bisceglie**, Der Einfluss der Kretisfiltrate auf die Entwicklung des „in vivo“ und „in vitro“ verpflanzten Mäusecarcinoms, Zeitschr. f. Krebsforschung, 23, S. 340, 1926.
- 8) **Burrows**, A preliminary note on the study of experimental embryonata in mice, Journal of Cancer research, Vol. 9, No. 2, P. 224, 1925.
- 9) **Birch-Hirschfeld und Garten**, Über das Verhalten implantierter embryonaler Zellen in erwachsenem Tierkörper, Zieglers. Beitr. 26, H. 1, S. 131, 1899.
- 10) **Carrel**, cit. nach Visceglie.
- 11) **Dietrich**, Experimentelle Teratome an Ratten, Berl. Klin. Wochenschr. 1912, S. 457.
- 12) **Del Conte**, Einpflanzungen von embryonalen Gewebe ins Gehirn, Zieglers. Beitr. 42, H. 1, S. 192, 1907.
- 13) **Freund**, Über experimentelle Erzeugung teratoider Tumoren bei der weissen Ratte Zieglers. Beitr. 51, S. 490, 1911.
- 14) **Friedemann, Zimmermann u. Schwalbe**, cit. nach Freund.
- 15) **Féré**, Tumoren durch Impfung unter die Haut, Centr. f. allg. Path. 6, S. 697, 1895.
- 16) **Féré**, cit. nach Birch-Hirschfeld u. Garten.
- 17) **Fischer**, Über Transplantation von organischem Material, D. Zeitschr. f. Chir. 17.
- 18) **Fischer, Bernhard**, Über experiment. Erzeugung von Epithelwucherung u. Epithelmetaplasie, Verhandl. d. Deutsch. Path. Ges. T. 10, S. 20, 1906.
- 19) **Fraenkel**, Über Versuche, durch experimentelle Verlagerung von Keimgewebe Karcinom zu Erzeugen, entzähl. f. allg. Path. Bd. 14, S. 664, 1903.

附圖第三表
PLATE III.

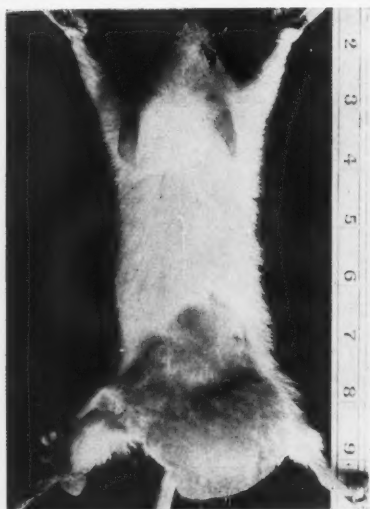


Fig. 1

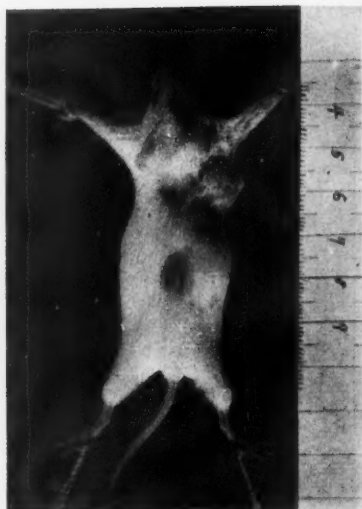


Fig. 2



Fig. 3

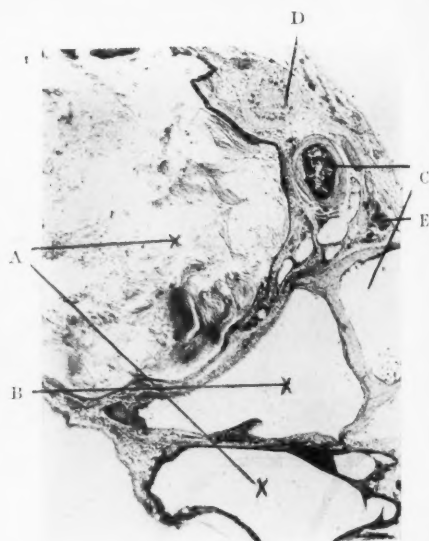


Fig. 4

Path. 13, S. 4, 1902. 47) Tiesenhausen, Zur Frage über die Implantation von Embryonalgewebe, Virchows. A. Bd. 196, H. 1, S. 154, 1909. 48) Wilms, Wachstum embryonaler Implantation und Geschwulstbildung (mit Demonstration), Verhandl. d. Deutsch. Path. Ges. 1902, H. 2, S. 79. 49) Zahn, Über das Schicksal der in den Organismus implantierten Gewebe, Virchows. A. Bd. 95, H. 3, S. 369, 1884. 50) Zahn, cit. nach Leybold.

附圖說明

第一圖 第六七例腫瘍(移植後三百三十三日目寫)

第二圖 第七八例腋窩部腫瘍(移植後百三十日目寫)。本例ハ百七十五日經過ニテ過雀卵大ニ迄増大セリ。

第三圖 第七四例背部腫瘍(移植後二十三日目寫)。本例ハ三十六日經過ニテ小指頭大ニ迄増大セリ。

第四圖 第七五例背部腫瘍(五十八日經過)

A 表皮組織ヲ以テ被ハレタル囊腫。B, 表皮組織單層扁平上皮ヲ以テ被ハレタル囊腫。C, 骨髓組織。D, 軟骨組織。E, 腺樣組織。第六二例(十五日經過)

A, 軟骨組織。B, 腸樣組織。C, 單層骰子形上皮ニ被ハル、囊腫。D, 神經節。E, 網膜色素細胞列。F, 増殖著明ナル結締組織。

第六圖 第一三一例背部腫瘍(五十六日經過)

A, 表皮組織ヲ以テ被ハル、囊腫。B, 軟骨組織。C, 骨髓組織。D, 腺樣組織。E, 脂肪組織。F, 結締組織。第七圖 第七二例腹部腫瘍(百六十七日經過)

A, 單層乃至重層ノ扁平上皮ニ被ハレタル表皮囊腫或ハ皮樣囊腫。B, 單層ノ圓柱乃至骰子形上皮ニ被ハレタル囊腫。C, 石灰化胞狀膨大ヲ呈セル軟骨組織。

第八圖 第七八例心臟部囊腫(百七十五日經過)

第九圖 第七七例上中肺葉間囊腫(百八十四日經過)

第十圖 第六七例腫瘍ノ皮樣囊腫壁ノ一部(二年有餘日經過)

第十一圖 第七四例腫瘍ノ表皮及ビ粘膜上皮ノ兩成分ニ被ハレタル囊腫。A, 表皮組織。B, 粘膜上皮。

第十二圖 第七八例腋窩部腫瘍。毛根, 毛囊増生シ, 腺癌乃至扁平上皮癌樣像ヲ呈ス。

附圖第五表
PLATE V.

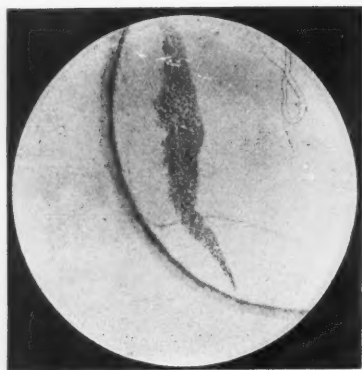


Fig. 9

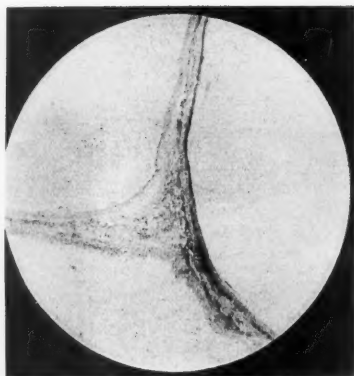


Fig. 10



Fig. 11

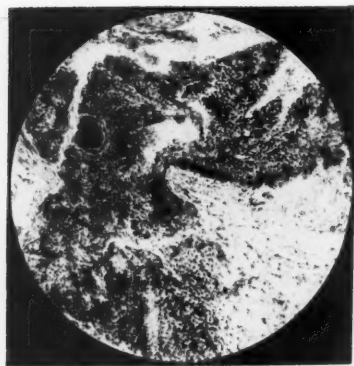


Fig. 12

附圖第四表
PLATE IV.

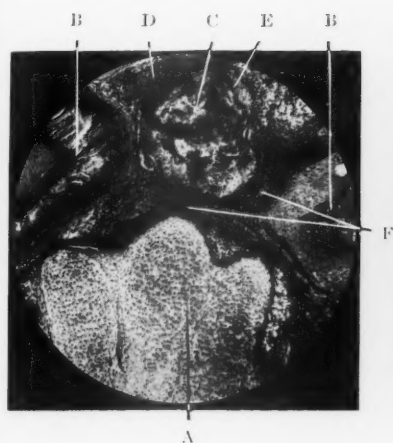


Fig. 5

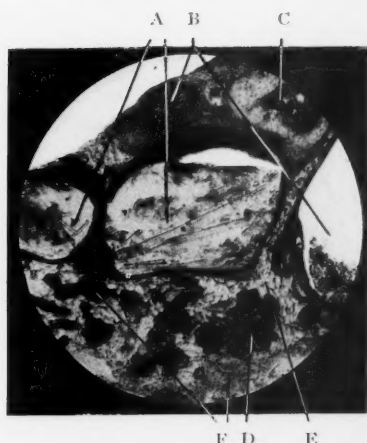


Fig. 6

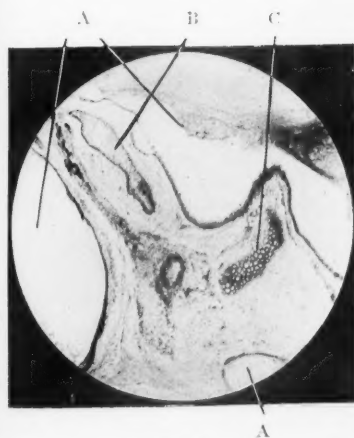


Fig. 7

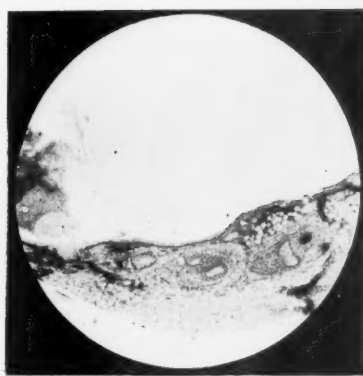


Fig. 8

惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル

移植實驗成績ニ就テ(附圖第六—八表)

東京帝國大學醫學部病理學教室

醫學士 三 和 功

目次

第一章 序言

第二章 文獻

第三章 イエンセン系鼠肉腫ノ家兎諸臟器、筋肉及ビ皮下ニ於

ケル移植

第一節 豫備試驗

第二節 實驗

第三節 參考

第一章 序言

腫瘍ノ同種或ハ異種族動物移植ヲ試ミ、其生物學の性質ノ研究ニ努メタルモノ東西ノ文獻ヲ通ジ、枚舉ニ暇アラズ。而シテ被移植臟器ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒ、移植ノ陽性率、腫瘍増殖ノ程度ニ差異ヲ生ズル事實ハ、同種族間ニ於テノミナラズ、特ニ著明ニ異種族間ニ認メラル。余ハ曩ニ異種族動物間ニ於テ、腫瘍移植ニ良好ナリト稱スル腦ヲ始メ、肺、肝、脾、腎及ビ筋等ニ就テ、血清學的近親關係ヲ檢査シ一定ノ知見ヲ得タルヲ以テ、是等臟器組織ニ二、三惡性腫瘍ノ移植ヲ企テタリ。尙ホ之レガ實驗成績ト臟器ノ血清學の種族特性ノ關係ヲ附記セント欲ス。

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

實驗第一、家兎肉腫ノ白鼠腦及ビ皮下移植	實驗第二、甘口鼠癌ノ家兎諸臟器、筋肉並ニ皮下移植	實驗第三、甘口鼠癌ノ白鼠腦及ビ皮下移植	第四章 總括及ビ考察	第五章 結論	文獻
---------------------	--------------------------	---------------------	------------	--------	----

リシ爲メ)ノ外、總テノ腦及皮下移植ハ著明陽性ヲ呈セリ。供試白鼠ノ數ハ十七頭ニシテ移植後五日乃至三十日間ニ於ケル屠殺檢鏡ニ由ルニ、腦内移植九頭中九頭ニ、皮下移植十六頭中十三頭ニ陽性ニシテ、肉眼的及組織的ニ腫瘍増殖度ヲ比較スルニ、腦内ニテハ皮下ニ比シ緩徐、且ツ移植率ハ腦ニ於テ稍優レリ。是等ノ成績ハ、山崎氏⁽²⁾ノ同様ナル實驗ノ報告ヲ肯定シ得可ク、腦内移植新生腫瘍ト原株腫トノ間ニ、特ニ認ム可キ差異ヲ有セズ。

第二節 實驗

研究材料及ビ移植方法

腫瘍種ハ、イエセン³系鼠肉腫ニシテ、白鼠皮下移植材料ヲ用フ、發育ハ一週間ニシテ米粒大、十日目頃大豆大或以上ニ達ス。硬度鞏ク、鬆粗ナル結構ニヨリテ周圍組織ト癒著シ、剖面ハ中心部灰白褐色調ヲ呈シ、脆弱軟化ノ部有リ、周邊ハ透明、髓樣ニシテ、色調ハ淡赤色ナリ。組織的ニハ、細胞ニ富ミ、雜然ト羅列スル所ト、小束狀ヲナシテ互ニ相交錯スル部ト混在ス。細胞ハ多形性ニシテ、束狀ニ集合セル所ニテハ橢圓形乃至長短種々ノ紡錘形細胞ヲ見ル。原形質ハ多量ニシテ、境界不明ノモノ多ク、核ハ形態、大サ種々、泡狀ニシテくろまらんニ乏シ。間質ハ極メテ少シ。

移植方法ハ前述鼠癌移植ノ場合ト同様ニシテ、家兎(一六〇〇乃至二〇〇〇瓦體重、主ニ雄)ノ腦、肺、肝、脾、腎、筋(大腿部内側)及皮下(腰脊部)ニ無菌的操作ノ下ニ移植ス。肺ハ套管針ヲ以テ胸壁ヨリ穿刺シ、肝、脾、腎ハ開腹後、各所要臟器ヲ露出シ、套管針ヲ實質内ニ刺入シテ腫瘍片ヲ靜ニ送致シ、止血後腹壁ヲ閉ヂ縫合ヲ爲ス。術後四日以内ニ衰弱死ヲ來タセルモノ二頭有リ。供試家兎ノ數ハ四十七頭ニシテ、總テ生活狀態ヲ同一ノモトニ置ケリ。

實驗成績

移植後一日(完全一日經過ヲ意味シ以下同様)ヨリ十五日ニ至ル期間ノ種々ナル時期ニ屠殺シ、移植腫瘍片ノ發育増殖及ビ其周圍組織ニ於ケル反應性變化ヲ順次攻究セントス。

發育ノ程度ニ就テハ、移植腫瘍片ハ粟粒大ニシテ、各臟器組織内移植後ノ經過ヲ見ルニ、特ニ増大ヲ示スモノ少ク、

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉竝ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

本實驗ニ當リ、諸種動物腫瘍(バシユフオート系甘口鼠癌ヲ除キ)ハ、慈惠會醫科大學教授木村博士ニ其分與ヲ仰ギタリ、御厚意ニ對シ深謝ス。

第二章 文獻

同種族動物間腫瘍移植ニ於テハ、被移植動物ニ該腫瘍發育ニ、種々適當ナル要件ガ自然的ニ備ハリ、移植可能性ノ大ナルヤ異種族間移植ノ場合ト異ナル可キハ、自ラ明カニシテ、多數研究家ノ成績ヲ綜合スルニ、腦、肝、脾、腎、筋、皮下等ハ著明ナル陽性ヲ現ハスト謂フ可シ。而シテ異種族動物間ニ於テハ、白井⁽¹⁾(1924)高橋⁽²⁾(1923) Lane⁽³⁾(1922)齊藤⁽⁴⁾(1925)細田⁽⁵⁾(1925)赤松⁽⁶⁾(1925)大島及露木⁽⁷⁾(1926)清野及末安⁽⁸⁾(1917)山崎⁽⁹⁾(1922)岡部⁽¹²⁾(1923)小喜多⁽¹³⁾(1924)長興及和合⁽¹⁵⁾(1921)吉岡⁽¹⁶⁾(1925)等諸氏ノ報告ニ依ルニ、移植陽性ナリト發表セルハ、齒髓、中耳腔、筋肉、えむぶりお、腦等ニシテ、皮下組織ニ就テハ必ズシモ良好ナル移植地タラザル成績多シ。其他移植地トシテ、睾丸、脾臟、肝臟等實驗セラレタルモ、未ダ陽性ヲ得タル報告ニ接セズ、且ツ腎臟内移植ニ就テハ未ダ實驗無キガ如シ。

第三章 イエンゼン系鼠肉腫ノ家兎諸臟器、筋肉及皮下ニ於ケル移植

第一節 豫備試驗

①本實驗ニ進ムニ先キ立チ、腫瘍移植ノ熟達ニ資セントシ、フレキシナー系鼠癌ヲ同種動物ノ腦、皮下移植ヲ試ミタリ。

原株腫瘍、當鼠癌ヲ白鼠皮下ニ移植後十日乃至二週日以内ノ發育良好ナル腫瘍ヲ無菌的ニ剔出採取シ、周邊ノ健康部ヲ粟粒大ニ細截シ、滅菌食鹽水ヲ以テ洗滌シ、是レヲ白鼠ノ腦及皮下ニ送致ス。白鼠ハ通常體重八〇瓦内外ノモノヲ用フ。腦内移植ニハ頭部ヲ消毒シ、頭骨ニ小孔ヲ穿チ、えーてる麻酔ノ下ニ、約一耗直徑ノ套針ニ腫瘍細片ヲ充タシ、靜ニ刺シ入レ大腦半球髓質内ニ内容ヲ送入ス。皮下ニハ腰背部ニ送入ス。

最後ノ一群(五頭)ノ實驗ニ於テハ、移植後十四日より三十日目ノ屠殺鏡檢ニ據レバ、一頭ノ腦内移植陰性(移植ノ際髓質ノ毀損大ナ

タルモノ或ハ筋肉ノ如キ緻密ナル組織中ニ在ルモノハ、紡錘形ヲ示スモノ無キニアラザレド、腫瘍ノ種々ノ部位ヲ觀察スレバ何レモ原株腫瘍ニ大同小異ナリ。

周圍組織ニ於ケル變化。何レノ被移植臟器タルヲ問ハズ腫瘍ト周圍組織ノ境界ハ、銳利ナルモ部分的ニ不明ナル所有リ。移植術ニ伴フ出血ハ、七日頃マデ其痕跡ヲ殘スモノ有リ。周圍組織ノ腫瘍ニ相接スル部分ハ、何レモ多少ノ變性乃至壞死ヲ來タシ、殊ニ肝臟ニテハ稍々廣キ領域ヲ侵ス。腦ニテハ該部ノ狹少ナル範圍ノ腦質ガ水腫狀或ハ鬆粗ニシテ纖維狀ニ見ユルアリ。小血管ハ皆血液ヲ以テ充タサレ、其數幾分增多セリ。多核白血球及ビ淋巴細胞ハ周圍組織ニ於テ滲透性或ハ散在性又ハ集團のニ現ハレ、通例移植陽性ノ場合ハ陰性例ニ比シ其浸潤少キモ、陰性ノ場合却テ之レヲ缺ケルモノ多數例有リタリ。而シテ移植ノ成否ニ不拘、一般ニ初期ニハ多核白血球ヲ主トシ、淋巴細胞ハ僅カ之レニ附隨シ、後期即チ移植數日後ニハ淋巴細胞ヲ主トシ、白血球ハ僅カトナル、然シ白血球浸潤ガ後日マデ續キ、又ハ淋巴細胞ガ初期ヨリ稍々多數出現スル等種々ノ例外アリ。腦ニ於テハ白血球浸潤ハ、五日目頃ヨリ他ノ臟器ノ場合ニ比シ著シク少クナリ、アル例ニテハ全く認メザルモノ有リ、淋巴細胞出現ノ消長ハ他ノ場合ト同様ナリ。結締組織細胞ハ遊走細胞ノ場合ト同様、移植陽性例ハ陰性例ニ比シ新生無キカ或ハ一般ニ微弱ナリ。腦ニテハ結締組織ノ新生ナキモ、七日頃ヨリ多少ぐりあ細胞ノ増生ヲ來タスベシ。他ノ臟器内ニ就テハ何レモ大同小異ニシテ特ニ擧グ可キ事ナシ、但シ陰性ノ場合ハ結締組織細胞竝ニ纖維ノ増加ハ可ナリニ著明ナリ。

以上ハ移植腫瘍ノ各臟器組織ニ於ケル發育及ビ組織の所見ノ大要ナリ。今移植後各期日ニ於ケル陽性成績ヲ臟器ニ從ツテ順次表示スレバ左ノ如シ。

各表ヲ通覽スルニ、腦ニ於テハ、移植後一、二日ニ凡ベテ陽性ナルモ原株細胞ノ遺殘ガ主ナリ、三日乃至六日ニハ細胞ノ新生アルモノ多數ニ見出サレ、陽性例多數トサルモ未ダ強陽性ナラズ。七日、八日ニハ増殖甚ダ旺盛トナリ、十日

○三和。惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉竝ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

腎臟ニ於テハ腫瘍片ハ髓質ニ或ハ之レヨリ皮質ニ跨リテ介在シ、五日ニハ小豆大、七日ヨリ十五日ニテ大豆大ニ達シタルハ、皮質表面ニ膨隆セリ。腦ニテハ腫瘍ハ髓質又ハ腦室ニ存在シ、六日、七日目ニ米粒大、十四日ニ小豆大ノモノ有リタルモ、組織的ニハ中等度ノ發育ナリキ。次ニ脾ニ於テ七日目ニ米粒大ニ達セルヲ見タル外、他ノ移植地ニハ特ニ記スベキ所見無シ。剖面ヲ觀ルニ、一般ニ腫瘍ノ形態ハ不定形ニシテ、灰白或帶黃褐色ヲ示シ、壊死強キハ融解吸收サレ、汚穢空洞ヲ形成スル有リ。腎臟ニ於テ發育旺盛ナリシモノハ、多クハ球形ヲ呈シ、邊緣ハ灰白色透明ニシテ實質ヲ現ハシ、隣接腎組織ハ壓排セラレタルヲ見ルベシ。

組織的所見（ふをるまりん液固定、ばらふいん切片、普通染色、マロリー氏變法ハイデンハイン法）ヲ概括スルニ、移植片ニ就テハ、各其ノ被移植臟器ノ異ナル場合ニ於テモ、逐日起リ來ル組織的所見ハ大體同様ナリ。即チ移植片ノ變性又ハ壊死ハ多クハ先ヅ其邊緣細胞ニ始マリ、四日、五日ニ至レバ内部ニ迄テ達シ、核ノ崩壞、凝固萎縮或ハ融解消失ヲ呈シ、胞體染色不良トナル、反ニ尙ホ十日乃至十四日ニ至ルモ、染色多少不良ナガラ比較的良ク其健態ヲ保ツモノ有リ。遊走細胞殊ニ多核白血球ノ浸潤ハ最初邊緣ニ現ハレ、移植腫瘍ノ破碎顆粒物ト共ニ堆積シ、漸次内部ニ浸潤シ來タリ、或ハ遊走細胞ハ初メヨリ殆ド僅カニ見ユルモノアリ。

腫瘍細胞ノ新生ニ關シテ、早キハ移植後二日目ニ、多クハ三日頃ヨリ移植片邊緣ノ外層ニ於テ、一局又ハ數局或ハ全周ヲ繞リテ、腫瘍ノ新生ヲ惹起シ、細胞ハ一列又ハ二、三例ヲ成シテ周圍組織ニ進入シ、時日經過ニ從ヒ血管等ニ沿ヒタルハ時ニ樹枝狀ヲ示シ、核分割著明トナリ、増殖益々盛ニシテ廣汎ナル範圍ヲ占ムルニ至ル。然レバ該腫瘍中ニ點狀ノ小壊死竈ヲ現ハスモノモ出ヅ。増殖ハ主ニ擴大性ナルモ、之レニ浸潤性増殖ガ加ハリ腫瘍裡ニ臟器細胞ヲ遺殘スルモノ有リ。而シテ腦ニテハ主ニ浸潤性ニシテ、之レニ擴大性ヲ示ス部分ハ概シテ腫瘍ノ腦室ニ境スル場合トス。肝、脾及ビ腎ニ在リテハ、主トシテ擴大性ナルモ浸潤性増殖ノ點モ多少見ラル。筋肉ニテハ浸潤性増殖ヲ主トスルガ如シ。新生腫瘍ノ組織像ハ原株腫瘍ニ同ジク、細胞個々ノ形態、大サ等同様ナルモ、増殖ノ速カナル場合ニハ多形性強ク、増殖ノ遅々

第三表 移植後5—6日經過

家兔 番號	臟器	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮下
140		++		—	—		++	
150		—		—	—	—	—	—
155		++	—		—	++	++	—
163		++	—	++	—	++	++	—
167		+	—	—	—	+	—	—
170		++		+	—	++	++	++
176		+		—	—	+	—	—
149		—		—	—	+	—	—
陽性比		$\frac{6}{8}$ (0.8)		$\frac{2}{7}$ (0.3)		$\frac{6}{7}$ (0.9)	$\frac{4}{8}$ (0.5)	$\frac{1}{7}$ (0.1)

第四表 移植後7—8日經過

家兔 番號	臟器	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮下
142		+	—	—	—	+	—	—
143		—	—	—	—	—	—	—
144			—	—	—	++	—	—
156		++	—	—	—	++	—	—
165		—	—		—	—	—	—
169		++		—	—	—	—	—
172		+		—	—	—	—	—
175		++		—	++	++	++	—
141		—	—	—	—	—	—	—
陽性比		$\frac{5}{8}$ (0.6)			$\frac{1}{9}$ (0.1)	$\frac{4}{9}$ (0.4)	$\frac{1}{9}$ (0.1)	

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉竝ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

第 一 表 移 植 後 1 — 2 日 經 過

家兎 番號	臟 器	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮 下
151		+		+	-	+		+
171		+		+	+	+	-	+
174		+		+	-	+		+
182		+	+	+	+	+	+	+
160		+	+	+	-		+	+
173		+			+	+	-	+
177		++	-	-	-		-	+
180		+		-	-	+	++	+
陽性數 移植數	(陽性) 比	$\frac{8}{8}$ (1.0)	$\frac{2}{3}$ (0.7)	$\frac{5}{7}$ (0.7)	$\frac{3}{8}$ (0.4)	$\frac{6}{6}$ (1.0)	$\frac{3}{6}$ (0.5)	$\frac{8}{8}$ (1.0)

第 二 表 移 植 後 3 — 4 日 經 過

家兎 番號	臟 器	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮 下
168		++		+	-		-	-
178		++	-		-	++	+	-
179		++	-		-		++	-
145			+	-	++	-	-	-
陽 性 比		$\frac{3}{3}$ (1.0)	$\frac{1}{3}$ (0.3)	$\frac{1}{2}$ (0.5)	$\frac{1}{4}$ (0.3)	$\frac{1}{2}$ (0.5)	$\frac{2}{4}$ (0.5)	

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

表中符號

- 十、弱陽性。移植片邊緣ニ於テ腫瘍細胞存在シ、又ハ新生腫瘍ノ猶ホ遺殘シ變性無キ場合、核分裂像ハ一般ニ著明ナラズ。
- 廿、中等度陽性。腫瘍細胞ノ二、三層又ハ數層ヲナシテ新生ヲ示スモノ、多クノ場合著明ナル核分裂像ヲ散見ス。
- 卅、強陽性。新生腫瘍ハ廣汎ナル範圍ヲ占メ、核分割像著明、既ニ腫瘍裡ニ點狀ニ變性ヲ來タセルモノ有リ。
- 一、陰性。腫瘍細胞ハ總テ變性壞死ヲ呈セリ。表中符號無キハ移植術不成功ヲ意味ス。

乃至十四日ニハ陽性多數ナルモ中等度發育ヲ示ス。肺臟ニ於テハ、一日ヨリ四日ヲ通ジ、弱度陽性例少數ニシテ五日以後陽性所見ヲ得ズ。肝臟ニテハ四日目マデ弱陽性ノミナルモ、五日、六日ニ一例ノ強陽性ヲ示シ、以後十五日マデ稀ニ弱又ハ中等度陽性ヲ示スモノ有リ。脾臟ニ就テハ一、二日目ニ弱陽性例少數ニシテ、以後十五日マデ中等度以上陽性ノモノ稀ニ見ラル。腎臟ハ一、二日ニハ凡テ弱陽性、三、四日ニハ中等度發育ヲ呈シ、五日乃至八日ニハ強陽性多數見ル。以後ハ陰性ナリ。皮下ハ一、二日ニ於テ、總ベテ弱陽性ヲ呈シ、五、六日ニハ、一例中等度陽性ヲ示セリ。以後ノ例ハ皆陰性ナリ。

而シテ各表ニ掲ゲタル陽性比(移植率)ヲ基トシテ、諸臟器内移植陽性度ヲ比較スルニ、何レノ臟器内ニ於テモ一日ヨリ四日ノ經過ニテハ、陽性比ニ多少ノ差異アレドモ、大體同程度ノ移植率ヲ示シ、未ダ腫瘍移植ニ適否ノ臟器ヲ定メ難シ。五乃至八日經過ヲ見ルニ、何レニモ強陽性例ヲ示スモ、移植率ハ腎及ビ腦ニ於テ最も高く、筋肉ハ之レニ次グ。十日乃至十五日經過期ニハ、腦、腎ニ於テ移植率高シ。脾及ビ肝ハ各期日ニ稀ニ陽性ヲ呈スルモ、移植率ハ遠ニ低度ナリ。

要之、イエンゼン系鼠肉腫ヲ家兎ノ諸臟器ニ移植スル際、發育並ニ移植率ニ等差有リト雖、一般ニ移植初期ニハ、何レノ臟器ニモ陽性ニシテ、時日ヲ經過スレバ臟器ニ從ツテ陽性率及ビ發育狀況ヲ異ニスルニ至リ、腫瘍増殖ニ適應セル臟器ト否トニ分タル可シ。即チ三、四日頃迄デハ何レノ臟器ニモ移植可能性ヲ示シ、五乃至八日ニ至レバ、腎、腦、筋

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

第五表 移植後10—12日經過

家兎 番號	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮下
162	—	—	—		—	—	
164	—	—	—	—	—	—	
166	+		—	—	+	—	—
184	+	—	—	—	—	—	—
139						—	—
152		—	—	—	—	—	—
157	++	—	++				—
161	—		—	—	—	—	—
陽 性 比	$\frac{3}{6}(0.5)$		$\frac{1}{7}(0.1)$		$\frac{1}{6}(0.2)$		

第六表 移植後14—15日經過

家兎 番號	腦	肺	肝	脾	腎	筋	皮下
138		—	—			—	—
146	—		—		—	—	—
147			—	—	—	—	—
148	++		—		—		
153	++	—	—	—		—	—
154	+	—	—	—	—	—	—
158	+	—	—	—	++	—	
159	+	—	+	—	++		
183	+	—	—	++	—		—
181			—		+++		—
陽 性 比	$\frac{6}{7}(0.9)$		$\frac{1}{10}(0.1)$	$\frac{1}{6}(0.2)$	$\frac{3}{8}(0.4)$		

○三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

移植腫瘍種ハ前記ニ同ジ。實驗シタル白鼠ハ十九頭ナリ。移植後五日ヨリ二十二日ニ至ル種々ノ時期ニ検査シタルニ、五乃至八日目ニ腦ニハ移植六頭中五頭、皮下ニハ五頭中四頭陽性ニシテ、移植率ハ彼は大差無キモ、増殖ノ旺盛ナルハ腦ニ於テ優レリ。以後ノ時期ニハ兩移植地何レニモ陽性ヲ示サズ。周圍變化ニ就テハ前實驗ト大同小異ナリ。

第四章 總括及考察

イエンゼン系鼠肉腫ヲ家兎ノ腦、肝、脾、腎、筋及皮下ニ移植シタル成績ニ據ルニ、初期ニ於テ殆ど總ベテノ移植地ニ陽性ヲ呈スルモ、五乃至八日ニハ腎、腦、筋ニ發育好ク、尙ホ日數ガ經過シ十四、五日ニ至レバ、腦及腎ガ最モ良好ナル腫瘍増殖地ニシテ、殊ニ腎内發育ノ旺盛ナルハ注目ニ値ス。脾、肝ハ十四、五日迄デ稀ニ陽性ヲ示スモノ有リ。這ノ關係ヲ癌腫ニ就テ鑑ルニ、バシユフオード系甘口鼠癌ヲ家兎諸臟器ニ移植シタル實驗ニヨレバ、總ジテ發育狀況ハ不良ナルモ、肉腫ノ場合ト同様ニ、移植ノ最初期ニハ多クノ臟器ニ移植片殘存スルモ、既ニ三日ニシテ腦、腎、筋肉内ニノミ中等度ノ發育ヲ見ル可シ。由是觀之、肉腫タルト癌腫タルト不問、一般ニ異種族間移植ニ於テ、腫瘍ハ初期ニハ種々ノ臟器ニ發育可能性ヲ有シ、培地タル要件ニ適合スルヲ得可キモ、稍々長時日ニ渡リ發育ヲ續ケ、腫瘍ノ特性ヲ發揮スルニ最モ好適ナルハ、少クモ肉腫ニ於テハ、腎及腦ヲ第一トシ、次ハ筋、脾、肝ナル可シ。

文獻ニ見ル如ク、腦ハ異種族間移植ニ於テ、最モ良好ナル移植地タルハ、白井、高橋、山崎山氏等ニ依リテ報告セラレ、余ノ場合移植率ハ高キモ増殖度ハ白井氏ノ稱スル如ク總テ著明ナリト云フ可ラス。筋肉内ニ在リテハ、Friedrich *Franklin* (1923) ハ人類めらのざるこゝむヲ白まうすニ移植シタルニ陰性ニシテ、赤松⁽⁸⁾氏ハ、鼠肉腫ノ異種族鳥移植ニ全然陰性ナリシモ、家鶏肉腫ハ可良ナルヲ實驗シタリ。余ハ鼠肉腫移植ニ際シ、八日迄デ家兎筋肉内發育良好ナリシモ移植率ハ低下シ、甘口鼠癌ニテハ三日迄デ新生ヲ呈シタリ。

腎臟ニ關シテハ、同種動物間ニ就テ數氏(Road Graf, K. Stumpf, 藤繩氏等)ノ業績有リト雖ドモ、異種族間移植ニ就テハ、余ノ文獻ニ未ダ報告無キガ如シ。腎臟内移植ハ腦ノ場合ニ匹敵ス可キ移植率ヲ有シ、而モ其ノ増殖狀態ハ腦ニ於

〇三和・惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

ヲ以テ、單ニ陽性ナルノミナラズ、腫瘍ノ増殖強盛ニシテ、之レヨリ十四、五日迄デノ經過ヲ考察スレバ、終ニハ腦及ビ腎ヲ以テ最モ好適ノ移植地ナリト認メラレ、發育ハ腎ニ於テ稍々優レリ。移植率ハ輕微ナルモ十四、五日マデ、時ニ陽性ヲ示スモノハ肝、脾ニシテ、肺及ビ皮下組織内移植ハ最モ惡シク、既ニ、五、六日ニシテ腫瘍片ハ壞死ニ陥リ、移植地トシテ最モ不適當ナリ。

第三節 參考

紋上鼠肉腫ノ家兎諸臟器内移植ニ於テ、臟器ニ從ヒ腫瘍ノ發育ニ適否有ルヲ知悉シタリ。然ラバ家兎肉腫ヲ白鼠ニ移植シ、及ビ肉腫ト諸種性質ヲ異ニスル癌腫ノ異種族間移植ヲ試ミ、腫瘍種ノ相異ト被移植臟器トノ關係ヲ觀察シ、前記所見ヲ確實ニスル爲メ、參考トシテ實驗第一、一、三ヲ行ヘリ。

實驗第一、家兎肉腫ノ白鼠腦及ビ皮下移植

實驗材料ハ加藤系家兎肉腫、被移植動物ハ白鼠十八頭ヲ選ビ、何レモ左半球大腦髓質内及腰脊部皮下ニ移植ス、移植後八日ヨリ三十三日ニ至ル間、種々ノ經過日數毎ニ屠殺ス。九日乃至二十二日ニ於テ（腦内ハ二十二日目マデ、皮下ハ十四日迄テ陽性、以後ハ何レモ陰性）腦内移植ハ家兎十一頭中五頭ニ、皮下ハ十三頭中二頭ニ陽性ニシテ、組織的ニ皮下ハ十四日、腦ハ十六日迄テ強發育像ヲ示ス。陽性率ハ斯ク腦ニ於テ優レモ、増大度ハ皮下却テ其ク十四日目小豆大ニ達スルモノ有リ。周圍組織内反應性變化ハ鼠肉腫移植ノ場合ト殆ド同様ナリ。

實驗第二、甘口鼠癌ノ家兎諸臟器、筋肉並ニ皮下移植

移植材料ハバシユフォード系甘口鼠癌腫ナリ。二十頭ノ家兎ヲ用ヒ、移植地ハ鼠肉腫ノ場合ニ同ジ。移植後種々ノ時期ニ検査ス。移植成績ハ鼠肉腫ノ場合ニ比シ一般ニ甚ダ不良ナリ。然レドモ腦、腎、筋ニ於テハ、移植後三日經過ニ於テ中等度ノ發育ヲ呈シ、脾、皮下モ二、三日ニテハ腫瘍細胞殘存シ、弱陽性ヲ示スヲ以テ見レバ、移植初期ニハ種々ノ臟器ニ移植片殘存ス可シ。

實驗第三、甘口鼠癌ノ白鼠腦及ビ皮下移植

元來異種族間腫瘍移植ニ陽性ヲ來タス可キ要件ハ幽玄ニシテ、種々ノ解釋試ミラレ、就中白井氏ハ腦ヲ以テ、齋藤氏ハ齒髓ヲ以テ生物學的個性ノ少キ爲メ、腫瘍發育可能ナル可シト説キ、赤松氏ハ移植能率ハ極メテ大體ニ於テ、血清學的ニ近縁動物ホド高シト述ベタリ。余ハ既ニ白鼠、甘口鼠、鳩ノ腦及他ノ臟器ノ血清學的種族特異性ヲ検査シ（東京醫學會雜誌發表ノ豫定）、多クノ臟器、腦、腎、脾、肺ハ哺乳類間ニ於テ類屬反應ヲ示スモ、哺乳類及鳥類ヲ通ジテハ、近親關係ハ腦ニ著シク、腎ニハ微弱ニシテ、肝及筋ハ種族特異性ノミヲ呈シ、且ツ腎ト腦ハ兩類間ニ多少ノ近親關係存スルヲ觀察セリ。而シテ腫瘍移植實驗ノ結果ハ、特異性ヲ缺キ、近親關係最モ濃厚ナル腎及腦ニ良ク陽性成績ヲ來タセリ。余ハ又他方ニ臟器ト腫瘍ノ近親關係ヲ檢シ、甘口鼠癌ハ白鼠ノ腦、肝、脾、筋各免疫血清ニ、家兔肉腫或白鼠癌ハ異種族動物ノ腦或腎ニ類屬反應有ルヲ知得シタリ。是等血清學的事實ハ腦、腎ヲ始メ他ノ臟器ニ於ケル異種族間腫瘍移植ノ成否ヲトスルニ、蓋シ不可缺ノ一要約タル可シ。

第五章 結 論

一、イエンゼン系鼠肉腫ヲ家兔ノ腦、肺、肝、脾、腎、筋肉及皮下ニ移植スル時ハ、移植後三、四日經過マデハ、何レノ臟器ヲ不問、腫瘍片ノ遺殘或多少ノ新生ヲ來タスモ、五、六日以後十四、五日迄ノ検査ニ據レバ、腎及腦内ハ他臟器ニ擧ゲ、移植率高ク且ツ増殖力強ク、殊ニ腎ニ於ケル發育狀態ハ腦ニ比シ遙ニ旺盛ナリ。次ハ筋ニシテ、就中、脾及肝ハ十四、五日迄デ時ニ陽性ヲ示スモ、發育甚ダ劣リ、肺及皮下ハ尙不良ノ培地ナリ。

二、バシユフオード系甘口鼠癌ヲ家兔ノ前記諸臟組織ニ移植シタル所見ハ、發育ハ肉腫ノ場合ニ比シ一層弱キモ、移植ノ最初期ニハ、多クノ臟器ニ移植片ノ殘存ヲ見ルニ、三日ヲ經過スレバ腎、腦、

○三和、惡性腫瘍ノ異種族動物諸臟器、筋肉並ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ就テ

ケルヨリモ却テ優秀ナリ。周圍組織ノ變化ハぐりあ細胞ノ反應性増生ヲ顯ズニ、遊走細胞ニ就テ見レバ、腎ニ於テ浸潤幾分カ強カル可シ。斯ク惡性腫瘍ノ腎内移植ニ好適ナルヲ以テ、更ニ移植累加試驗ヲ企テタルモ、原株腫瘍ノ發育惡シク、凡テノ成績陰性ニ歸シタリ。

肝ハ脾内移植ト共ニ移植率低ク、發育輕度ナルモ、移植後十四、五日マデ稀ニ陽性ヲ示セリ。赤松氏、Taniguchi氏等ノ報告ハ陰性ナリ。肺臓内移植ニ就テハ文獻ニ見ズ。移植不良ノ臟器ナリ。

皮下組織ハ從來最モ屢々移植地トシテ用ヒラレタル所ナリ。鼠肉腫ノ家兎臟器移植ト家兎肉腫ノ白鼠腦及皮下移植(參考實驗第一)ヲ對比スルニ、何レモ腦ハ皮下ニ比シ著明ノ發育ヲ示スモ、家兎肉腫皮下移植ニ於テハ、一週日後尙ホ四例中二例ニ顯著ナル増殖像ヲ呈セリ。又甘口鼠腦ヲ白鼠ニ移植シタル場合(實驗第三)、八日マデ腦ニ強發育、皮下ニ中等度發育ヲ來シ、其成績ハ該腫ヲ家兎ニ移植シタルモノニ(實驗第二)略ボ似タリ。是レニ由リ異種族移植ニ於テ、癌ハ肉腫ニ比シ發育力弱キモ、兩腫共腦ニ移植ヲ能クシ、皮下ニハ家兎肉腫ノ外ハ不良ナリ。

異種族移植ニ際シ皮下ニ移植陽性ヲ得タルモノニ、小喜多、高橋、向山¹⁷⁾、林¹⁸⁾、岡部、長與及和合、吉岡ノ諸氏有リ。反之、皮下移植ヲ不可トナシ或ハ不良ナリトスルモノニ山崎、横川及錦織¹⁹⁾、白井、Friedrich Eischl、細田、赤松ノ諸氏有リ。以上諸家ノ所說歸一セザルモ、實驗ノ立脚地ヲ異ニスル見解ノ差ニシテ、臟器及皮下移植ノ研究例ヲ多數照考セバ、皮下ハ臟器ニ比シ移植不良ナリト看做ス可ク、余ノ種々ノ實驗成績モ同様ナリ。而シテイエンゼン系鼠肉腫ト異ナリ、家兎肉腫ハ皮下ニ於テ二週日後尙強度ノ増殖ヲ見ル故、肉腫ノ種類ニ從ヒ、皮下ト雖モ、一定ノ培地タリ得可シ。

周圍組織ニ於ケル血管新生、結締組織増殖、遊走細胞浸潤等ノ意義ニ就キ、近來移植腫瘍發育ノ成否ヲ左右ス可キ證據ヲ有セズト爲ス學者多シ。余ノ場合亦周圍組織ノ變化ハ、腫瘍發育ノ如何ト必ズシモ相關聯セズ、陰性ナル場合ニモ該變化ノ度微弱ナル例多シ。

附圖第六表

TAFEL VI.

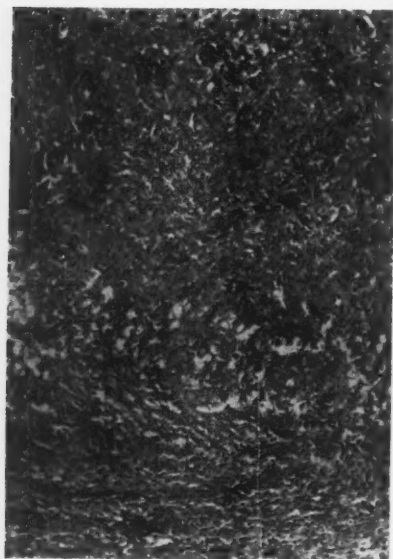


Fig. 1

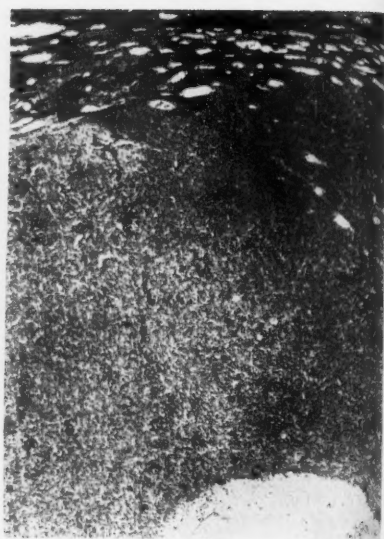


Fig. 2

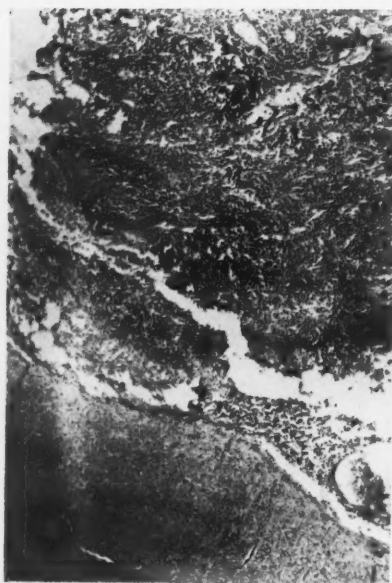


Fig. 3



Fig. 4

三 和・異種炭移植

Miwa, Heteroplastische Transplantation

筋ニノミ腫瘍ノ新生ヲ示ス。是レニ由リテ觀ルニ肉腫及癌腫ハ異種族間移植ニ當リ、陽性ヲ來ス可キ臟器種ハ略ボ相似タリ。

三、同種族間移植(フレキシナー系鼠癌)及異種族間移植(イエンゼン系鼠肉腫、パシユフオード系甘口鼠癌、加藤系家兎肉腫)ノ實驗ニヨレバ、從來慣用移植地タル皮下ハ、何レノ場合ニテモ陽性率及増殖度ハ他ノ多クノ臟器内移植ニ比シ弱度ナリ。但シ家兎肉腫ノ白鼠皮下ニ於テハ、十四日目ニ尙ホ著明ナル發育ヲ呈セリ、故ニ腫瘍ノ種類ニ從ヒ必ズシモ不良トノミ目ス可ラズ。

四、各種實驗ニ於テ、一般ニ移植陽性例ハ陰性例ニ比シ、周圍組織ニ於ケル反應性變化(遊走細胞浸潤、結締組織増殖、血管新生等)ハ弱キモ、屢々例外有リテ陰性ノ場合ニモ甚ダ輕微ナルモノ多シ。

五、斯ク異種族間腫瘍移植ニ際シ、腎及腦ニ最モ良ク發育ヲ示ス所以ニ就テ、移植陽性ヲ齎ラス可キ要件中、臟器ノ種族特性ノ缺乏、腫瘍ト臟器間ノ近親關係ヲ以テ、腫瘍移植達成ノ因ヲ釋明ス可ク重要ナル意義ヲ有スルモノト謂フ可シ。

御駕ナル御指導ヲ賜ハリ御校閲ヲ蒙フシタル恩師緒方教授並ニ本實驗中不斷ノ御高教ヲ賜ハリタル恩師三田教授ニ對シ謹ミテ感謝ノ意ヲ表ス。

主要文獻

- 1) 白井, 癌, 第18年, 第1冊, 2) 山崎, 癌, 第18年, 第2冊, 3) 高橋, 日本病理學會々誌, 第13年, 4) Lanz, Zitiert von Friedrich Fischl, 5) Friedrich Fischl, Zeitschrift für Krebsforschung XVIII. Bd. 1922, 6) 廣藤, 日本病理學會々誌, 第15年, 7) 細田, 日本病理學會々誌, 第16年, 8) 赤松, 日本敎生物學會雜誌, 第19卷, 6號, (785頁), 9) 大島, 醫術, 日本病理學會々誌, 第16年, 10) 清野, 木安, 日本病理學會々誌, 第7卷, 11) 山崎, 慶應醫學, 第2卷, 大正11年, 12)

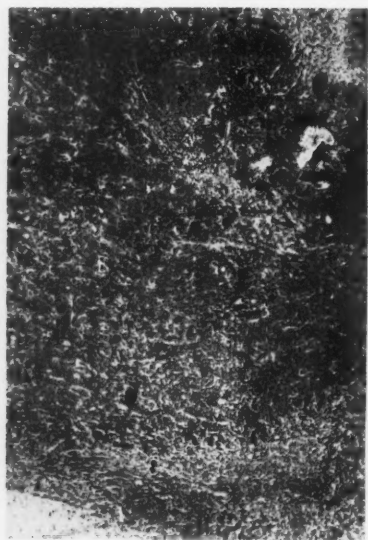


Fig. 8



Fig. 9



Fig. 10



Fig. 11

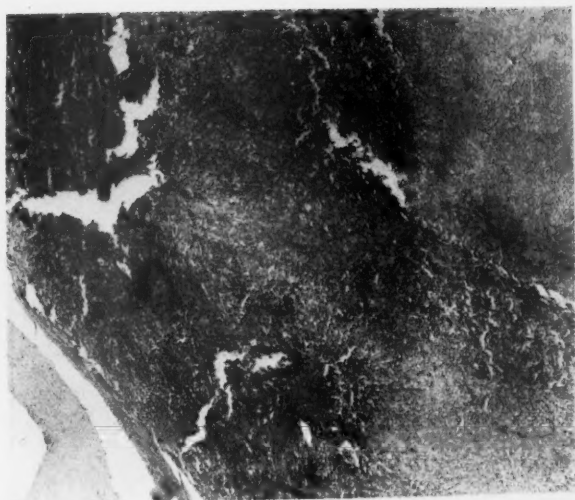


Fig. 5



Fig. 6



Fig. 7

同部、日本病理學會々誌、第13年、13) 小萱多、日本病理學會々誌、第14年、14) 横川、綿藏、臺灣醫學會雜誌、262號、15) 長興、和合、癌、第15年、第3冊、16) 吉岡、慶應醫學、第5卷、第4號、17) 向山、日本病理學會々誌、第9年、18) 林、日本病理學會々誌、第4年、19) 赤松、日本微生物學會雜誌、第19卷、(808頁)。

附圖說明

- 第一圖、イエゼン系鼠肉腫ノ家兎腎移植。移植後十五日經過、家兎第一八一、強擴大、強陽性
- 第二圖、同上。七日經過、家兎第一七五、弱擴大、強陽性、(右下、壞死電)
- 第三圖、同腫ノ家兎腦內移植。十四日經過、家兎第一四八、弱擴大、中等度陽性
- 第四圖、同上。七日經過、家兎第一五六、弱擴大、強陽性、(浸潤性増殖)
- 第五圖、同腫ノ家兎脾內移植。七日經過、家兎第一七五、弱擴大、強陽性、(左下、壞死電)
- 第六圖、同腫ノ家兎筋肉內移植。七日經過、家兎第一七五、弱擴大、強陽性
- 第七圖、同腫ノ家兎肝內移植。五日經過、家兎第一六三、弱擴大、強陽性、(二、三ヶ所ニ壞死肝細胞群有リ)
- 第八圖、加藤系家兎肉腫ノ白鼠腦內移植。十六日經過、弱擴大、強陽性
- 第九圖、同腫ノ白鼠皮下移植。十四日經過、弱擴大、強陽性
- 第十圖、バシユフォード系二十日鼠癌ノ家兎腦內移植。三日經過、家兎第二三〇、弱擴大、中等度陽性、(浸潤性)
- 第十一圖、同腫ノ家兎腎內移植。三日經過、家兎第二三六、弱擴大、中等度陽性、中心部壞死、周圍新生著明



誌出版委員八名、財政委員六名、法律顧問 (Counselors) 二名及會計検査員 (Auditors) 三名アリ、夫レ夫レソノ事業ヲ分擔シテ居ル、ソノ組織ガ大仕掛デアルト同時ニソノ事業モ亦大規模デアル、從ツテソノ經費モ莫大デアル。所々ノ癌病院、癌治療所及ビ癌研究所ニ補助ヲ與ヘルト同時ニ個人ノ癌研究者ニ莫大ノ補助ヲシテ居ル。本年度ノ補助額ハ四十三萬圓ニ上リソノ他癌病院、癌治療所ヲ所々ニ設立シ又月刊ノ Cancer Review ト云フ雜誌ヲ出版シ國內ノ癌ニ關スル研究業績ヲ紹介スルト同時ニ海外ノ業績ヲ紹介シ又ソノ研究ノ近況ヲ報告スル。又特記スベキハ諸外國ノ近況視察ノ爲メ適當ノモノヲ隨時出張セシムル準備アル事デアル。以上ノ經費ヲ合算スルト莫大ノ金額デアル、コノ金額ハスベテ寄附ニヨルモノデアル、コレニ對シテ特ニ宣傳委員ガ活動スル結果トハ云ヘ、富豪ノ多イ英國デハ比較的容易ニ巨額ノ寄附ヲ得ラレル事ハ羨マシイ、然シ一萬圓以上十萬圓ヲ寄附セルモノ四十一、五千圓以上一萬圓以下ノモノ十五、五千圓以下一千圓ノモノハ百六十二ニスギズシテ千圓以下五十圓前後ノモノハ遙カニ多數デ對癌協會ヲ理解スルモノハ富貴ヨリモ中流ニ多イ事ハ注意ニ價ヒシ羨マシク思フ、更ニ五千圓以上ノ寄附者ノ内ニ各地ノ或ハ對癌協會或ハ團體或ハ更ラニ地方廳ガ寄附シテ居ル事ハ更ラニ羨望ニ堪エナイ、猶ホ國王陛下千圓、女皇陛下五百圓、皇太子殿下千圓ノ御下賜ガアリ、上下ヨク對癌協會ヲ理解シテソノ事業ノ完成即チ癌征服ヲ祈リ、以テ人類ニ福祉ヲ招來スル様大イニ後援シテ行クサマハ羨望ニ堪エヌ。勿論我が國ハ常ニ國事多端デアリ文明戰爭場裏ニ立チ遅レ、ソノ施設ノ急ナルモノアリテ、英國ノソレノ如ク未ダ癌ノ問題ヲ充分理解シテ之レニ及ブ餘裕ガナカツタトハ云ヘ、今ヤ既デニ其機運ニ遭會シ、恐ルベキ癌ノ對策研究ニ對シテ一大革命ヲ要スベキ時ナリト信ズ。

◎國際癌會議概況◎

◎第一日——七月十六日——國王陛下ニ拜謁—バツキングアム宮殿。

海外ヨリノ代表參列者一同ヲ引見、國王陛下ニハ拜謁ヲ賜ハリ午前十時半本會議副總裁ジョン・ブランド・サットン氏ヨリ

雜 纂

大戦後 第三回 國際癌會議概況 (一九二八年七月於ロンドン)

獸醫學博士 市川 厚 一

英國對癌協會 (British Empire Cancer Campaign) 主催デ本年七月十六日から同二十二日迄大戦後第三回ノ國際癌大會
ガロンドン市ニ開催サレタ。我が國ニ對シテハ東大醫學部長及ビ小生宛ノ二通ノ招待狀ガ外務省ノ手ヲヘテ文部省ニ廻
送セラレタ。ソノ結果トシテ長與教授ト私トガ本邦代表トシテ列席スル事ニナツタ、私トシテモ當癌研究會、文部省及ビ
大學カラ補助ヲ得マシテ之レニ列席致シマシタ。ソノ際本多會頭、山極先生ノ一方ナラヌ御配慮ヲ得マシタ事ヲ感謝致
シマス。ロンドンニ參リ長與教授ト本大會ニ列席スルヲ得マシタノハ誠ニ光榮身ニアマル次第デアリマシタ、出席シ
テ見マスト、獨逸、米國及ビ佛國カラ八十數名ノ多數ノ代表ガ參列シ、白國ナドモ五人デ、本邦カラノ二人ハ少シ物足
リヌ位ニ思ハレタ。

◎英國ノ對癌協會ハ國王陛下ヲソノ「バトロ」(庇護者)トシ、ソノ第二皇子ノヨーク公ヲ總裁トシテ居リ副總裁格
ニロード・ドーソン (Lord Dawson) 及ビジョン・ブランド・サットン (John Brand-Sutton) 氏アリ、ソノ下ニ評議員ガ六十五
名アリ。以上ヲ以テ最高機關トシテ居ル。即チ之レデ Grand Council (評議員會) ヲ組織シテ居ル。ソノ實行の方面ニ對シテ
ハ更ラニ實行委員 (Executive Committee) 十五名ト之ニ附屬シテ宣傳委員 (Appeal Committee) 七名アリ、學術顧問 (Scientific
Advisory Committee) 十名、通信委員 (Intelligence Committee) 八名アリ、放射療法委員十名、豫備調査委員七名、機關雜

◎第一部 癌腫ノ原因ニ關スル部、デロッド・ドーンソン (Lord Dawson) 氏座長トナリ、紐育ノジェームス・ユウ・イングス氏ノ一般の總括的講演ニ初マリ、ロンドンノリーチ教授、伯林ノブルメンタール教授、ストラスブルグノボレル教授、和ノグロニンゲンノディールマン教授、紐育ノマルフィー氏以下四名ノ報告アリ。巴里ノルーシー、シカゴノスライ氏ハ缺席、然シソノ印刷物ハ配布ヲ受ケタリ、時既デニ時ニシテ討論ハ特記スベキモノナシ、コレ小生等十九名ヨリナルレーベンヘヨツク會ナルモノニテ原因ニ關スル報告ノ追加討論ヲ行フ事ノ内示ヲ受ケタル結果ニモヨル(概要後述)。

◎第二部 外科的療法ト放射療法トノ比較ハ、ジョン・ブランド・サットン氏座長ノ下ニ開催セラレタリ。余ハ長與教授ト共ニ主トシテ原因ノ部ニ列席シタ結果ソノ詳細ハ報告書ニヨツテ知ツタガ中々ノ盛會デ、巴里ノルゴー教授ガ子宮頸部癌ノ一般的ノ報告ヲナシ之レニツイデ報告八アリ、又直腸癌ニツイテハチャールス・ゴルトン・ワットソン氏、巴里ノハルトマン教授以下報告四アリ(概要後述)以上ヲ以テ午前ノ報告ヲ終レリ。

◎午後ハ二時半ヨリミッドルセックス癌病院及ビラヂーヴ研究所視察ニ案内セララル、日程ナリ。長與教授ハ前者ノ一行ノ人トナラル。供覽ノぶろぐらむニハ其ノ供覽種目多クソノ病理學的及生化學的研究ノ供覽及外科手術ノ供覽等アリ又ラヂーヴ研究所ニテモソノ使用ニ關シテ其ノ方法及ビソノ成績等中々有益ナルモノ尠カラズトハ云ヘ余ハレーベンヘヨツク會ニ列席スル事トナリソノ視察不可能ナリシハ遺憾ナリト雖モ前回見學シ又巴里ノ諸病院研究所ヲ見タ事モアレバ斷念シ癌ノ原因ニ關シテハ小生ノ神經ノ問題ノ報告及ビ討論ニ參加シタク Cancer Hospital に向ヘリ。

◎レーベンヘヨツク會ハ大正十一年(一九二二年)アムステルダムニ於テ故フイービゲル教授ヲ中心トシテこゝるたる癌ノ特別研究會トシテ生レ當時兎角獨逸ヲ除外スル傾向アリシニ關セズ英、佛、獨、白、和、澳ノ研究者ヲ包含シ我が恩師山極教授招待セラレシモ都合上缺席セラレ當時僅カ十數名ニ過ギナカツタトハ云ヘ極メテ國際的ニシテ然モ極メテ親善、且極メテ意義アリ、爾來癌ノ原因ニ關スル研究中樞デアツタ感ガアル。Cancer Hospital ノ一室ニ一同會スル

本會議ニ參列セルモノハ世界ノ各地ノ斯界ノ權威者デ百二十名國別ニシテ十八ヶ國及ビ六英國領ノモノデアル、ソノ中ニテモイチカハ氏(ハト自分ノ名ヲ耳ニスレドモ充分ニ了解シ兼テタルニタリニテ初メテ)ハ日本ハ札幌大學教授デ初メテたるデ鬼ニ癌ヲ作ツタモノデ更ラニ幾多ノ研究ヲシツ、アル事又ドウアンヌ氏ハハーバート大學教授デれんじけん及ビらぢのゝむノ權威者デアリ又ハーランド氏ハベルゲンヨリ列席シ氏ハまうす癌ノ權威者デアル。又參列者中ローダ・エルドマン氏ハ唯一ノ婦人代表デ癌ノ組織培養、又らつてやまうすノ實驗癌ノ權威者デアル事ヲ申シ上デ更ラニ當英國國癌協會デハ最善ノ準備ヲ整ヘソノ施設ソノ原因及ビ治療ニ關スル研究ノ現況ヲ供覽スル事トナツタ事ナド申上ダレバ、國王陛下ニハイト御満足ニ次ノ如キ有難キ御言葉ヲ賜ハル、
「適々當會議ニ世界ノ各地カラ斯ク多數ノ權威者ノ參列セラレタル事ヲ厚ク感謝スル、又我協會ノ大ナル努力ヲ以テ本會議ガ當地ニ斯ク盛大ニ開カレル様ニナツタ事ヲ感謝スルト同時ニ余ハ非常ニ欣快ニタヘヌ、ソノ恐ルベキ人類ノ敵デアル癌ニ對シテハ有力ナ對癌機關ガ必要デアル又相互ノ協力ガ必要デアル。諸君ガ癌ノ治療及原因ヲ研究サル、事ニ非常ノ興味ヲ持ツテ居ル。疑ヒモナクソノ原因ヲ探究シ得レバ治療又豫防上唯一ノ確實ナル方法デアル。ソノ原因ガ未ダニ明瞭ニナラズトモ一面ニ於テ諸君ガソノ實際の方面ノ種々ナル研究ヲサレテ居ル事ヲ満足ニ思フ、無數ノ癌ノ爲メニ惱メル人ガアル事故本會議ニ於ケル諸君ノ報告及ビ討論ガ癌ノ診斷治療ノ上ニ一大進歩ヲ招來シ得ル事ト思フ。然ル時ハ本會議モ意義アリ又人類ノ福音デアルト思フ」ト宣リ給ヒ一同ニ握手ヲ賜リ、玆ニ本會議ガカクモ莊嚴ニ宣セラレタノデアル。

午後九時半ニハ總裁ジョン・ブランド・サットン氏夫妻カラ一同招待歡迎サル。今回ハ長與教授ノ參加ニヨツテ又多數ノ知人アル事トテ甚ダ力強ク又愉快ナル第一日ヲ過シタ。

◎第二日○七月十七日、午前九時四十分 Royal Society of Medicine ニテ先ヅ副總裁ジョン・ブランド・サットン氏ノ會議開催ノ挨拶ニツイテ癌腫ノ原因及ビ癌ニ對スル外科的療法ト放射療法トノ比較ノ二部ニ分レ、前者ハ

デモ壞死ノ多イモノデハ癌ノ惡液質ノ様ナ症狀ヲ起ス事ガアル、コレハ今後ノ研究ヲ要スル點デアル、胃ノ幽門癌ノ胃腸吻合後ニ非常ニ惡液質ガ減退スルコトガアルガコレハソノ手術ノ結果癌ノ發育ガ一時的ニ抑壓サレル結果ニスギヌ、コノ惡液質ニ陷ツタ患者ハ多クハ手術不可能デアルガ吾人ノ天職トシテ何ントカシテ壽命ヲ長クスル事ヲツトメチバナラヌ。ソレニハ細菌ノ感染ノアルモノハコレヲ除キソノ他ノ症狀ニ對シテ對症的二治療シ更ラニ新鮮ナ空氣、補血、強壯劑又ハ疼痛アルモノハ鎮痛劑ヲ與ヘ又悲觀セシメナイヤウニシテヤル事ノ講究中々重要デアルト述ベテ居ル。

肺原發癌ニ關スルモノヲ概括スレバ一九二〇年後殊ニ一九二三年以後ニ肺原發癌ガ増加シテ來タ之レニ就イテハいんふるえんざノ大流行後ト云フ事ヲ考ヘルモノモアルガ又ソレハ煤煙又路上ノ塵埃ヲ吸入シタ結果ソノ刺戟デ出來ルト考ヘルモノモアル、ソノ後者ニ於テハ統計上肺原發癌ハ屋外ニ活動スルモノ殊ニ男ニ多キ事ヲ主張シテ居ル、然シ尙反對モアツテ何レトモ決定シ兼テルガ最近肺原發癌ノ歐洲ニ増加シタ事ハ特ニ注意スベキ事デアル。

◎第三部 放射線ニ關スルモノデ「ら、い、む、び、X光線ノ生物學的的作用殊ニソノ波長ノ強サ、放射期間ニ就テト題シルス(Ross)教授座長ノ下ニ佛ノルゴー(Kegani)教授ノ講演ニツイデ九名ノ報告アリ。何レモ既デニ報告サレタ事デアルカラ略ス事ニスル。次イデ前日ノ子宮癌ト直腸癌ノ報告ガ繼續サレタ、從ツテ第一日ノ子宮癌ト直腸癌ニ對スル外科療法ト放射療法ノ比較ノ事ヲ一括シテ報告スル。

子宮癌ニ就テハ佛ノルゴー教授ガ普テ局所解剖學上「ら、い、む」療法ニ適スト云ヘル様ニ此種ノ治療成績ノ報告ガ相當ニアリ又子宮ヲ摘出スルノデナイノデ患者ガ初期ノ内ニ治療ヲ乞フモノ多ク、成績モ見ルベキモノガアル、從ツテ子宮癌ニハ「ら、い、む」療法ガ價值アルモノ、様ニ主張スルモノガ多イ、唯ソノ進ンダモノデハ外科手術ニ俟ツベシト云フニ一致シテイル、手術ハ主トシテウエルトハイム(Wertheim)法コレニハ死亡率ガ一七%前後アルガ「ら、い、む」療法ニハコレガ殆ンド零デアルノガ強味デアル。又癌細胞ガ重金屬「ろ、い、ざ」ト特別ノ親和力ガアルノデ放射療法實施前ニ局所ニ

ヤ故フイービゲル氏ノ遠逝ヲ惜ミ、次デ相互ノ健康再會ヲ祝シソノ開會ノ幕ヲ切ツタ。本會ニ會頭ハ置カヌ事、然シ幹事トシテハ和ノディールマン氏ヲ選舉シ坐長ニハ年長ト云フ事デ和ノロツガンズ教授ヲオシ先ヅボレル教授ノ微生物說ニ初マリウィーンノリプシュツツ(Lipschütz)氏ノ惡性腫瘍細胞内特殊顆粒ニツイテ報告アリ、討論ニ移リ、ソノ特殊顆粒トボレル氏ノ特殊小體トノ異同ニツイテ論難アリ、然シ熱心ナルボレル教授ニ一同萬隆ノ敬意ヲハラヘドモソノ說ニツイテ省ミルモノナシ、コノ二報告ニテ二時間餘ヲ費ヤシタレバ茶ノ饗應ヲ受ケ談笑ノ内ニ解散セルハ午後六時ニ近シ、

本會ハ報告討論ノアル限り連日二時半ヨリ開會スル事トナツタ。

◎第三日——七月十八日午前九時三十分ヨリ四部ニ分レテ開催サレタ即チ

◎第一部ハ外科ハ部會デサアー・チャーレス・ゴールドン・ワットソン(Sir Charles Gordon-Watson)氏座長トナリ、骨肉腫ノ分類及ビ療法ニ關スルモノデアル。エーウイング教授(Ewing)ノ報告ニ初マリ八名ノ報告アツタガ早期ニ診斷シテ

切除ヲ斷行スベシ、然ラズンバ豫後不良ニシテ今後ノ研究ヲ要ストノ事ニ過ギヌ。

◎第二部ハ癌一般及ビ診斷ハ部會デサアー・ウィリアム・ウィルコックス(Sir William Wilcox)氏座長トナリサアー・トーマス・ホールダー(Sir Thomas Horder)氏ノ癌ノ惡液質ニ關スル報告ニツイデ、肺原發癌ノ増加ニツイテロバート・ハ

ツチンソン(Robert Hutchinson)氏以下數名ノ報告ガアツタ。

惡液質ニ對シテハ管テハ癌ハ全身ノ疾患テアルガツレガアル限局シタ所ニ現ハレルモノト考ヘタガ今日デハ癌ハ限局シタモノデハアルガ全身ノ發生シタ臟器ニヨツテ種々ナ影響ヲ與ヘルモノデ惡液質ハ即チソノ結果デアルト考ヘラレル、コレハ癌細胞ノ爲メニ起ル特異ノモノトハ考ヘナイ、癌ノ組織ノ壞死、局所ノ化膿菌ノ感染、癌細胞ノ浸潤増殖ニヨル局所組織乃至臟器ノ機能減退等ノ要約ノ參加ニヨツテ起ルヨウニ見エル、特殊ナ癌ノ病原微生物デモアリコレガ起ルトモ云ヒタイガマダソノ病原體ノ確實ナ發見ガナイシ各例ニツイテ見テモ何ニモ特異性ガナイ、良性腫瘍

ノ醫局員ノ努力ノ程ガ窺ハレル。後者ニモ相當ノ準備ガアルガ前者ガ本日見學ノ價值アルモノデアラウ。長與先生ハコレガ視察ヲサレタガ本日モ小生ハレーベンヘヨック會ニ列席スル事故ソノ見學ハ不可能デアツタ。

◎レーベンヘヨック會(續) 全員、癌病院リーチ(Litch)教授方ニ參集シタ。先ヅトイッチレンデル(Teuchlander)氏ノ疥癬蟲ニヨル鶏ノ肢ノ癌ノ報告アリ次イデリーチ(Litch)氏ノ報告シタ材料ノ供覽即チ健康ノ鶏ノ脾臟ノ一片ヲ家鶏肉腫ノ濾過液ヲくろゝほるビデジアイバーナーナード(Ve-Hannard)ノヤウニ處置シタモノニ加ヘテ同一ノ家鶏肉腫ヲツクツタト云フ供覽デアアル。コレニハ中々議論ガアツタガリーチ氏ハ要スルニジアイバーナーナードニ反對セン爲メノ仕事デアアル。米ノマルフィー(Murphy)氏ノ成績ヲ裏書スルモノデアルトマルフィー氏ヲ大イニ推稱シテ居ルガトイフチレンデルハ何ニ前ニハ肉腫ノアツタ鶏ノ脾ダト云ツタ事ガアルノダカラト耳打チスル何分一度シカ出來ナイ、クリカヘシテヤツテモダメ然カモ僅カ七羽キリノ實驗デ一羽ダケデハト茶々ヲ入レルモノモアル、マルフィー氏ハ自分ノ事迄批評サレルト思ツタカ又自分ノ報告ノ大要ヲクリカヘス、小生沈黙シテ材料ヲ見テ居ツタ。次ニ白國ノメーザン(Maisin)氏ガ家鶏肉腫ト共ニまうすノ癌ノ組織ヲ移植シテソレカラノ組織ガ共ニ移植サレタ事ヲ報告シタ、時ニ四時暫時休憩茶ヲノミ、談タマタマ會員ハイツマデモ十九名カトノ事ニ會員ヲ更ニソノ範圍ヲ廣クスル説トナルベクフヤサズ時期ニ應ジテ招待シテハトノ説ニ却々花ガ咲キ結局投票トナリ前説ガ容レラレタワケ、處ガソノ推薦方法ニ至ツテ又中々纏ラズ漸ク全會員ノ三分ノ二ノ賛成ニヨル、然モソノ賛否ハ手紙ヲ廻覽シテ決定スル事ニナリ、ナルベク早く申シ出ル事ヲ約束シタ。偕本邦カラハ何人推薦スベキヤソノ人ニツイテモ自分ヲ困ツタ恩師及ビ我々ノ先達ヲ三名申出シテ置イタ。

◎英國對協協會總裁ヨーク公夫妻ガ我々ヲ午後八時十五分ロンドン博物館デ歡迎サレル事デアアル先ヅ一同ニ拜謁ヲ賜ハリ次イデ博物館ニアル古代アングロサクソンノ生活トソノ用具等ヲ見物シツ、立食ノ餐應ニアヅカル何ニセヨ酒ガ呑メヌ小生ニハ難有味ハアマリナイ、キークツガナリヨリクルシイ、長與教授ヲサガセド見失ヒルーシー教授ト歸ル、

注射シテオクトソノ金屬ノ微分子カラ二次的放射線ヲ利用シテ一層有效ニシ得ル鉛療法ヲ併用シタ試驗モソノ一例デアル、又子宮癌ノ進行シタモノデモソノ腹腔カラ子宮周圍ニらぢゅーむ針ヲ用ヒル事等今後尙ホ改良スベキ點尠クナイガ遠カラズ子宮癌ニハらぢゅーむ萬能ノ時ガ來、手術ガ見捨テラレルニ至ルダラウト、らぢゅーむ專門家ノ主張デアル。

直腸癌デハ放射療法ヨリモ外科手術ノ價值ガ大イニ論議サレタ外科ノ方面ニハ佛ノハルトマン教授(Hartmann)ガ二百餘例ノ成績ニツイテ外科的摘出術ヲ直腸癌ニハ最良ノ法ナル事ヲ述ベ次イデ同様ノ成績ヲ主張スルモノ多ク放射療法ノ方ハ旗色甚ダ振ハズ、ソノ技術ノ改良ニヨリトカ又ハ手術前後ニ併用スレバトノ弱音デ今日ノ處直腸癌ニハ手術ニ軍配ハ揚ゲザルヲ得ナイヨウデアル。

◎第四部、「職業癌ニ就テ」ノ部會デラザルス・パロー(Lazarus Barrow)氏座長トナリ、多數ノ報告アリ。就中英國ヨリノモノ大多數デ次イデ獨和、瑞ヨリノ報告アリ、ソノ職業癌ハ主トシテ皮膚ノ癌デ之レニツグモノハあにりん色素工場ニ見ル膀胱癌デアル、何レモ十年以上モソノ職ヲ繼續シテ居ルモノデ多クハ三十年カラ五十年モ同一職業ヲヤツテ居ツタモノガ癌ニナルノデアル又こゝるだゝるヤ瓦斯會社ノ職工ハ手ガヤラレル即チ主トシテ刺戟物ノ作用スル所ガヤラレル、職業ハびぢやたゝるニ關スル職業トばらふじん製造業及ビ紡績職工ノヨウナ礦物油デ汚染スルモノ、三種ガ主ナルモノデソノ他砒素鑛山シユチーベルク(Schneeberg)ノ鑛夫ガソノ吸入デ肺原發癌ガ出來ルトノ報告及ビX光線製造職工及ビソノ使用醫ニ見ラレルトノ報告アリ。又比較的最近ノ問題トナツタノハぶりけつ製造ノ職工ニ見ル癌デコレハ石炭ヲ粉末ニシタモノニ熱ヲ加ヘテカタメルノデアルガソノ粉末ノ内デ働クモノニ多イトノ事デアル、英、獨カラノ報告デアル。然シ炭鑛夫ガ英國デサヘ癌ニナル事極メテ稀デアルヲ見ルト不思議ニモ思ハレル。

◎午後ハ聖バーサロミュー病院及ビ聖マルクス病院ノ見學ガ豫定サレテアル、らぢゅーむやれんぎげんデ治療スル所又ソノ成績ヲ供覽及ビ病理組織標本ノ供覽ガアル、組織培養ノ活動寫眞之ニ對スルらぢゅーむノ作用ノ供覽ガアリ、ソ

又ハラぢ^①ーむヲ適用スレバ更ラニ良成績ナリト云フモノガ多イ。殊ニ局所ハ淋巴組織ノ關係デ早期ニ癌組織ガ侵入シ易イカララぢ^①ーむ管ヲ適用スベシト又再發豫防ニハびすみ^②ミヲ注射シテ後光線ヲ放射スルトヨイウデアル等、後療法トシテハ放射療法ヲ推奨シテ居ル、放射療法ダケデト云フ事ニハ不安デアル。放射療法ハ手術不可能ノ例ニ適用スル事ニ適當ノモノデアルト云フ大勢デアツタ。

口腔癌^③ニ對シテハ手術ニ對シテ放射療法ヲ以テ手術ニ優ルト主張スルモノガ多イ、然シ大勢ハ手術ト放射療法ト適宜併用ヲ以テ最適ノモノト認メタヤウデアル。

即チ口腔ノ部位ニヨツテハ手術困難ノ部位デモラぢ^①ーむノ效果大デアルカラコレデ治療スル、然シ癌ガ轉位シテ居ル淋巴腺ニハラぢ^①ーむデハ無效、コレハ摘出シ其轉移シヤスキ頸部ニX光線又ハラぢ^①ーむヲ適用スル、放射療法ノ注意トシテハ金齒等ハソノ際除去シ勿論齶齒ノ所分ヲ斷行スル事又ラぢ^①ーむ管ハ白金ノモノデソレデ光線ヲ遮過シ更ニがんま^④ー(マ)線ヲ用フル時ニ效果大デ然モ健全ナ周圍組織ヲ侵ス事少イ特點ガアル。何レノ場合デモラぢ^①ーむ含量一密瓦乃至五密瓦迄位ノモノヲ作り適宜使用スルガ便利デ又少量ヲ長時間(一・〇〇〇乃至三・〇〇〇密瓦時間)作用サスト效果ガ確實デアル、勿論個體及ビソノ發生スル部位並ビニソノ發育狀態ニヨツテソノ用法ヲ注意スベキデアル。何レノ場合デモ早期手術ノ必要ヲ述ベテ居ル。次ニ癌ノ治療成績及ビソノ統計作成ニ關スル注意的報告ガ二ツアツタ。

◎第二部 癌ノ治療法、殊ニ鉛療法ニ就テ

サアー・トーマス・ホールダー(Sir Thomas Holder)氏坐長ノ下ニソノ創意者ナルブレール・ヰル(Bleir Hill)教授ノ報告ニ初マリ數氏ノ報告ガアツタ。フランクフウルトアムマインノカスバリ(Caspari)教授ハ既ニコノ方面ノ先達ヲ以テ知ラレテ居ルガ氏ノ報告ハ就中注意スベキモノデ、ベル氏ノ行ツタ様ナ事ハ既デ二十五年前ニ報告セル事ヲ述ベソノベル氏ノ所說ニ賛意ヲ表スルガ鉛ノミガヨイト云フノデハナイ重金屬又ハソノ化合物ガ腫瘍細胞ニ有毒性ニ作用シソノ壞

○市川・國際癌會議概況

四二二

歸途リーチ氏、マルフィー氏等ノ報告ニ對スル小生ノ意見ハトノ事ニ甚ダ不滿、明日一ツ討論スル考ヘテノベタ。氏モ大賛成且ツハ久シ振リノ會合ニ知ラズ宿ノソバマデ徒歩デ來テシマツタ。

◎國際癌研究會設立準備委員會 七月十九日(午前)。

當第三日ノ午前十時頃カラ、會場ナルローヤル・ソサイティ・オブ・メデイシンノ一室デ國際癌研究會設立相談會が開カレタ。英ノリーチ氏ガ世話役トナリ坐長トナリ、各國カラ二三名ヅ、ノモノガ集會シタ。コレガソノ準備委員トナル事ニナツタ。委員ハ我國カラハ長與教授ト小生デ、佛カラハルミー教授トボレル教授、白カラハメーザン教授トデュスタン教授、獨カラハブルメンター教授トイッチレンデル教授、和カラハドゥ・フリース教授トデイルマン教授、伊カラハフィケーラ教授、ハスチネツリ教授トベンチマリ教授、北米カラハマルフィー氏ト英ノリーチ氏デ計十五名デアツタ。會議ヲ組織スル事ニハ滿場一致デアツタ。我が長與教授ハ我が國モ非常ニ賛成デ我が癌研究會トシテ參加スルト述べラレタ。次イデ次期開會ニツイテハ三年毎或ハ四年毎ノ説多ク毎年ト云フモノガアツタガ最後ニ三年毎ニ開會スル事ニナツタ。其他種々ナ意見ガ出タガ兎ニ角我々ハ假リノ準備委員ニ過ギヌ、從ツテ茲ニ云々スル資格ガナイト云フ事ニナリ。各國ノ代表委員ヲ決定スル事が先決ナリトテ討議ガ繼續サレ、各國ノ代表者數ノ問題トナリ結局一乃至四名トナリ本年末迄ニ報告スル事ニ決議シタ、次ノ開會地モ問題トナツタガソレラハ正代表委員ニ一任スル事ニシテソノ正代表委會ノ開カレル迄ハ英ノリーチ氏ソノ中心トナツテ産業役ヲシテクレル事ニナツタ。

◎第四日 七月十九日、午前九時半開會。

◎第一部 癌ノ治療法トシテ放射線療法、外科手術トノ比較デ第一日ノ繼續デアルロックハルト・マンメリー(Lockhart Mummery)氏坐長トナリ、乳癌ニ關スル報告ニ初マリ口腔癌及ビ治療成績ニ關スル評價ノ報告併セテ十名ニ達シタ。

乳癌ニ對シテハ手術可能ノモノニハ手術ハ放射療法ニ優ル。コレニハ殆ンド異議ハナイガ手術前又ハ後ニれんきけん

ナル癌發生物質トソノ癌、れんごけん深達裝置及ビ手術供覽ガアルガ私共ノ毎會合スル所デアリ又前回ニモ見學シタ所デアルカラ兎ニ角トシテ、サン・ウエストミンスター病院又ハリストア研究所ノ見學ハト思ヒタレドモ本日モレーベンヘヨック會ニ小生自身ノ報告スベキ日、休ムワケニ行カヌ。

⑥レーベンヘヨック會ハ本日ハマレー氏ノ癌研究所ニ開カル、會合シタノハ數名ニ過ギズ、何ニカノ行キ違ヒガアツタノデアラウ。

マレー氏ハれもないミ等ヲ準備シテ歡迎シテクレタ。一同圓卓ヲトリマイテ著席、トイッチンレンデル氏ノ魚ノめらのーむノ遺傳ニ關スル實驗ノ報告ガアツタ、目高ニ似タ一種ノ小魚ヲ交配シタ。ソノ次ノ代カラめらのーむガボツボツ出來コレガ第三代目ニハ相當ノ數ニ達シタ成績デ中々興味アルモノデアツタ、氏ハ盛ンニ氏ノ所說ノ原因論ヲ振り廻シ、氏ノ所謂 *Endomathignatus* ヲ高唱ス、コレヲ遺傳ト考ヘルト述ブ、小生芦毛馬ノめらのーむノ例ヲトツテめらのーむノ遺傳ニ非ズシテソノ交配ニヨリテめらにん色素ノ新陳代謝ノ異常ノ特性ノ遺傳ニ他ナラズト追求スレバ遺傳ハ言ヒ過ギデアルガ兎ニ角えんごまりぐにたーつす即チ此際ソノめらにん物質ノ作用ニヨルト訂正シタ。次イデ小生ノ神經ノ標本供覽ヲシタ。ソノ報告ハ特ニ種々ノ方面ニ關係アルノ理由デ翌日ニスル事ニシタ、標本ニツイテハ一同承認シタガマレー氏ノミハ興味ナイノカアマリ注意シナカツタ。マレー氏ハ今回ノ大會ニモ殆ント列席セズ非常ニ異様ノ感ニ打タレタガ氏ハリーチ氏トノ感情ノ問題、殊ニマレー氏ハジャイ(C. G.) 氏トバーナード(Barnard) 氏ノ微生病原說ヲ裏書シ、之レニ對シリーチ氏ノ反對、コノ反對カラ感情ノ問題トナツタラシイトノ事デアアル。リーチハ得意ノ人デアアルニ、好紳士マレー氏が失意ノ風アルハ如何ニモ學會ノ爲メニ惜シイ事デアアツタ。

⑦ロンドン癌病院主催ノ海外代表歡迎晚餐會ハ同夜八時ヨリラングハムホテルニ開カル。參列セルモノハ主トシテ實際ニ研究シ且ツ本會議ニ報告セルモノ及ビレーベンヘヨック會員ヨリナリ、之レニ主催者側ノ主要幹部ヲ加ヘ總數百餘名ニ達シテ居ル。小生ハ、リーチ、マルフイー、リーバー氏等ト坐席ヲ同ジウシ、極メテ愉快、時々老先輩ノ顔ヤ演說

死ヲ起サス又ソノ壞死シタモノ、分解シタモノハ壞死組織(ばるもん)ト氏ハ命名シテ居ルガ全身ニ作用シコレガ又網狀織内被細胞ニモ作用シテ免疫性ガ出來ル様デアアル、從ツテ局部ニハ腫瘍細胞ガ消失シテ行キ且ツソノ間ニ幼若ナ結締組織細胞ガ増加スル事等ハらぢゅーむ、X光線ノ作用ニ似テ居ル、然シ之レハ個體ニヨリソノ使用量ヲ一定スル事不可能デ效果從ツテ未ダ良好デナイ、然シ之レヲらぢゅーむ又ハ光線療法トヲ併用シテ良成績ヲ擧ゲテ居ルモノモアル、コノ重金屬ノ作用ハ複雑デアアルガらぢゅーむヤX光線ノヤウニ卓越シタ作用ガアルカラ今後ノ研究ニヨツテ癌ヲ征服スル有力ノ武器ノ一ツトナル日モ近カラウト述ベテイルガ蓋シソノ現狀デアラウ、報告者中ベル氏ノ鉛療法ヲ無效有害トシテ放棄セルモノガアルガ然シコレモコレカラデアラウ。

次ニトーマス・ラムスデン(Thomas Lumsden)(ロンドン)ハ癌ノわくちん療法及ビ免疫性、ニホル化學的療法ト題シタ報告ヲシタ、實驗ニ基イテノ氏ノコノ方面ノ意見ヲ述ベタモノデアアル、惡性腫瘍細胞ニ對シテ免疫血清ヲ作り得ル、コレト惡性腫瘍細胞ノ體外培養ニ作用サスト之レヲ壞死セシメル作用ガ大デアアルコノ際ニソノ免疫原ガ癌デアラウト肉腫デアラウト作用ニ大差ガナイノハ奇デアアル、コレカラ考ヘルト共通ノ物質ガ又ハ病原體デモナイカト思ハセラレル又免疫血清ノ種々ナル特性ソノ作用検査上ノ注意ヲ述ベテ居ル、次ニわくちん療法ニツイテハ動物ノ癌又ハ肉腫ヲ移植シタモノニツイテソレヲ壞死ニ陥ラストソノ個體ニ吸收サレテ免疫體ガツクラレル事ハ他ノわくちんニ對シテ免疫體ガ出來ルト同ジコトデアアルトコレニ關スル種々ナル實驗ト注意點ヲ述べ人ノ惡性腫瘍ハらぢゅーむ又ハれんじけんヲ作用サシテ同様ノ事ガ起リ原發性腫瘍ガ治癒スル時ニソノ轉移モ自然ニ治癒スル事ガ稀ニアルノモノノ間ノ結果デアウト、コノ方面ノ研究モ對癌戰爭ニ對シテ意義アル方面ナル事ヲ述ベテ居ル。

◎午後(七月十九日)ハカンサー・ホスピタル(Cancer Hospital)サン・ウヰストミンスター病院(St. Westminster H.)リスター研究所及ビ前日供覽シタ、サン・マルクス病院(St. Mark's H.)ノ視察デアアル、カンサー・ホスピタルニハ種々

ソノ點カラ云ヘバ慢性胃潰瘍即チ胃癌トシテ手術スルガヨイカモ知レヌ。ソノ臨牀上ノ重要ナ症候ニツイテハ特記スル要ハナイガ種々ナ觀察ヲ述ベテイル。ソノ手術トハ光線療法トノ比較ニツイテハ多クハ觸レテ居ラヌ。胃癌ニハドウモ外科手術ニ軍配ヲ舉ゲザルヲ得ヌ大勢デアツタ。

◎第二部、癌ノ診斷ニ關スル部デ、サアー・ウイリアム・ホールホワイト氏座長トナリサアー・トーマス・ホールダー氏ノ報告ニ初マリ十四名ノ報告アリ。何ントシテモ上述シタ様ニ如何ナル療法モソノ手後レニナラヌ事即チ早期ニ診斷スル事が緊要デアアル。處ガ癌ハ局所ノ病變ニ初マリツイデソノ結果トシテ局所ノ異和ヲ感じ進ンデ全身ノ影響ヲ與ヘル。ソレデモ體表ノ癌デハ早く自覺モシ又診斷モ容易デ全治的ノ療法モ出來ルガ、内臓癌デハ局所ノ異常或ハ更ラニ全身ニ異常ヲ起シテカラ初メテ自覺乃至他覺症狀ガ現ハレル、ソレ故ソノ早期診斷ガ既デニ相當進ンダ時デアアル。臨牀的ノ早期ノ癌症狀トハ如何ナルモノカニ對シテ從來舉ゲラレテイル以外ノ特殊ノモノハ報告サレナイガホールダー氏ハ内臓癌ノ早期ニハ未ダれんじけん診斷モアマリ頼リニナラヌ、血清、血液等ノ検査モマダ同様デアアルカラ早く食道鏡、胃鏡或ハ膀胱鏡デ検査シ已ムナクバ診斷確實ノ爲メニ開腹シテ見ヨト述ベテイル、ベチット(ロンドン)氏ハ胃癌ノ診斷ニ就テ最モ確實ナルモノハ胃液ノ精密ナ検査デアアル、コレニヨツテ九〇%以上確定シ得ル、乳酸ノナイ例ガ五〇%アルガ乳酸ノ存在ヲ證明シ得タ場合ハ疑問ノナイモノデアアル、れんじけん診斷等ノ價值ヲ認メナイ。之レニ反シリール(ロンドン)氏ハ他ノ方法ト共ニ殊ニレントゲン検査ハ極メテ重要ナリト主張シテ居ル、レーウイス(ロンドン)氏ハ脾ガりばしぜ作用ヲ促進スル事ハ知ラレテ居ル。癌血清ニハソノ作用健康血清ヨリモ少イ、之レヲ利用シテ癌ヲ診斷スル事が出來ル、ソノ成績ハ二三例中一九陽性即八七%ノ適中率デアアル、更ラニ鉛療法ヲ行ヘル例ニツイテ血清ヲ検査スルトソノ快方ニ向ヘル例ニ於テハソノ作用上昇シテクルノデソレニ由ツテ血清ノ正常度測定上興味アルモノデアルト述ブ。

○アスコリ(カタニア)ハ日下癌ノ血清ヲ充分ニ得ラレナイガ例ヘ種々ナ血清診斷ガ絕對特異性ガナイカラトテ、度外サ

ヲ皮肉リ、殊ニリーチ氏ノ野次ニハ一同笑聲堪ヘズ。本會議々長タルブランド・サットン氏、ミル氏ハ主催側ヲ代表シテ一場ノ挨拶ヲナシ、次イデ招待者ヲ代表シテ和蘭ノロートガン氏及ビ米ノマルフィー氏ノ御禮演說アリ。ソノ間屢々我ナレバ萬歲ト云フベキ場所ニ乾杯シナガラ、The King、ヲ繰リ返スアタリ。國王中心、國王尊敬ノ念ノ旺盛ナルニハ我々乍ラ感心ノ外ナカツタ。午後十一時談笑中々ツキズ交歡シ午後十一時近ク余ハ明日ノ報告ノ準備モアレバ歸館シタ。明日コソハ癌ノ診斷及ビ癌ト神經ノ報告ニツイテ原因ニ關スル一般的討論ヲ約セルノ日デアル、余ノ責任ハ一ニ明日ニアルワケ。早ク床中ノ人トナル。

◎第五日——七月二十日——快晴。

會議最終ノ日デアル。本日ハ午前ノ報告ハ四部ヨリナリ。一ツノ身ヲ中々四等分モ出來ス。從ツテ開會ニ先ジテ各部ノ講演内容ノ印刷物ヲ集メ、ソノ内容ヲ通覽シツ、余ノ報告スベキ診斷ノ部ノ人トナル、他ノ部ハ時々參加シタニ過ギス。長與教授モ診斷ノ部ニ參列サレタ。余ノ報告セル際ニ先生ノ列席セラレルヲ氣付カナカツタノニハマタ多少アガリ氣味デアツタカト後デ赤面シタ。

◎第一部 外科部會デ、胃癌ノ早期認定、ソノ療法ニ關スルモノデサー・ゴールドン・ワットンソン氏座長トナリサ

ー・パーケレー・モーニハン氏ノ報告ニ初マリ數氏ノ報告アリ。此レヲ概括スレバ何ンノ病氣デモ同ジヨウニ種々ナ症候カラ早ク病名ヲ斷定スル事が大切デアル。癌ノ場合ニ特ニ然リデソノ手術デ胃ノ大半ヲ淋巴腺ト共ニ切除シ得ルガソレデモ多クハ手後レトナツテソノ治療例ガ夥イノハ遺憾デアル、氏ガ百例ノ胃癌ニツイテ調査シテ見テモソノ症候ノ多種多樣デ同一疾患ト思ハレヌ位デアルニ驚イタ。アルモノハ突發シ數週デ手術不可能トナル様ナ急性ナモノモアリ又一年二年時ニ二年以上ニ互ル慢性ノモノモアリ、コノ慢性ノモノハ多ク手術可能デアル、此等ノソノ症候ノ多種多樣等ニツイテハ病理學者ノ教ヲ俟タチバナラヌ、兎ニ角胃癌ニツイテハ診斷ヲ早クスル事が第一デ早期ナラバ全治可能デアル、

鎖サレ榮養供給ガ阻害サレ遂ニハ變性吸收サレルノデアアル。放射線ニ由ツテ癌細胞ヲ全部壞死サス事ハ不可能デコノ事實ガ大切デアアル。又過度ノ放射デ出來タ潰瘍ガ慢性ナノモノノ爲メデアアルト主張スレバ反對説ノ代表―ラカサーギ氏ハ皮膚ニ見ル過度ノ放射ニ由ル潰瘍モ血管系ニ内膜ノ肥厚ヤ閉塞等ガ起ル結果ト今日モ尙主張スルモノモアルガ余等ハ反對デアアル、ソハ放射ニ由ツテ上皮ノ種子層ガ極メテ早期ニ壞死スル結果斯カル變狀ガ起ルト信ズル。惡性腫瘍ニ對スル作用モ同様デソノ爲メニ血管等ニ變化ガ起ツテ云々ガ放射療法上重要ナ點デアアルトハ考ヘラレヌ、惡性腫瘍細胞ハ放射線ノ直接作用ニ由ツテ變性壞死スルノデアアルトテ一々反證ヲアゲテ反對シタ。

何レニセヨ尙研究ヲ要スル事デアラウ。

◎第四部 惡性腫瘍統計ト公衆衛生

癌ト人類及地理的關係ニ關シテエフ・エー・フレマントル氏座長トナリマジヨール・グリーンウッド(ロンドン)氏ノ報告ニ初マル。一體コノ問題ガ特ニ八簽シクナツタ事ハ一九二六年ノニセフホロ(伊)氏トビッタード(ジエチバ)氏ノ此レニ關スル報告ガ國際聯盟カラ發表サレタ爲メデアアル、ニセフホロ氏ハ今回モ統計的調査ニ關シ誤リ易キ種々ナ點ヲ注意シテ居ル様ニ綿密ナ統計家デ從來ノ醫學上ノ統計ニツキテ多クノ誤謬ヲ指摘シ、コレヲ統計ニヨツテ訂正シテ居ル。同氏等ノ報告ニ英國民ガ殊ニ乳癌、子宮癌ニ罹リ易イト云フノガ問題トナリ英國側カラ自國ノ各種族各地方ニ關スル統計的研究ガグリーンウッド氏以外ストックス氏及ビヤンク氏ニ由ツテ報告サレタワケデアロウ。統計學的研究モ中々複雑從ツテ解釋説明ガ困難デアアル、今日ノ處癌ナル診斷ノ確實度ガ國ニヨリ又地方ニヨツテ異ルノデ各國ノ癌死亡率ノ統計的研究ノ比較ハアテニナラヌ、人種間ノ癌問題モ同様デアアル。中ニハ各人種ノ混在スル大都市ニ於テ研究スルニ若カズト云フモノモアル位デアアル、大都市トテソノ人種別、年齡別、性別、職業別ニセバソノ統計スベキ數ガ寡少デ意味ガナカロウ。興味アリ又極メテ有意義ノ問題ダガ今後ノ研究ニ俟タチバナヲト思ハレル。

レテハ困ル、ワッセルマン反應ノヤウニコレチ善用スル事ニヨツテ非常ナ效果ガ認メラレル、ソノ血清又ハソノ構成スル物質等ノ研究デ更ラニ一段ノ進歩ガ認メラレルデアラウ。氏ニ次イデ

フライ(ロンドン)氏ハ惡性腫瘍ノ氏ノ血清診斷ノ成績ヲ報告シタ、千五百例カラノ材料ニ就テヤツテ居ル、ソノ成績ハ七三%ニ過ギズ又非癌血清ハ七百餘例中二九%陽性ニ出テ居ル事ハマタ遺憾デアル。次ハ余ノ番デアル

市川、余ハ本春癌ノ集談會デ報告シタ方法ヲ更ラニ改良シテ之レヲ茲ニ報告シタノデアル、殊ニ總テノ癌ノ血清診斷法モ余等ガナセル様ニソノ被檢血清ノ總蛋白量ノ一定、更ラニ狹義あるぶみん量ノ一定等ニ注意スル時ハ遙カニ好成績ヲ擧ゲ得ベキ事ヲ信ズ、余等ガボテロー氏法ヲあるぶみん、ぐろぶりん量ニ著目シテ改良シタ方法ニ於テハ一〇〇%ニ近キ成績ヲ擧ゲ得ベク從來結核ノ第三期ニハ時々陽性ニ出タガコレモ全ク訂正シ得ル事ヲ報告シタ。會場ニハボテロー氏モ參列シソノ再會ヲ喜ブト共ニコノ成績ニツイテ極メテ満足デアツタ、嘗ツテ氏ノ方法ガ巴里ノ學會デ認メラレナカツタ時ニ斷然佛癌研究會ニ紹介シソノ優秀ナ事ヲ紹介シテ以來ノ知己デアル丈ケオ互ニ愉快デアリ、フライ氏モソノ方法ヲ尋チボテロー氏ガ小生ニ代ツテ説明スルアタリ氏ノ得意ノ顔今日尙目前ニチラツク。

◎第三部 らぢ、い、む、及X光線、血管、及淋巴管系統、ニ及ボス影響、殊ニ惡性腫瘍ニ就テ

アルバート・ノックス氏座長トナリ紐育ノカーター・ウアド氏ノ報告ニ初マリ佛ノラカサーキ、獨ノホールフェルダ―氏以下數氏ノ報告ガアツタ。今日ノ所淋巴系統ニ對スル影響ハ少イト主張スルモアリ又ハ不明デアルト報告シテ居ル。諸テ血管系統ニ對スル影響ニハ討論ガアル。ソハらぢ、い、む及ビX光線ノ惡性腫瘍細胞ニ對スル直接作用ヲ認メヌモノハナイガソノ間接作用ニツイテノ討論デアアル。ソノ一方ノ代表ハカーター・ウッドデらぢ、い、む及X光線ノ放射ニヨツテ局所血管壁ノ肥厚及管腔ノ閉塞ヲ見ル事ハ興味ガアル事デコレハ太イ動靜脈ヨリ細小ノモノ程著明デアアル、初メハ血管壁ノ變化デアアルガ後ニハ血管ヲ中心トシテ結締組織ガ増生シ、局所ガ硬結シ放射線デ死滅シナカツタ癌細胞ガソレニ封

ナイ中々ノ設備が出要然カモ表在スルモノデハびおぶしーデスグ診斷出來ルカラデアラウ、次ガ余ノ番デアル。

余(市川)ハ癌ノ發生ト神經トノ關係ニ初マリ先ヅ癌組織内ニ神經が存在スル事ヲ供覽シタ、リーチ氏ハ銀ノ細胞間沈著ナラズヤトノ討論ヲシタガ一同ソノ神經ノ存在ヲ承認シタ。次イデ余ノ癌ノ發生原因ニ關スル意見ト今回ノ諸原因論ニ對スル討論ヲシタ。ソノ要ハ即チ癌ノ發生原因ニ關シテ我々ガ茲十餘年來努力シテ來タ癌發生實驗ヲ今日皆サンガ捨テ單ニ職業癌ニ見ルノト同一デ癌ノ一小部分ニ過ギヌトサレテ再ビ鶏ノ可移植性肉腫ノ研究ニ立チ歸ヘラレ、特殊ノ腫瘍發生物質 (Tumor Producing Substance) ナルモノヲ認メコノ様ナモノガ癌ノ發生原因トナル、コレガ原因論ニ對スル進歩ダトサレテ居ル様デアルガ、私ハ研究トシテ甚ダ興味ガアルガ癌ノ原因トナルモノハソナモノトハ思ハヌ、第一ニ癌ノ原因ヲ研究ヲスルノニ鶏ノ可移植性腫瘍ヲ材料トスル場合ハソレガ特殊ノ病原微生物ノ存否ヲ追究スルニハ適シテ居ル。モシソノ病原物ガナイ場合ニハソノ原因論ニ對スル意義ハ渺ナイ。第一ハ原因ヲ論ズルニハ如何ニシ如何ナル原因ニヨツテ局所細胞ガ惡性腫瘍化スルカラ研究スルニアル。既デニ惡性腫瘍細胞化シテシマツタ鶏肉腫、ソノ性狀ハ如何ニモ哺乳動物ニ見ルモノニ極メテ近似シテ居ルガ尙多少異論ナイワケモナイ、斯ル材料ヲ用ヒテ得タ結果ヲ以テ一般然カモ人類惡性腫瘍ノ原因ニ適用セラル、事ヲ殘念ニ思フ、私共ノたゝる癌ノ様ニ局所細胞ガ漸次惡性化スル事ヲ追究シ得ル實驗ハ極メテ貴重デナカロウカ。鶏肉腫カラノ腫瘍發生物質ハ果シテ化學的物質デ腫瘍細胞ヲ含マヌモノデアラウカ、自身ノ實驗デハナイ、我ガ中原氏ノ研究デアルガソノ濾過液中ニ細胞ガアル又ソノ他ノ實驗デモ氏ノ結論ハ化學的物質ヤ微生物デナイト云フ事ニナツテ居ル故、私トシテハ興味アル、マルフィー氏及ビリーチ氏ノ所說ニハ賛成シ兼手ル。私ハ私共ノ多年來ノ人工癌發生實驗ニ基イテ『ソノ物が如何ナル理化學的ノモノデモ、ソノ作用ガ外部カラデモ、内部カラ作用シテモヨロシイ、ソノ作用ガ局所細胞ノ増生ヲ促進スルモノデアリ同時ニ又局所血管ヲ支配スル神經ニ持續的ニ機能異狀ヲ起サセ、局所、血管ノ擴張即チ、局所營養過剰ヲ惹起セシメル様ナモノナラバ何レモ局所

次ニ對、癌公衆運動ノ問題デ英國衛生省ノジョルデ・フカヤナン氏演壇上ノ人トナリテ、英國ニ於ケル一八四七年以來今日ニ至ル癌死亡率ガ漸次増進シテ約四倍強トナツタ事カラ之レニ對スル公衆運動ニ及ビミッドルセツクス病院ノ癌治療部(現同名癌病院)かんさー病院、クリスチー病院又王立癌研究所ノ設立トナリ、各州ニ於ケル癌死亡統計ノ調査報告ヲ見ルニ至リ又工場衛生ニ關シ殊ニ對癌內務省令ノ發布トナリ、又歐洲大戰後政府所有ノ多量ノラヂーウヲ醫學研究會ニ譲リ、會ハコレヲ癌ノ研究用トシテ各病院ニ配布シ、ソノ研究成績ヲ報告セシムル事ニシタ。最近ニ至リ(一)衛生省デハ特別委員ヲ命ジテ癌ノ原因治療ニ關スル報告ヲサセ又ソノ研究促進ニ對シテ如何ニスベキカヲ諮問スル事ニシ、各種ノ専門家ヲソノ委員ニ命ジタ。(二)一九二三年ニ英帝國對癌協會ノ設立トナツタ事及ビ(三)最近四五年ニハ大都市又地方ニ於テモコノ對癌問題ニ非常ナ注意ヲスルヨウニナツタ事ヲ述ベタ、次イデ獨ノブルーメンタール氏ハ獨乙デハ癌研究會中央委員會ニ於テ對癌戰爭ガ組織サレ之レニ關聯シテ各地方ニモ地方委員會ガアル、ソノ財政ハ中央ノ補助ヲ受ケテ居ル、事業トシテハ、通俗講演、講習、學會ヲスル、ソノ他フイケーラ(伊)ハ新設ノミラノ癌研究所ノ内外設備等ヲ供覽シテ茲ニ午前ノ報告ハ終ル。

七月二十日午後。

◎病院視察

本日ノ豫定ハ惡性腫瘍ノ病原體ノ培養ニ成功シタト云フ ज्याイ氏ビバアナーード氏等ノ成績ヲメジカル・レサーチ・カウンシルデ供覽スルトノ事デアル、其ノ他ウエルカム博物館、ローヤルカレッヂ博物館等ガ開放案内サレル筈デアルガ本日モレーベンヘヨック會ノ然モ私ノ神經ノ問題ト原因ニ關スル討論ガ今日ニ延期サレタノデ私トシテハ一層ノ緊張ヲ感じ、午後二時半ニカンサーホスピタルニ馳セ參ジタ。本日ガ最終日トテ全會員集合シ張り合ヒガアツタ。

◎レーベンヘヨック會、和蘭ノウオーテルマン氏ノ診斷法ノ改良ニ關スル報告ニ初マル氏ノ所謂呼鈴式ノデアル、局所組織ノ電導度ヲ利用シタモノデアル、中々面白イ著想デアルガソノ發表以來既ニ數年ヲ經過シタガ複試スルモノモ

ツ早期ノ例ニ限ラレテ居ル位、唯聞クハ早期診斷ノ必要ノ聲ノミ、化學療法トテマダナカナカ近時問題トナツタ鉛療法サヘツノ發頭人ノベル教授サヘ自信ノナイ様子デ今後ニ俟タチバナラヌ、ソノ他ノ問題デモ皆コレカラノ研究ノ必要ナモノ許リ。萬國専門ノ人々ノ努力モコレマデカト長大息セザルヲ得ナイ、前回ニ比較シテハヒロク有益デアリ興味アル幾多ノ報告ハアツタガ、癌ノ問題ノ至難ノ事ニハアキレザルヲ得ナイ、次ノ會議迄我々ハ如何ナル方面ニ向ツテ努力シ何ニ貢獻セントスルカ、三ヶ年ノ年月ハ長イ様デモ癌研究ノ歴史カラ云ヘバ短カイ、然シ他ニ劣ラヌ獲物ヲモツテ次ノ會議ニ蒞ミタイ、ロンドンノ歸途ハ佛國ノ對癌協會組織ノ調査ヲトノ事ニ佛國ニ渡ツタ。佛國ハ前ニモ長ク滞在シタ所知人モ多ク、又得ル所モ尠クナカツタ、殊ニソノ治療ノ方面ノ研究デアアル、治療ノ方面ノ面白イモノハ多ク研究中デアリ發表セズニ著々ソノ歩武ヲ進メテル事デアツタ、コノ事ハ何レモ祕密ニ屬スルガ、何ニモ打ち解ケテ語ル親シイ友ノ多イコノ國ノ此ノ方面ノ仕事ガ完成サレテ皆サンニ福音ヲ招來スル日モ遠クアルマイト思ヒ祈ツテ居ル、私ニモ是非ソレヲヤレトノ事ニ丁寧ニソノ研究ヲ見セテクレタガ、マヅシバラク自己ノ目的ニ向ツテ邁進シヤウ。然シボテローガ「何ニ原因ガワカラチバ治療ガワカラヌ理由ガナイ」トテヤツテ居ル意氣ニハ大イニ共鳴シタ。コノ項ハイヅレ他日ニ。

細胞ノ増生ヲ益々旺盛ニシ、遂ニハ異常増生進ンデ惡性腫瘍化サレ、獨立自主ノ發育ヲ得ル様ニナルモノト信ズル。コハ信念ヲ立證スル爲メニ多年神經ノ問題ニ從事尙ソハ續行中ナラケデアルト約一時間半ニ互ル報告ヲ兼テ討論ニハ異常ナ緊張ヲ惹起シタ。佛、白及ビ塊ノ連中ハ非常ニ痛快ゲニ見エタガ、サテリーチ氏マルフィー氏ハ非常ナ亢奮デ、トイッテレンデル氏モ亦ソノ派ニ近イダケ親シキ友デアリ乍ラ中々手キビシイ討論ヲ交ハシタ、コノ討論タケデモ一時間餘ニ互ツタ。私ハ佛、英混リテ應戰シタ。ソレデモ特殊病原論ニハ反對デアツタノデリーチ氏ハ次回ヲ約シテ愉快ニ會ヲ閉デ、一同別室デシバラクノ送別ノ茶菓ノ饗應ヲ受ケ寫眞ヲトツテ午後六時一同ト別レタ。コレデ學術的會議ハ完全ニ終了シ私モ漸ク重荷ヲ下シタ感ガアツタ。歸途トイッテレンデル氏、リュブシツツ氏ト共ニ氏等ノほてるニ會食ハ明日リッチモンドヘノ慰勞ノ見物ヲ約シ快談十二時ヲ過ゴシタ。

◎癌會議終了後ノ所感

會議スミ郊外リッチモンドノ丘上ニ立チ雜踏ノ巷ロンドン市ノ繁雜ヲ思ヒ出シテハ張リツメテ居ツタ昨日迄ハ兎ニ角、今日トナツテハ地獄ノ様ニ思ハレル、廣々シタ公園ノ丘上ニ蜚蜚ト流ル、テームス河ヲ見下ロシ、ソノ靜ケサト自然ノ偉大ニ抱擁サレテハ仙境ニ辿リツイタ感ジガスル。今會議ノ過ギ來シ方ヲ考ヘルト何ニカ一大進歩ノアトガアツタラウカ、嗚呼我等ノストラスブールノ大會後又ハ一昨年ノモホンク湖邊ノ大會後ノ努力ハ思ヒヤラレテ心細イ。癌ノ原因ノ方デモ何ノ進歩ガアツタラウ、難ノ肉腫ノ研究ノ繰リ返し、蒸シ返シヨク云ヘバジャイ氏トバーナード氏ノ微生物說ノ打破サレブル―メンタールノ細菌說ノ撤回、スライガ遺傳說ヲ變更シテ刺戟說ニ近ヅキ、余ノ新刺戟說ノヨウナモノノ出現デ、イヅレモソノ研究ノ道程ニアル。診斷ノ方トテ自分ノ方法モ相當自信ガアルガ勿論尙研究ヲ要スル。他ノ方法ハ自贊デナイガマダ理想ニ遠イ。治療ノ方面デモらぢゅゝむト云ヒれんさけんト云フモノノ目的ニ向ツテ進展シタトハ云ヘ、幾多ノ研究ノ餘地ガアリ、手術ニ取ツテ替ルゲケニ至ラナイ、相互ノ長短ヲ適宜ニ應用シテモノノ全治例ハマ

期間ノ問題ニ光ヲナゲタフイビゲル等ノ實驗的研究ニ見ラル。

著者ハ山極、市川兩氏ノ實驗ヲ後試シタガ寄生蟲ハ勿論ナシモ著者ノ第一次刺戟ニアタリ、腫瘍初期ト完成トノ間ニハ潜伏期ガアル。コノ時期ニ於テ細胞ニ増殖ヲ起サセル準備的激勵ノ第一次刺戟ガ消エ、終末ナキ増殖ヲ來サシメル細胞固定のナ第二次刺戟ガ起ル。

次ニ著者ハたしるヨリ一層化學的純粹ノ物ヲ用ヒヨウトノ考ヨリ人體ニ於ケル觀察ニ基キ砒素デ實驗ヲ試ミタ。先ヅ最モ得易イ刺激感受性アル場所トシテ胎生組織弱ニ依ツテ作ラレタ結節ニ非常ニ薄メタ砒素溶液ヲ數ヶ月ニワタツテ注射シタ。其ノ結節ハ對照ノモノヲ、大サ、組織豐富ノ度ニ於テ凌駕シ、四匹ノ動物中一匹ハ一年以上ノ後癌ノ狀態ヲ示シタ。又胎生動物ノ胃及ビ腸ノ一少部分ヲ成熟鼠ノ胃壁ヘ植エ、ソノ動物ヘ其後永イ間少量ノ砒素ヲ食物ト共ニ與ヘタ。移植胎生組織ハ對照動物ニ於テハ一旦保存サレタ後殆ンド常ニ二ヶ月ノ後消失シタノニ、砒素ヲ與ヘタ動物ノ約半数ハ胃ノ腫瘍ヲ生ジタ。多クハ腺囊腫、

一回ニハ多數ノ轉移アル肉腫デアツタ。肉腫及ビ轉移ニハ砒素ガ證明サレ轉移ノ方ガ大キクナツタノハ面白い。

カレルモ自分ト無關係ニ鶏ニ於キテハ極メテ弱イ砒素量ガ移植胎生組織ニ對シ腫瘍發生作用ノアル事ヲ示シタ。又對照動物トシテ直チニ砒素ヲ與ヘタ鼠ニ偶然腹腔肉腫ヲ發見シタ。ソノ中ニチスチセルクス、フアスチヲラーリスヲ見出し、コノ寄生蟲ハジュネーブデハ屢數デアルノニ、ソノ上ニ偶發肉腫ガ生ジタノヲ見ナイカラ動物刺戟ト砒素ト云フニツノ第一次刺戟ノ協力ニヨツテ肉腫ヲ生ジタモノト信ズル。コノ肉腫ハ移植可能デ四匹中一匹ヅ、ニ、只一度ダケハ二匹ニ移植陽性デアツタ。而シテ六代目中ノ動物ニ稀薄砒素溶液ヲ注射シタラ七代目ニハ六匹三匹ノ陽性ヲ得タ。

コノ實驗ニヨリ砒素ト動物刺戟トニ完全ナ平行ガアル事ガワカリ、此等ガ第一次刺戟デ第二次刺戟デナイ理由トシテハ、「砒素導入ト腫瘍發達マデノ潜伏期」「砒素導入ナシニ腫瘍ノ移植シ得ル事」「鶏ノ砒素肉腫ハ細孔濾過器ヲ通ジテ濾過後移植可能ナル事」等ガアゲラレル。

複刺戟ノ立場ヨリ見たル癌發生ニ就テ

Askanazy: Sonderabdruck vom Wiener klinische Wochenschrift, Jahrgang 40 1927.

腫瘍ノ定義トシテ最も重要ナル點ハ終末ナキ過剰成長ト云フ事デアル。

腫瘍ノ成因ニ關シ色々ナ説ガアリ、ソレヲ求メルタメニ色々ナ方法ガ用ヒラレタガ、最近四半世紀以來動物實驗ガ盛ンニ用ヒラレル様ニナツタ。

著者ハ原因ニ四要素ヲ考ヘル。(一)全身素因(二)刺戟感應準備(三)第一次癌刺戟(四)第二次癌刺戟ガコレデア

ル。全身素因ハ一般ニ認メラレテ居ル所デ種屬素因及ビ個體素因ヲ分チ得、動物實驗ニ於テモ表レテクル。

癌ハ始メニ於テハ確ニ局部的疾患デア

ル。局所の要素トシテ先ヅ刺戟感應ノ準備ガ考ヘラレル。普通組織ニ刺戟ガ加ハツテモ腫瘍ハ發生セズ、何等カノ意味デ組織ガ變化シテキル要ガアルカラ。胎生時殘存組織モソノ一ツデア

ル。コーンハイム氏迷芽説ハ癌前驅疾患及ビ實驗的たる癌等ノ知ラル、今日、全體の通用ハ全ク許サレナイガ、部分的ニハ確カニ真デア

ル。著者ガらッてニ於ケル實驗ニ於テ、其胎兒ヲ揺リ碎イテ作レル粥ヲ皮下又ハ腹腔内ニ移スト腫瘍様ノモノヲ大部分ニ發生スルガソノ中ノ三例ニ於テ接種組織ヨリ肉腫、癌ヲ作り得タ事デワカル。

癌前驅疾患トナレルモノハ慢性炎症ガ多ク之レヲ癌形成ト直接關係ナキ原因デ起サレルモノト然ラザルモノニ分チ得ル。前者ハ、胃潰瘍、肝萎縮、肺結核癰痕等デ、後者ハたゝる長期接觸、膽石等デア

ル。癌刺戟トシテ殆ンド總テノ外的病因ガアゲラレル。生物中細菌ハ決シテ腫瘍形成ノ直接原因トハナラズ。反之吸蟲類等寄生蟲ガ問題トナル。膽道癌、膀胱癌及ビ刺戟ノ種類

雜報

○長與理事長歸朝

豫テ渡歐中ナリシ長與理事長ニハ各地ニ於ケル會議ニ參列シ八月九日伯林發シペリア經由ニテ長途無事八月二十四日午前九時五十五分東京驛著歸朝セラレタリ。

○理事會

昭和三年十月八日午後六時ヨリ錦水ニ於テ第四回理事會開催ス、出席者、本多會頭、長與理事長（今回歐洲ヨリ歸朝）、鹽田、高木、木村、佐々木、稻田各理事、山川、市川

報告事項

長與理事長ニハ、今夏ジエチバ國際聯盟保健部ニ於ケル癌會議並ニロンドンニ於テ開催セラレタル第三回國際癌研究會議ノ狀況其他ニ就キ詳細ナル報告ヲナサレタリ。（別項本多會頭宛ノ通信参照。）
次イデ議事ニ移ル。

協議事項

- 一、萬國癌研究會加盟ニ關スル件
本會ハ右萬國癌研究會ニ加盟スルコト、シ長與理事長、市川厚一兩氏ヲ代表者トシテ通告スルコト。
- 二、評議員囑託ニ關スル件

○雜報

本會ノ事業發展ヲ期スルタメ可成多數ノ評議員ヲ囑託スルコト。

三、Radium 購入ニ關スル件。

治療用トシテ約五十延瓦位ヲ購入スルコト。

○評議員囑託

醫學博士 增田胤次
醫學博士 遠山郁三
醫學博士 菊地循一
男爵 近藤滋彌
右諸氏ハ昭和三年十月二十日總裁宮殿下ヨリ本會評議員タルコトヲ囑託セラル。

醫學博士 川添正道
醫學博士 高橋明
醫學博士 松山陽太郎
右諸氏ハ昭和三年十月三十日總裁宮殿下ヨリ本會評議員タルコトヲ囑託セラル。

門野重九郎
右ハ同年十一月三十日總裁宮殿下ヨリ評議員ヲ囑託セラル。

○篤志家ノ寄附

著者ハ又胎生組織粥ヲ有スル鼠ニ約一ヶ月作用スルら
ぢうむえまなちんヲ持ツがらす管ヲ植エ、腫瘍ノ強大ナル
發育ヲ起シ得タ。作用期間短キ爲カ惡性腫瘍トハナラナ
カツタガ。

第一次刺戟ニヨツテ増殖ヲ始メタ細胞ニ終末ナキ成長
ヲ續ケサセルニハ第二次刺戟ヲ考ヘテバナラヌ。然シ第二
次刺戟ハ如何ナルモノカハ現在尙難問題デアル。

第二次刺戟ヲ考ヘナイ說デ腫瘍ハ病的影響ガ再補充ヲ
起シ其レガ目的以上ニ越エテ行クノダ、即チ野性ニナツタ
再生ノ一種ダト云フ考ガアルガ、腫瘍形成前ノ現象ハスベ
テ再生ニ適スルト云ヒ難ク、再生ノ語ハ増殖ガ代償ニ役立
タヌ様ニナツタ時ハ用ヒラレナイモノデアル、癌患者ノ定
型的ノ年ハ再生能力ノ低下シタ老年デアル。又腫瘍組織ノ
拘束ナキ増殖ヲ生物學的變調ヲ以テ説明スル考モ原因の
ノ考ヲ表ハサヌ。

癌細胞ノ生物學的變化ニ付テハ疑ハナイガ其ニ就テノ
ワルブルゲ等ノ觀察モ終末ナキ成長ニ關シテハ何等ノ鍵
ヲ與ヘナイ。

第二次刺戟ニ關シ超濾過可能ノ生物ト酵素様作用トノ
考ガアルガ寄生物共力ハ若シアルトシテモ或場合ニノミ
行ハレ得ルモノデ反之酵素様物質ガ活力ヲ與ヘル意味デ
作用スルカドウカヲ研究スルノハ面白イト思フ。

(濱口抄)

寄附金名簿

年	月	金	額	姓	名	摘	要
明治四一	四	同	二〇〇、〇〇	福間	甲松殿	四月ヨリ月割五拾圓宛	
同	同	同	五〇〇、〇〇	山中	清兵衛殿	「癌」發行費トシテ	
同	四二	九	一〇〇、〇〇	緒方	銈次郎殿	經費中へ	
同	四三	七	五〇〇、〇〇	綾井	忠彦殿	故長與稱吉氏ノ遺志ニ依リ	
同	同	一〇	五〇〇、〇〇	長與	立吉殿	故島柳二氏ノ遺志ニ依リ	
同	同	八	二五〇、〇〇	島一	之殿	故後藤節藏氏ノ遺志ニ依リ	
同	四四	七	二〇〇、〇〇	後藤	半吉殿	研究費中へ	
同	同	八	一〇〇、〇〇	男爵 大島	富士太郎殿		
同	同	九	一〇〇、〇〇	男爵 長與	立吉殿		
同	四五	二	一〇〇、〇〇	緒方	正清殿		
同	同	同	二〇〇、〇〇	長島	鷺太郎殿		
大正二	四	同	一〇〇、〇〇	志立	鐵次郎殿		
同	同	五	二五〇、〇〇	檜山	剛三殿		
同	同	六	一五〇、〇〇	岩永	裕吉殿		
大正三	三	同	一〇〇、〇〇	岩永	裕吉殿		
同	同	同	五〇、〇〇	増田	増藏殿		
同	同	同	一〇〇、〇〇	志賀	潔殿		

六月	一金五百圓也	平田篤次郎殿	拾壹百圓ヅ、
十一月	一金五百圓也	平山 金藏殿	五ヶ年賦
十二月	一金五百圓也	安田修徳會	右ト同シ
十二月	一金貳千圓也	理事長平山成信殿	一時納メ
十二月	一金壹萬圓也	鹽原 又策殿	昭和四年度ヨリ
十一月	一金參百圓也	遠山 正路殿	金壹千圓ヅ、十
十一月	一金壹千圓也	高橋源太郎殿	ヶ年賦
十一月	一金壹千圓也	故評議員遠山椿	吉氏ノ遺志ニ依

○評議員逝去 本會評議員醫學博士遠山椿吉氏ハ宿病中ノ處昭和三年十月二日、評議員醫學博士宇野朗氏ハ宿病中ノ處昭和三年十一月二十日ニ何レモ逝去セラル洵ニ哀悼ノ至リニ堪エズ謹デ弔意ヲ表ニス。

○長興理事長ノ通信

拜啓萬國癌研究會モ十六日開會二十日閉會致候、癌ノ會議トシテハ空前ノ盛會ニテ英國會員三百人外國代表約九十名ニ及ビ候米國ヨリ二十三名佛國及獨逸ハ各十二名ヲ派シ各國ノ大家ヲ網羅セルノ觀有之候。十六日ハKing へノ謁見式アリ(Buckingham Palace) 同夜ハ會長 Sir BlandSutton ノ宴會、十八日ニハ總裁 Duke & Duchers of York (第二皇子)ノ接見ナド有之中々大仕掛ニ御座候毎日午前中ハ演説、午後ハ諸病院及研究所醫學

博物館等ノ參觀、でもんすさちあおん等有之候。會議ハ四ヶ所ニテ分レテ毎日開會臨牀方面ハ Radium 應用方面、診斷、原因、病理、外科、豫防治療等ニ分チテ開演致候。格別新シキ優レタル發表ハ無之候へ共相當有益ノ報告多々有之候。(Ve ノ病原説 Bell ノ鉛療法ハ共ニ極メテ陰薄ク候。

何レ歸京ノ上委細御報告申上ベク候、

開會中此度ノ會合ヲ機會トシテ萬國癌研究會ヲ設立スルノ議起リ英、獨、佛、伊、米、白、和及日本ノ代表集合結局成立ヲ決定先ヅ其準備委員トシテ日本ヨリハ小生ト市川君其儘其任ニ當ルコト、致候、英國ノ Leitch (Cancer Hospital ノ研究部長)氏專ラ肝煎役ヲツトメ申候、日本歸著ノ上 Permanentノ Delegatesヲ決定報告ノ管ニ御座候、各研究所、病院等ノ資金豊富ナルニハ驚キ入候昨年度 Cancer Campaign へノ寄附金ノミニテ百三十萬圓ニ及居候此國ハ皇室始メ病院慈善事業ニ寄附ノ風習アリ殊ニ癌ノ事業ニハ寄附者多キ由ニ御座候、古キ歴史モアリ國富モ豊ナルニ依ルコト勿論ナガラ少シク羨望ノ念起ラザルニ非ズ、歸朝後種々御打合ヒ致度事多々有之先ハ不取敢右御報告迄 草々 不

昭和三年七月二十三日 於倫敦 長興又郎 本多會頭殿

大正三、四

七〇〇,〇〇〇_円

二〇〇,〇〇〇

一〇〇,〇〇〇

一〇〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

一〇〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

一〇〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

三〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

一〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

一〇〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

二〇,〇〇〇

五〇,〇〇〇

七

五

木下 正中殿

益田 達殿

森村 市左衛門殿

森村 勇殿

安田 善三郎殿

芝川 又四郎殿

森下 博殿

山尾 庸三殿

岸 清一殿

藤田 俊一殿

田村 寛貞殿

山本 厚太郎殿

茂木七郎右衛門殿

濃澤 榮一殿

西村 直殿

堀越 角次郎殿

青山 胤通殿

本多 忠夫殿

厚本 大三郎殿

伊澤 平左衛門殿

安川 敬一郎殿

研究費中へ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

故免禮氏慈善基金中ヨリ
研究費中へ

同 同

八

六

一〇〇、〇〇
一〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
一〇〇、〇〇
二〇〇、〇〇
二〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
三〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
五〇〇、〇〇
二五〇、〇〇
一〇〇、〇〇
二五〇、〇〇

男爵

男爵

永田利之殿 同
三輪善兵衛殿 同
森村開作殿 經費中へ
佐々木隆興殿 同 壹百圓宛五ヶ年間
木村清四郎殿 研究費中へ
鹽原又策殿 同 每年四百圓宛五ヶ年間
本多忠夫殿 經費中へ
服部金太郎殿 研究費中へ 每年千圓宛五ヶ年間
岸敬二郎殿 同
今村繁三殿 經費中へ
土肥慶藏殿 同 每年百圓宛五ヶ年間
本多忠夫殿 經費中へ 每年百圓宛五ヶ年間
長與又郎殿 同
木村德衛殿 同
稻田龍吉殿 同
高木喜寛殿 同
鹽田廣重殿 同
大橋新太郎殿 研究費中へ 五百圓宛五ヶ年間
高橋是賢殿 研究費中へ
福井菊三郎殿 同
門野正二殿 同

[illegible]

同三、一〇、一	五〇〇、〇〇	同、同
同三、一〇、二二	二、〇〇〇、〇〇	安田修徳會
同三、一〇、二〇	一〇、〇〇〇、〇〇	平山成信殿
同三、一一、五	三〇〇、〇〇	鹽原又策殿
同三、一一、七	一、〇〇〇、〇〇	遠山正路殿
		高橋源太郎殿
		研究費中へ一時納
		同、昭和四年度ヨリ千圓ヅ、十ヶ
		同、賦
		同、故評議員達山椿吉氏ノ遺志ニ
		依リ
		同、金貳百圓ヅ、五ヶ年賦

總計 金貳拾四萬四千四百參拾六圓四拾六錢也

[illegible]

癌

第二十二年
昭和參年

社団法人
癌研究會



癌第二十二年總目次

一、原著

第一冊

胃腸管ぼりぼりじす及び其レノ癌腫性變化ニ就テ(承前) (附圖第一—

第五表) 杏 掛 諒 一

そらまめノ根端組織ニ作ラルルX線腫瘍ノ位置ニ就キテ (附圖第六及

第七表) 小 室 英 夫 四一

第二冊

家鶏肉腫移發原因體ノ性質、乾燥材料ニヨル一實驗(附圖第一表) 中 原 和 郎 一七七

惡性腫瘍ノレントゲン治療ニ向ヒ二次線發生體トシテりびをどーる

ノ應用(附圖第二表) 鹽 谷 不 二 雄 一八五

汎發性肝臟轉移ヲ起セル右側惡性副腎髓質腫瘍ノ一例 (附圖第三—

第四表) 中 村 四 雄 二〇二



大戰後第三回國際癌會議概況（一九二八年七月於ロンドン）……………市川厚一：四一四

一、抄錄

第十九回癌研究會學術集談會演說……………六四

ヨハンチス、フイビゲル（一八六六—一九二八）……………三三三

複刺戟ノ立場ヨリ見タル癌發生ニ就テ……………四三四

後腹膜ヨリ發生セル巨大ナル紡錘狀細胞肉腫ノ一例(附圖第五—第六

表).....熱田健.....二二九

第三冊

動物腫瘍ノ免疫學的研究補遺.....石原房雄.....二五三

惡性腫瘍ノ治療法ノ研究(第二回報告)

大黑鼠可移植性肉腫ニ於ケル治療實驗報告(一).....中村復一郎.....二七七

胎兒組織移植ニ依ル畸形腫樣新生物發生ニ就テ(一).....井手政雄.....三〇八

日本ニ於ケル癌死亡率ノ統計的調査(英文).....草間弘.....(歐文欄)

第四冊

惡性腫瘍ノ治療法ノ研究(第二報告)

大黑鼠可移植性肉腫ニ於ケル治療實驗報告(二)(附圖第一—第二表).....中村復一郎.....三四二

胎兒組織移植ニヨル畸形腫樣新生物發生ニ就テ(二)(附圖第三—第五表).....井手政雄.....三六九

惡性腫瘍ノ異種動物諸臟器、筋肉竝ニ皮下ニ於ケル移植實驗成績ニ

就テ(附圖第六—八表).....三和功.....三九九

社團
法人
癌研究會會員名簿

(昭和三年十月調)

(ABC順)

●名譽會員

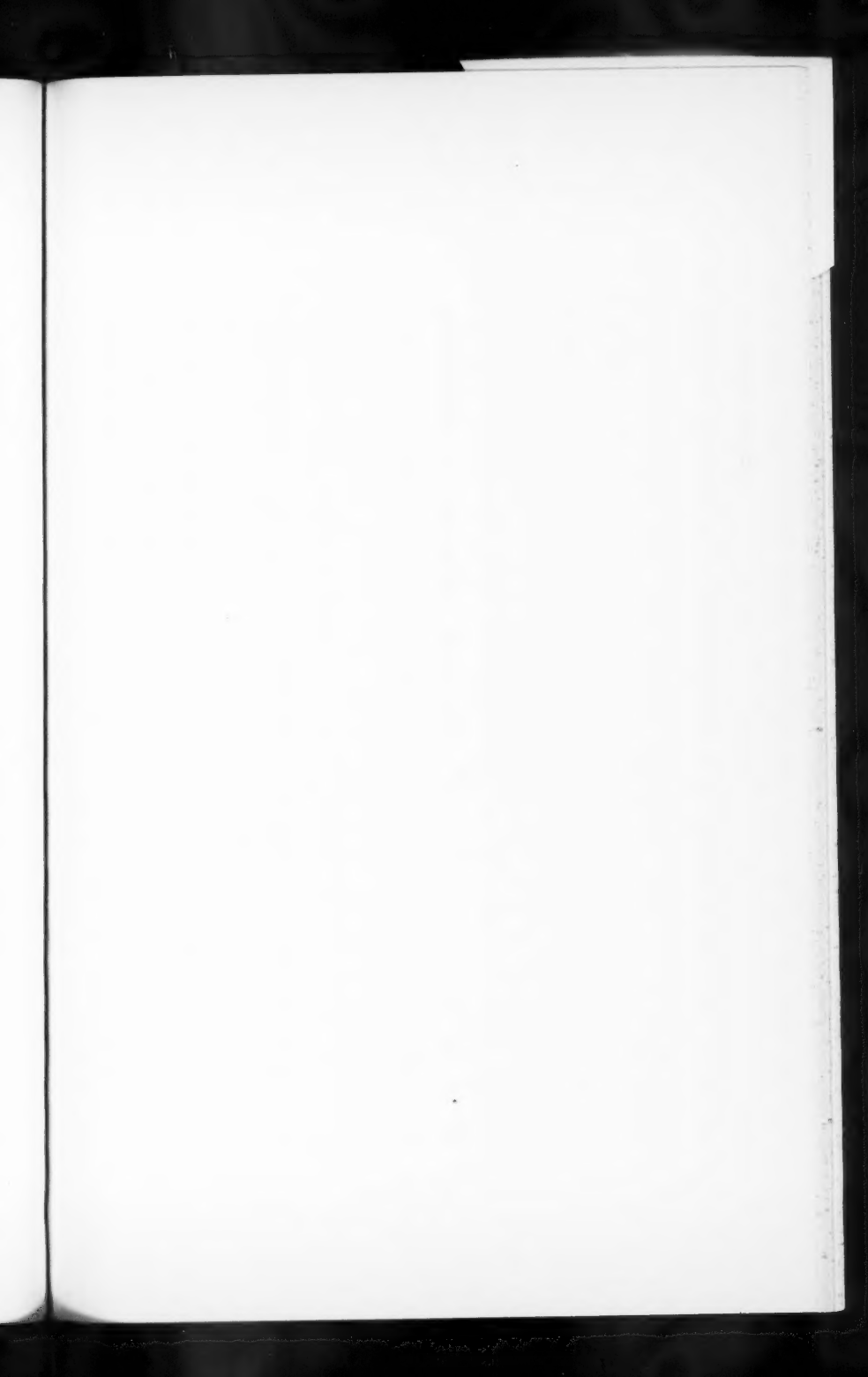
麴町區下二番町四六
東京府下瀧野川町西ヶ原五一
京橋區銀座二丁目
麻布區龍土町五五
芝區田町七ノ六
芝區高輪南町三〇
東京府下目黒下目黒一五六
本郷區切通
日本橋區田所町一三
大阪市東區高麗橋四丁目三十四銀行内
神奈川縣小田原町板橋
麻布區本村町一四四
赤坂區今井町
横濱市神天通り二丁目
芝區高輪南町三三
三重縣桑名町

○會員名簿

男爵 土肥慶藏
男爵 古河虎之助
服部金太郎
本多忠太
今村繁三
磯村豐太郎
岩永裕吉
岩崎久彌
男爵 川崎榮助
菊地恭三
男爵 益田孝
松原重榮
男爵 三井八郎右衛門
茂木惣兵衛
男爵 森村市左衛門
諸戸清六

神戸市二番町二ノ一神戸衛生實驗所
小石川區關口臺町一
麴町區上六番丁四三
麻布區一本松町二二
麻布區三河臺町二五
小石川區小日向臺町二ノ三五
東京府下瀧野川町西ヶ原一〇三六
日本橋區室町三ノ一〇
東京府下瀧谷一六五
名古屋市西區島田町三ノ四
麻布區市兵衛町一ノ五
東京府下荏原郡蒲田村北蒲田
兵庫縣西宮市
同所
神戸市二番町二ノ一神戸衛生實驗所
本郷區西片町一〇
麴町區永樂ビル安田保善社
芝區白金臺町一ノ七一

百崎俊雄
西脇濟三郎
大橋新太郎
大倉和親
大島富士太郎
小野俊一
淺澤榮一
鹽原又策
志立鐵次郎
田島道治
田中銀之助
田中辰三
長馬悦藏
長馬も舞
鶴崎平三郎
山極勝三郎
安田善次郎
八十島誠之



本郷區森川町一宮裏
 神田區駿河臺鈴木町二五
 本郷區弓町二丁目三四
 本郷區湯島新花町九五
 麴町區一番町一三
 京橋區木挽町三丁目二一
 小石川區林町四
 同所
 東京帝國大學醫學部吳内科醫局

Kノ部

神田區駿河臺南甲賀一三
 東京帝國大學醫學部吳内科醫局
 四谷區慶應義塾大學醫學部病理細菌學教室
 四谷區慶應義塾大學醫學部產婦人科醫局
 小石川區鶴籠町二五三
 小石川區久堅町六九
 日本橋區本町一ノ一二
 本所區向島請地町一七九
 麴町區一番町三八
 赤坂區青山南町五ノ三七
 本郷區龍岡町二二
 麴町區四番町三

石川正臣
 入澤達吉
 稻田龍吉
 磐瀬雄一
 岩佐新
 池田悅次郎
 池田泰雄
 池田三雄
 一色嗣武

金杉英五郎
 金子義晃
 川上漸
 川添正道
 神尾友修
 柏木正俊
 菊地循一
 河野敦信
 木村德衛
 木村哲二
 木村敬義
 木下正中

Mノ部

麻布區仲之町一九
 本郷區龍岡町二三
 神田區駿河臺南甲賀町一〇
 芝區愛宕下町四丁目一
 神田區駿河臺袋町一〇
 芝區白金今里町七七
 本郷區西片町一〇ホ三三
 麻布區本村町四四
 京橋區築地聖路加國際病院
 本郷區本郷五丁目三二
 神田區東京齒科醫學專門學校病理學教室
 赤坂區青山南町六ノ一三五
 牛込區砂土原三ノ二〇
 神田區裏猿樂町三ノ四〇
 東京帝國大學醫學部病理學教室
 芝區愛宕町三ノ一
 本郷區上富士前町七八
 小石川區丸山町二一
 本郷區追分町二〇
 牛込區新小川町三ノ四
 小石川區原町一〇六

北里榮三郎
 近藤潤平
 近藤次繁
 久保德太郎
 吳建
 草間滋
 小林幹

松山陸郎
 松岡久作
 丸山正
 正木正
 三内多喜治
 三田村篤志郎
 三輪信太郎
 三和功
 宮原立太郎
 宮川米次
 村上幸多
 向井又吉
 森安連吉
 茂貫利次

○會員名簿

○會員名簿

●特別會員

牛込區餘丁町三五

京都帝國大學醫學部病理學教室

●通常會員

●在東京

Aノ部

小石川區原町一二五

四谷區新宿東京鐵道病院外科

神田區淡路町二ノ四

本郷區駒込千駄木町五四

本郷區弓町二丁目二四

麹町區富士見町五ノ二三

四谷區荒木町二七

慶應醫科大學病理細菌學教室

麹町區陸軍軍醫學校

東京帝大醫學部病理學教室

Cノ部

淺草區左衛門町二

Fノ部

田村寬貞
小喜多晴雄

阿部喜市郎
阿部養夫
阿久津三郎
兄子四郎
青山徹藏
朝倉文三
淺見忠衛
有馬宗造
秋山練造
東山俊郎

千葉眞一

本郷區駒込西片町九
本郷區弓町二ノ二四
東京帝國大學醫學部青山外科醫局
麻布區市兵衛町二ノ六一

Hノ部

赤坂區青山北町六ノ四二

芝區琴平町三

芝區柴井町三

京橋區南鍋町一ノ四

東京帝國大學醫學部吳内科醫局

牛込區排天町七四

本郷區駒込東片町九七

四谷區南伊賀町一八

芝區西久保城山町八

麻布區永坂町六八

日本橋區濱町二ノ一

牛込區矢來町八、一號

麹町區富士見町一ノ二九

Iノ部

東京帝大醫學部法醫學教室

二

富士川游
福士政一
福田保
藤井保

堀田四郎
堀内彌二
細野順
本田雄五
本間純
林賀太
林賀太郎
芳賀榮次
樋口繁次
平山金藏
平石貞市
平井政道
八田善之進

石原房雄

Uノ部

麻布區山元町五九

Wノ部

京橋區越前堀一丁目四

Yノ部

牛込區北山伏町四三

本郷區湯島順天堂病院

京橋區南紺屋町二四

麻布區櫻田町三〇

牛込區余丁町一二

芝區愛宕町東京慈惠會醫科大學研究所

小石川東大醫學部分院

●在地方

Aノ部

東京市外北多摩郡砧村喜多見二七〇

千葉市西院内一三六一足立方

長野縣屋代驛前

○會員名簿

上野信四郎

和田劍之助

横森賢次郎

横田利邦

吉川春次郎

吉本清太郎

八代豐雄

山川保城

山川保城

雨宮量七郎
足立亨太郎
足立修

仙臺市北二番町五〇

長崎市新町二

千葉縣香取郡佐原町

Fノ部

熊本市新町三ノ四九

京都帝國大學醫學部病理學教室

神戸市兵庫縣立病院胃腸科

金澤醫科大學法醫學教室

朝鮮釜山獸疫血清製造所

東京府下西大久町三六六

Gノ部

宇都宮市江野町三一一

Hノ部

京都府立醫科大學病理學教室

府下豐多摩郡井荻町上荻窪五〇三

愛知醫科大學病理學教室

府下荏原郡田園調布三〇七

大阪市東區高麗橋詰町三八

東京府下松澤村上北澤八五七

臺灣臺北醫院外科

青木 義
淺田 爲
熱田 健

藤井 壽松

藤瀬 鑑

藤瀬 喜代藏

古畑 種基

福島 俊行

二本 謙三

後藤 健介

濱田 稻穂

原田 定次

林直 助

林春 雄

廣瀬 豐一

平田 萬次

本名 文任

○會員名簿

赤坂區檜町一

Nノ部

麻布區市兵衛町二ノ八八
小石川區駕籠町二三八
東京帝大醫學部病理學教室
下谷區下根岸七六
四谷區東信濃町二八
赤坂區青山北町五丁目二
小石川區大塚仲町四一〇ノ七號

Oノ部

小石川區丸山町一九
小石川區小日向臺町二丁目二六
東京帝大醫學部病理學教室
慶應醫科大學產婦人科
麴町區三番町三六
神田區駿河臺鈴木町一五
四谷區西信濃町一一
東京帝國大學醫學部病理學教室

Sノ部

南大曹

長與又郎
中原和郎
中山信雄
西野忠次郎
西井烈
仁田直

大槻菊男
大場勝利
大沼貞藏
大串市左衛門
岡田和一郎
小畑惟清
小此木修三
緒方知三郎

芝區今入町三

神田區駿河臺北甲賀町一一
神田區駿河臺南甲賀町七
小石川區駕籠町二二九
四谷區尾張町七
麴町區中六番町二四
本郷區湯島天神町二ノ一二
本郷區弓町一ノ一〇
小石川區大門町一七
本郷區駒込千駄木町五〇
本郷區丸山新町二
京橋區加賀町九東西醫學社
東京帝國大學醫學部病理學教室
本郷區西片町十に三十八號
神田區錦町三ノ一

Tノ部

麻布區森元町一丁目二七
麻布區東島居坂町一三
本郷區森川町一宮前
東京帝大醫學部病理學教室
四谷區三光町一
京橋區築地聖路加國際病院

四

佐藤敏夫
佐々木政吉
佐々木隆興
佐藤三吉
佐藤達次郎
佐藤亨
澤木富次郎
鹽田廣重
鹽谷不二雄
島蘭順次郎
篠田紉
下瀬謙太郎
鈴木誠一
佐伯誠一
杉本東達

高橋信
高木喜寬
田代義德
丹後正雄
竹內甲平
トイヌラ

静岡縣田方郡土肥村土肥四二〇
德島市寺町古川病院
新潟醫科大學病理學教室

Mノ部

廣島市縣立廣島病院
新潟市東堀前通七番町
富山市殿町三
千葉醫科大學病理學教室
東京府下瀧野川町上中里二〇
熊本市北千反畑町二五
市外日黒町三田四〇
大阪醫科大學病理學教室
東京府下澁谷町日本赤十字社病院病理部
横濱市山下町二四〇
名古屋鐵道病院內科
相州鎌倉大町辻二三〇二
兵庫縣武庫郡今津町
三重縣三重郡羽津村羽津病院
市外瀧野川町歌疫調査所
京都市上上京區高倉丸太町下ル

Nノ部

○會員名簿

小室 英史
古川 次郎
小山 正道

町井 剛
前田 待三
松井 捨八
馬杉 復三
宮入 清四
三田 角
三田 定則
村田 宮吉
水野 禮司
村山 小七郎
武藤 昌知
向山 孝之
百瀬 一
森田 正一
森田 平治
望月 惇一

Oノ部

京都市上京區中立賣通室町西へ入
高田市高田病院
金澤醫科大學病理學教室
大分縣別府市中村病院
東京府下調布町村田田園都市二九八號
京都府立醫大病理學教室
神奈川縣中郡平塚村杏雲堂分院
横濱市太田町九ノ九八
南館區船見町六三
兵庫縣武庫郡西宮今津町東中畑
市外大森町帝國女子醫學專門學校
京都市寺町通鞍馬口上ル
東京府荏原郡入新井村不入斗一四八二
九州帝國大學醫學部第二外科
東京府下向島寺島一七四
群馬縣新田郡太田町一八三
久留米市田町三八尾岡病院內
大阪市北區靈屋町二ノ十一
大阪市南區新町三丁目緒方病院
府下千駄ヶ谷町千駄ヶ谷警察署
名古屋市愛知醫科大學病理學教室

中西 龜太郎
中本 完二
中村 八太郎
中村 龜市
中濱 東一郎
中野 操
永野 重業
西川 恒彌
西村 安敬
西 業
額田 晋

岡室 德之助
岡本 武次
岡部 養逸
岡本 陽七
岡 文造
尾關 正應
尾池 元太郎
緒方 收二郎
大嶺 三郎
大島 福造
七

○會員名簿

姫路市日本赤十字社兵庫支部病院
京都府立醫科大學病理學教室
長崎醫科大學病理學教室
大津市日本赤十字社支部病院

Iノ部

北海道帝國大學農學部比較病理學教室
新潟縣中蒲原郡新津町
大阪醫科大學肺癆科教室
市外大森町八景園坂上
朝鮮京城大和町二ノ二四
熊本市船場町
橫濱市相生町三ノ五二關東病院
長崎醫科大學病理
府下豐多摩郡千駄ヶ谷八九〇
千葉縣千葉町新町
京都市堺町三條上ル
東京市外中野町字大塚一七四四
千葉縣香取郡楠村
朝鮮咸南新浦港
支那北京日華同仁醫院

Kノ部

飯島	伊藤	石橋	石原	猪子	井上	井深	井手	池田	池松	稻本	稻垣	今村	今井	市川	本田	本田	本田
庸	岱	松藏	喜久太郎	戈之助	善次郎	健次郎	政雄	武雄	龜五郎	長次郎	荒雄	荒雄	荒雄	厚一	郁也	郁也	蘭

新潟市學校町通二番地
千葉縣安房郡館山町
岡山醫科大學病理學教室
北海道小樽區入船町
府下杉並町阿佐ヶ谷
神戸市山手通五丁目
橫濱市十全病院
香川縣綾歌郡陶村
熊本醫科大學眼科教室
靜岡縣小笠郡土方村
京都府立醫科大學產婦人科
仙臺市北六番町二三〇
大阪市南區鹽町四ノ九
函館市富岡町五
千葉縣安房郡北條町六軒町
京都帝國大學醫學部微生物學教室
山口縣厚狹郡宇部新川
島根縣立病院婦人科
和歌山縣伊都郡信太村田原
神奈川縣橋樹郡稻田村登戸
北海道帝國大學醫學部病理學教室
東京府下瀧野川町西ヶ原王子腦病院
秋田縣由利郡本莊町中堅町五二

小柳	小峯	今	隈	久保	藏光	國重	清野	貴家	木村	木村	木村	木村	加藤	鹿兒	香川	片山	桂田	河北	河村	河村	川村	川村
千足	茂之	八郎	八郎	久雄	長次郎	嘉吉	謙次	學而	孝藏	男也	嘉一	嘉一	安吉	茂	壽	壽	士郎	真太郎	百合人	九十九	博夫	麟也

高松市五番町

愛知醫科大學血清化學教室

東京府下大森町二二

山口郡阿武郡萩町

市外中野町字上町二六一八

長崎醫科大學病理學教室

京都府立醫科大學病理學教室

東京府下大森山王二五七一

三重縣四日市市沖ノ島局前通二丁目

東京府下豐多摩郡千駄ヶ町字新町裏八九〇

府外中澁谷四七守川方

Uノ部

大阪市北區曾根崎町一丁目大同病院外科

京都府立醫科大學病理學教室

東京府下平塚村小山七七

Wノ部

越後若井郡村上本町字飯野

東京市外駒澤町上馬込七五四

朝鮮京城貞洞二

○會員名簿

Yノ部

臺灣總督府醫學專門學校病理學教室

名古屋市南區熱田神宮東門前三本松

福岡市外千代町崇福寺新町

臺灣總督府醫學專門學校病理學教室

大阪市東區今橋三丁目

宮城縣栗原郡一迫村直坂

府下世田ヶ谷町太子堂三五〇

八木金之丞

山本英忠

山本耕橋

横川定

湯川玄洋

吉澤運之助

吉村市郎

名譽會員

特別會員

市內會員

地方會員

計三一九名

三 四名

二 名

一 七名

一 六六名

和合平之助

和合千穂

白井宏

梅原信正

上田寛一

渡邊慶太郎

和合平之助

和合千穂

戸塚文雄

鶴田禎次郎

塚本亮太郎

月岡道保

角田隆

竹内清

竹内琢磨

玉木丞輔

藤沼憲二

瀧澤太一

多田羅正俊

○會員名簿

八

札幌市北十六條西五丁目
北海道空知郡歌志内市街地
東京府下高田町雜司ヶ谷龜原五三
豐橋市中世古西ノ又二十二

Sノ部

新潟市營所通二番町
兵庫縣武庫郡御影町郡家上田九〇ノ三ノ一號

朝鮮龍山一四〇ノ四
靜岡縣沼津市添地一五一
府下東大久保町東京醫學專門學校病理學教室

下關市田中町二四八
府下澁谷町下澁谷一一七
東京府下阿佐ヶ谷町九四
宮城縣村田町
大阪市北區堂島北町一一
仙臺市東二番町磯田内科醫院
京都市上京區小川通御池南
東京市外代々幡代々木西ヶ原一〇〇一
大阪市東區北濱四丁目四六
朝鮮鎮海番號官舍甲第四號

大野 精七
小原 正生
小野 勝太郎
奥谷 廣光

澤田 敬義

佐々木 達

佐々木 四方志

佐々木 二郎三郎

佐々木 雄

佐々木 治

佐々木 恒丸

佐々木 清

佐々木 長治

佐々木 愛彦

佐々木 幸三

齊藤 大雅

櫻井 明治

櫻根 孝之進

新潟醫科大學病理學教室
福島縣白河本町白河病院
札幌北一條西一〇一
Memorial Hospital, Central Park West, New York City U. S. A.
仙臺市堤町二七
宇和島市立病院
朝鮮總督府醫院
熊本醫科大學病理學教室
東京府下大崎町下大崎一〇六
京都府立醫科大學耳鼻研究科
橫須賀市若杉町七三
大阪市南區北桃谷町三五
大阪市東區道修町四ノ二
神奈川縣茅ヶ崎
奉天滿洲醫科大學內科
北海道帝大農學部比較病理學教室
秋田縣湯澤町
相州小田原十字二丁目
201 n. San Pedro street Los Angeles California U. S. A.

Tノ部

關 守男
關 格之介
關 場不二彦

杉浦 金松

杉村 七太郎

末安 吉雄

志賀 潔

鈴木 江

蘭部 孝一

蘭部 繁草

高橋 敬三

高 謙一郎

高 道成

高 田 研安

高 森 時雄

高 田 幸二

田 中 敬助

田 中 廣志

田代 規矩雄

昭和三年十二月十一日印刷
昭和三年十二月十四日發行

癌

邦文(歐文抄録付)年四回發行

一册正價金壹圓五拾錢

一册郵稅金四錢

東京市麻布區市兵衛町二ノ八八

編輯者兼

長 與 又 郎

印刷者

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
柴 山 則 常

印刷所

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
合資會社 杏 林 舍

東京市本郷區本富士町二番地

東京帝國大學醫學部病理學教室內

發行所

社團法人

癌 研 究 會

振替東京參〇〇七一番